

# 近代日本の政治的文学者と国文学的ナショナリズムの諸相：沼波瓊音、三井甲之、久松潜一の学問と思想

木下，宏一

<https://doi.org/10.15017/1807127>

---

出版情報：九州大学, 2016, 博士（学術）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：全文ファイル公表済



KYUSHU UNIVERSITY

近代日本の政治的文学者と国文学的ナショナリズムの諸相  
—沼波瓊音、三井甲之、久松潛一の学問と思想—

九州大学大学院地球社会統合科学府

木下宏一



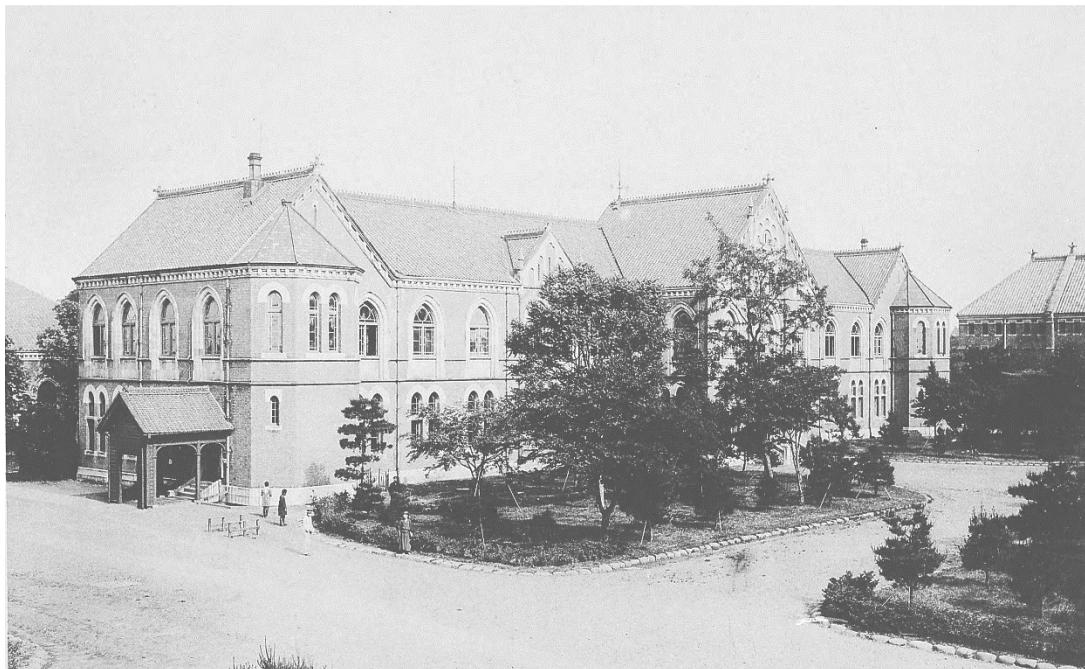
三井甲之（明治 40 年頃）

『三井甲之存稿』（三井甲之遺稿刊行会、昭和 44 年 4 月）より



沼波瓊音

『七面鳥』（春陽堂、大正 2 年 10 月）より



東京帝国大学法科大学文科大学棟（上）／同棟内（下）  
『東京帝国大学』（小川写真製版所、明治 33 年 4 月）より



久松 潜一  
『時事新報』（昭和 6 年 12 月 23 日 6 面）より



# 目次

	序論	1
	一 論文の課題	
	二 基本視座の確認	
	三 直接考察対象と論文の構成	
	第一章 沼波瓊音の学問と思想	18
	第一節 個人から全体への道程	
	一 はじめに	
	二 キヤリア形成	
	三 国文学者は「不思議なる宇宙」を驚いたか	
	四 へ始めて確信し得たる全実在」とは何か	
	五 世外への逸脱	
	六 個人的思考からの脱却	
	第二節 国文学的ナショナリズムの萌芽	42
	一 再び国文学者として	
	二 ナショナリズム実践運動へのめざめ	
	三 国文学者は国家革新の夢を見たか	
	四 「新国学」の建設に着手	
	五 東京帝国大学講義「日本精神ト国文学」	
	六 更なる前衛へ、終焉	
	七 小結	
	第二章 三井甲之の学問と思想	77
	第一節 反漱石とヴァント心理学の受容	
	一 はじめに	
	二 文学的出发	

三 反漱石とヴァントの個人心理学（実験心理学）  
四 ヴァントの民族心理学と「民族的生活」へのめざめ  
五 日本はほろびず

## 第二節 親鸞思想の特異的受容

108

一 三井甲之と親鸞

二 宗祖から教祖へ

三 南無・阿弥陀仏から南無・祖国日本へ

## 第三節 三井流国学の思想

130

一 「しきしまのみち（ことのはのみち）」..言語論

二 「中今／永遠の今」..時間論

三 小結

## 付章 久松潛一の学問と思想

155

一 久松潛一と「新国学の四大人」

二 久松潛一と沼波瓊音

三 国文学から国学への志向

四 久松潛一と三井甲之

五 戦後の久松潛一

## 総論

194

一 まとめ  
二 今後の課題

## 初出一覧

202

## 凡例

一、慣用にしたがい、東京帝国大学は「東京帝大」または「帝大」と、国文学および国文学科は「国文」と隨時略記した。

二、論文中の人名について、敬称は全て省略し、一般的に歴史的人物とみなしうる者には各章本文での初出時に西暦で生没年を付記した。ただし、現役の研究者や引用文献の著者・編者、書籍・雑誌・論文の題名中の人名、「○○事件」「××主義」「△△派」「第一次□□内閣」といった記号的はこの限りでない。

三、論文中の事象・事件や引用文献の発行年月等は元号表記を基本とし、必要に応じて次のように略記した。

明治○年→明○

大正×年×月→大×・×

昭和△年△月△日→昭△・△・△

平成□年□月→平□・□

### 四、

引用文について、仮名遣いは「ゑ(こと)」等の合略仮名を除き原文通りに記載し、漢字は「國男」「興重郎」「澤瀉」「國學院」「文藝春秋」「滿洲」「歐洲」等一部の固有名詞を除き常用漢字表に対応する旧漢字は新漢字に改めた。

五、引用文中の漢字には、必要に応じて「亞細亞」や「又た」などのルビを加えた。また元から振られていた傍点やルビに関しては、例えば「夏目漱石」や

「國土」など作者固有の意図が伺われるもの以外は適宜省略した。

六、引用文中の「」内は全て引用者による補注である。また「：：」は、佐藤望他編著『アカデミック・スキルズ 大学生のための知的技法入門』（慶應義塾大学出版会、平一八・一〇）中の「各種記号の使用法」（一五一頁）に準拠して「中略」または「以下略」を表す。

七、文末脚注は各章各節ごとに（1）から番号を付した。

八、引用文献の表記について、著者・編者名は私信を除き本名ではなく筆名（瓊音、甲之、漱石等）で統一した。また、著者・編者複数の場合は代表著者・編者名のみ記載し、雑誌や新聞は発行元・学会名・巻号等を省略した。

九、同じ文献を一ブロックの注のなかで複数回引用する場合、二度目以降は次のように副題、出版社名、掲載誌名、発行年月等を省略した。

○○前掲『』を参照。

△△前掲『』××頁。

十、引用箇所の頁表記について、『全集』『著作集』『選集』等初出時と異なる文献の場合（いわゆる二次引用）は…<sup>ヨロシ</sup>を用い、例えば次のように記述した。

丸山眞男「歴史意識の『古層』」（『日本の思想第六／歴史思想集』筑摩書房、昭四七・一一）・『丸山眞男集 第十卷』（岩波書店、平八・六）○○頁。

## 一 論文の課題

本博士論文は、近代日本の帝国大学——明治一九（一八八六）年三月設立、明治二〇（一八九七）年六月東京帝国大学に改称——を頂点とする官学アカデミズムにおける文学、就中「国文学」の土壤から産み出された政治的文学者<sup>(1)</sup>たちの学問と思想について論じるものである。

近代国文学固有の学問性・思想性に関する研究は、アンダーソン（Benedict Anderson, 1936-2015）の「想像の共同体」論やサイード（Edward Said, 1935-2003）<sup>①</sup>によるポストコロニアリズムの理論と批評が膾炙しそゝから改めて帝国主義国家としての近代日本の学問・思想・国民文化の総括が問題になり始めた一九九〇年代半ば頃から徐々にあらわれ、以来今日まで少なからぬ論考が蓄積されている。特に意義深いとみられるのは、品田悦一、ハルオ・シラネ、鈴木貞美らによる、『古事記』『万葉集』『源氏物語』『太平記』など現代においても一般的な日本人の古典が実は明治中・後期における国民国家の形成過程において芳賀矢一（一八六七—一九二七）をはじめとする官学アカデミズムの国文学者たちの手で国民統合——ナショナル・アイデンティティの確立——のための「文化装置」として「発明」された、きわめてポリテイカルな意味合いを含んだ所産物であることを明らかにした一連の研究である<sup>(2)</sup>。

他にも、藤井貞和、村井紀、杉山康彦、坪井秀人らは、満洲事変の勃発（昭六・九・一八）を起点とするいわゆる「十五年戦争期」に「専門の古典文学」を「国策に提供してあやしむことがなかつた」（村井）という官民の国文学者たちの言説と行動を問題視し、従来どこかうやむやにされて来た「国文学の戦争責任そのもの」の所在を鮮明に浮き彫りにしてみせている<sup>(3)</sup>。

更に近年では、 笹沼俊曉のように、明治期以来の国文学研究の在り方の変遷を「世界文学（万国文学）／比較文学」という西欧起源のグローバルな文学研究の概念に対する国文学者たちの葛藤（受容ないし反発）を中心 に検討し、結果的に一国文化主義的な研究の枠組を脱し得ぬままに戦後をながらえた国文学の二十一世紀の今日における存在意義の消失にまで論じ至つた刺激的な研究も生まれている<sup>(4)</sup>。

これらの優れた先行研究によつて、昭和戦前期の国策協力に畢竟収斂される近代国文学とナショナリズムの本質的な親和性は、ほぼ検討され尽くしたといつてもよいであろう。今後は、近代国文学における個々の学知が日本主義、国家主義、民族主義、一国中心的アジア主義、等々、同時代のナショナリズム<sup>(5)</sup>の諸潮流といつどのように結び付き、変容を遂げ、アカデミズムの内外でどのように機能したのか<sup>(6)</sup>という、文学史・思想史（宗教、政治、社会）を横断したより総合的かつ実証的な研究が求められる。

かかる課題設定において、本論文はまず試論として、当時の最高学府にして「御用学問の牙城」<sup>(7)</sup>といわれた東京帝国大学で国文学を専修しその

後の歩みのなかで最もナショナリズムに接近・融合したと認められる数名を取り上げ、それぞれの学問・思想の特質と共通点を考察する。

## 二 基本視座の確認

最初に、論文全体の基本的な視座を、近代日本の官学アカデミズムにおける国文学の成り立ちに沿って確認しておきたい。

周知の通り水戸学とともに維新・王政復古の精神的原動力となつた近世の国学は、当初こそ明治新政府の直轄学校たる昌平学校とその後身の大学校において新しい国家を牽引する筆頭学問<sup>(8)</sup>に位置付けられた——「神典国典ニ依テ国体ヲ弁ヘ兼而漢籍ヲ講明シ実学実用ヲ成ヲ以テ要トス」（「法令第五百三十九／大学校規則」明二・六・一五 達）——が、旧幕時代の筆頭学問であった漢学とのヘゲモニー争いや西欧の文物を範とする洋学・実学の台頭によつて徐々に社会的需要はせばまり、一時は「世の中から捨てられたやうな傾にな」（<sup>9</sup>）つた。それでも、小中村清矩（一八二一一一八九五）をはじめとする非平田派系国学者たちの熱意と努力によつて旧・東京大学（明一〇・四 発足）や皇典講究所（明一五・一一開所）に命脈を保ち続けた官学としての国学は、やがて「帝国大学令」（明一九・三・一 公布）の第十条を以て設置された帝国大学文科大学のなかで「和文学」として再出発することになる（<sup>10</sup>）。大まかな流れは以下の通りである。

昌平学校（慶応四／明元・六 幕府昌平坂学問所を改組）→大学校（明

二・六 昌平学校を改組、明二・一二 大学と改称、明三・七 閉鎖）：

一時断絶：旧・東京大学文学部第二和漢文学科（明一〇・九 開設、明

一四・九 第三和漢文学科に改称) → 同大学文学部古典講習科(明一五・五附設) → 帝国大学文科大学和文学科(明一九・九 開講) (1)

和文学科は四期目の明治二二(一八八九)年度から「国史科」を分離し「国文学科」と名称を変え、同時にそれまでの学科専修科目たる「和文学」も日本の言語そのものを取り扱う「国語」とその国語の文化的運用形態を取り扱う「国文」の一領域に明確化<sup>(1-2)</sup>され、更に上田萬年(一八六七—一九三七)の建議による国語研究室の開設(明三〇)(1-3)以降は研究環境も別個に整備されていった。元々国学は、古史・古伝・古典籍に加えていにしえの「政治・理財・法制史」などを包括的に講究する「古道の学・有職の学」であった<sup>(1-4)</sup>が、官学アカデミズムの範疇に組み込まれた段階でそうした総合性を捨象し西欧の学術体系に倣つて「国語(National Language)学」「国文(National Literature)学」「国史(National History)学」と専門別に細分化した<sup>(1-5)</sup>のである。

)のような制度的変遷を経て生まれた官製国文学であったが、当初からその存在は、政治・軍事・経済・産業諸機構の迅速な近代化という国是(富国強兵)のもと「國家ノ須要ニ応スル學術技芸ヲ教授シ及其蘊奥ヲ攷究スル」(「帝国大学令」第一条)ことを唯一至上の目的とした帝國大学<sup>(1-6)</sup>にあって、決して目立つたものではなかつた。同じ文科大学のなかでも、官公文書の正式な文体が漢文訓読体であつたことなどからエリート階級の教養基盤として一定の需要があつた漢(文)学<sup>(1-7)</sup>、主要な外国語を駆使する英・独・仏の西洋文学<sup>(1-8)</sup>、西洋文明の本質(世界観・人間観・倫理観)を理解する上で不可欠な哲学、中央集権的な国

民國家統合の基礎となるべき標準語の形成を司る博言学（言語学）や国語学<sup>(1)9</sup>、国家存立の正統性（王政復古）を担保する正史の編纂（修史）事業を当初の主務とした国史学<sup>(2)0</sup>、あるいは万邦無比なる「國体ノ精華」（「教育ニ関スル勅語」明二三・一〇・三〇 発布）を欧米社会におけるキリスト教のようにより軌範的な国民道德・国民宗教<sup>(レリジョン)</sup>へと整序する役割を期待された教育学や倫理学、宗教学<sup>(2)1</sup>などに比べて、かつての国学の仕事をそのままコンパクト化したかのように古典籍の訓詁註釈を第一義<sup>(2)2</sup>とした国文学は、立身を志し向学心に燃える青少年層にとってはいかにも悠揚として保守的にみえたことであろう<sup>(2)3</sup>。

じつさい、スペンサー（Herbert Spencer, 1820-1903）の社会進化説の熱心な祖述者で日本語改良論（漢字廃止・ローマ字採用）を唱えた初代文科大学長（明一九・三・明三〇・一一）の外山正一（一八四八一九〇〇）は、旧・東大古典講習科の系譜を引く和（国）文学科・漢文学科の存立意義を軽視し関係者をことゝとく冷遇したといわれ<sup>(2)4</sup>、後任の学長選出にさいしても教授会では、国・漢両科の教員は「無論学長の事務なんというものは孰れない」として頭から候補に上らなかつたという<sup>(2)5</sup>。また第二代学長（明三〇・一一・明三七・三）に選出された井上哲次郎（一八五六一九四四）も、この頃は進歩的立場をとる洋行帰りの哲学者であり、かねて木村正辞<sup>(まさえじ)</sup>（一八二七一九一三）、黒川眞頼（一八二九一九〇六）、物集高見（一八四七一九二七）、根本通明（一八二二一九〇六）など学内外の錚々たる国（文）学者・漢（文）学者たちを「未だ科学的研究の何たるを知らざるもの、蓋し多きに居るなり。〔…〕尚ほ古代の旧株を墨守する

ものにて、實に恥辱を遺すの呆痴漢と謂ふべし」<sup>(26)</sup>と公然嘲弄するような人物であった。

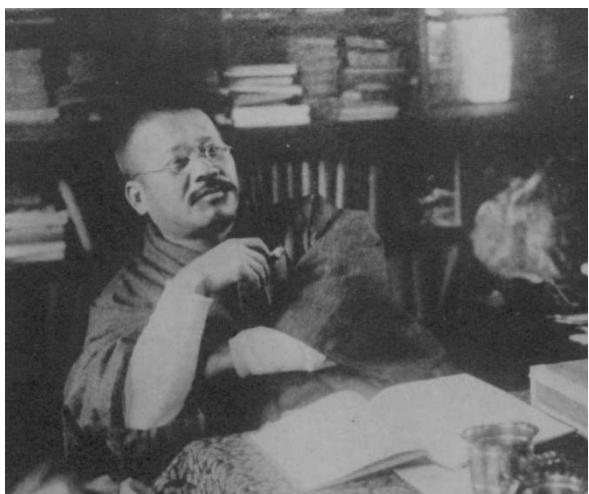
その後、国文学科生え抜きの俊英（明二五・七卒業、明二五・九、明三〇・七大学院在学）としてドイツに官費留学（明三三・九、明三五・八）した芳賀矢一によつて西欧文献学（Philologie）の最新知識と方法論が導入され、国文学は「日本文献学」という別称を得て、ようやく近代学術の実質に値する形式と目的を確立する。

西洋学者はフイロロギーと称して、文献を本にして、其国を研究します。日本で言へば、国語国文を本にして、其の国を研究するのです。国学者が二百年來やつて來た事は、つまり日本のフイロロギーであつた。余等は已往二百年間の諸先哲の研究を基として、合理的に、比較的に、歴史的に其上に、新研究を添へねばならぬ。<sup>(27)</sup>

以降明治三〇年代後半から四〇年代にかけての、芳賀と彼の二期後輩でよき女房役でもあつた藤岡作太郎（一八七〇—一九一〇）の学内外での精力的な研究・教育・啓蒙活動<sup>(28)</sup>によつて、国文学は地味ながら着実にその存在感を高めていった。なかでも芳賀が一般向けに書き下ろし、「我民族の美德の底には亦必ずその欠点の潜んで居ることも知らねばならぬ」とごく健全なバランス感覚に則つて「よく我過去を知つて、よく新来の長所を探る覚悟」<sup>(29)</sup>を説いた『国民性十論』（富山房、明四〇・一二）は高い評価を受け、国民的名著として昭和一〇年代まで継続的に版を重ねている。

明治の国文学は小中村清矩氏等を先駆とし出発点として、芳賀博士によつて第一の成立を見たのである。〔…〕それ以後の国文学は芳賀博士を枢軸として発展した。(30)

しかるに、そうした彼ら（藤岡は中途で夭逝）の熱意と労苦にもかかわらず、近代国家体制のなかでは、個人の趣味嗜好<sup>(31)</sup>は別として直接的な有用性・実利性のみえにくく、国文学の学知を現実に活かすすべは初等中等教育の現場以外にはほとんどないというのが実状であった<sup>(32)</sup>。大正六（一九一七）年から翌年にかけて学界・文壇・論壇をにぎわした芳賀の法科万能主義排斥論は、国家・社会一般における帝国大学法科大学出身者偏重の傾向——官公・企業等の要職独占——に公然と異議を申し立てたもの<sup>(33)</sup>であるが、その根底には「法理文」または「法医工文」という國家の定めた長年の学問序列<sup>(34)</sup>に対する国文学者ならではの本質的な反発と矜持——「我が文科の發展は即ち我が國家の發展である」<sup>(35)</sup>——が如実にみて取れる。



芳賀矢一

『芳賀矢一先生』（同記念会、昭和12年3月）より

明治・大正期に東京帝国大学で芳賀の指導を受けた国文学専修の学生たちは、各自程度の差こそあれ、師の国文学をして真に「國家ノ須用ニ応スル學術技芸」（「帝國大學令」明治三十二公布、第一条）たらしめんとする強い志向——「今後の日本は、我が国の古典を基礎として治

教の根本を立てねばならぬ」<sup>(3-6)</sup>——を自明の事柄として学んだ。そのなかでも特に感受性の強い一部の者は、意識的であれ無意識的であれ与えられた“使命”を忠実に内面化・規範化<sup>(3-7)</sup>し、国文学に関するみずから専門知識を現実の国家運営や統治支配に少しでも寄与し得るものに製錬すべく試行を重ねていくことになるのである。

### 三 直接考察対象と論文の構成

上記の視座に立つて、本論文は、東京帝国大学で国文学を専修し社会的にも一定以上の知名度を有した三人の文学者（学者または評論家）、沼波瓊音（本名武夫、一八七七—一九二七）、三井甲之（本名甲之助、一八八三—一九五三）、久松潛一（一八九四—一九七六）を直接の考察対象として選定する。以下、論文全体の構成を示す。

本論文は、「序論」「本論」そして「本論」で得た知見をまとめ併せて今後の課題を提示する「総論」で成り、「本論」は大きく三章から構成される。

「本論」第一章では、蕉風を中心とする俳諧研究で知られ、晩年には東京帝国大学文学部講師・第一高等学校教授もつとめた沼波瓊音に焦点を当てる。芳賀矢一、藤岡作太郎に次ぐ東京帝国大学の国文第二世代として制度的に確立された「国文学科」に学んだ沼波が、明治後期から大正初期にかけて直面した種々の哲学的・宗教的煩悶と大正中期（第一次世界大戦終結前後）を境目とする劇的な右傾化——「革新右翼の源流」<sup>(3-8)</sup>と評される「猶存社」系の国家主義運動への全的没入と新たな「国学」の提唱——の

軌跡を諸史料・資料を基に跡付け、その起伏に富んだ言説と行動が結果として官学アカデミズムの国文学にもたらした影響について考察する。

次に「本論」第二章では、歌人・評論家にして戦前右派論壇の一翼を担う存在であった三井甲之に焦点を当てる。沼波瓊音に次ぐ東京帝国大学の国文第三世代として新たに編成された「文学科」で比較的自由なスタイルで国文学を学修した三井の明治後期から昭和初期にかけての学問・思想形成を「反漱石」「ヴァント心理学の受容」「親鸞思想の受容」という三つの論点から分析し、それらの総合的完成態である三井流国学——彼自身は「国学」という語をあまり用いずもっぱら「しきしまのみち（ことのはのみち）」と称した——の内実と同時代的影響について考察する。

次に「本論」付章では、東京（帝国）大学文学部教授として戦前・戦後を通じ長らく日本の国文学界全体を領導する存在であった久松潛一に焦点を当てる。久松があたかも太平洋戦争／大東亜戦争開戦（昭一六・一二・八）とタイミングを合わせるかのように提示した、

今日の国学に於て先づ求められるのは日本の学問の伝統を顧み、日本的学問の系譜を跡づけることであるのである。「……」芳賀「矢一」博士の学問の伝統は今日に至るまで貫いて居るのであるが、「……」三井甲之氏、沼波瓊音氏の学問精神の中にもかういふ伝統はうかつがれて居るであらう。「……」この伝統の上にこそ真に自主的な日本学問が確立されるであらう。（<sup>39</sup>）

という先行研究が見落とした系譜に注目し、そこに挙げられた沼波と三井が「現代に於ける新国学の主なる提唱者」（<sup>40</sup>）と謳われた久松の戦前の学問と思想に各々どのようななかたちで影響を及ぼしていたのかについて考察する。本章の考察を通して、沼波瓊音、三井甲之、久松潛一、三人の政治的文学者をつなぐ学問的・思想的縦軸としての「新国学」が浮き彫りとなろう。

因みに「新国学」と聞いて今日一般的に想起されるのは、日本の土俗・民俗研究の本格的創始者として知られる柳田國男（一八七五—一九六二）によつて昭和初期に提唱され折口信夫（一八八七—一九五三）ら國學院系の学者たちによつて深化された、神道教理色の強い「新国学」ではないだろうか。本論文で取り扱う「新国学」とは、あくまで東京帝大國文独自の学問的・思想的展開のなかから生まれたものである。先行研究も、三枝康高『日本浪漫派の群像』（有信堂、昭四二・四）および安田敏朗『国文学の時空——久松潛一と日本文化論——』（三元社、平一四・四）における論及を除けばほとんどみられず、現在でも多くの研究者によつて論及される柳田・折口の「新国学」とはあらゆる点で対極に位置する。何となれば、日本人の精神性（国民性）の本質を、前者は総じて「力強さ正しさ」に見出しそこから「國家ノ須用ニ応スル」ことを念頭に現実の国策との一体化を志向し、後者は「弱さはかなさやさしさ」に見出しそこから国家の論理にストレートに回収されない古の共同体を志向した（<sup>41</sup>）。この差異はあらかじめおさえておきたい。

注

(1) 一般に「政治的」とは「①政治に関するさま。②事務的でなく、実情にあつたかけひきをするさま。③かけひきにたくみなさま。」と、「文学者」とは「①文學を創作する人。詩人・作家・文學評論家など。②文學の研究者。」と定義される。新村出編『廣辞苑第六版』(岩波書店、平二〇・一)一五四二、二五〇七頁。これらを基本に、本論文では「政治的文學者」を「創作家／研究者／評論家として文學を主体としつつ、時にその言説と行動を現實（政治）に関わる領域へと内發的に越境させる者」と規定する。

(2) 品田悦一「國民歌集の發明・序説——上は天皇より下は名もなき庶民にいたるまで——」(『國語と國文學』平八・一一)、同「國民文學としての万葉像はいかに形成されたか」(『國文學 解釈と鑑賞』平九・八)、ハルオ・シラネ他編『創造された古典——カノン形成・國民國家・日本文學——』(新曜社、平一一・四)、品田悦一『万葉集の發明——國民國家と文化裝置としての古典——』(新曜社、平一三・二)、鈴木貞美「『日本文學』という觀念および古典評価の変遷——万葉、源氏、芭蕉をめぐつて——」(井波律子他編『文學における近代——轉換期の諸相——』国際日本文化研究センター、平一三・三)、ハルオ・シラネ「『國文學』の形成」(小森陽一他編『岩波講座 文學一三／ネイションを超えて』岩波書店、平一五・三)、鈴木貞美『日本の文化ナショナリズム』(平凡社、平一七・一二)、品田悦一「排除と包摂——國學・國文學・芳賀矢——」(『國語と國文學』平二四・六)等。

(3) 藤井貞和「國文學の誕生」(『思想』平六・一一)、同「國文學の思想——折口信夫『天皇即神說』の發生——」(『思想』平八・一〇)、村井紀「國文學者の十五年戰争(1)(2)」(『批評空間』平一〇・一、平一〇・七)、杉山康彦「『國文學』の戰中・戰後」(『日本文學』平一〇・五)、坪井秀人「『國文學』者の自己點検——イントロダクション——」(『日本文學』平一二・一)、杉山康彦「國學・國體・國文學」(『日本文學』平一二・五)等。

(4) 笹沼俊曉『「国文学」の思想——その繁栄と終焉——』（学術出版会、平一八・二）、同『「国文学」と戦後空間——大東亜共栄圏から冷戦へ——』（学術出版会、平二四・九）等。

(5) 周知の通り、近代日本国内においてナショナリズム (Nationalism) は、「日本主義」「国家主義」「国民主義」「民族主義」等々さまざまに呼称されているが、例えば「日本主義は即ち王道を以て、四海を匡正するの大義也。君臣義に仗りて同じく國を治め、祖宗の大義を尊崇して之を後昆に伝へ、至善の理想を以て万邦に宗朝する所を知らしむるは即ち吾等の日本主義也。或は國家主義といふ、其の國權の確立を以て帝国伝統の理想を行はんとするは元より日本主義の期する處也」といわれるよう、表現上の差異はじつさいの運動に携わる者にとっては決定的に重要な事柄ではなかつたと思われる。「発刊辞」（新聞『日本』大一四・六・二五一一面）..

小松光男編『日本精神発揚史（日本新聞十周年記念）』（日本新聞社、昭一〇・四）四二、四三頁。

(6) この点に関連して、杉山康彦の「『国文学』が戦争中に国体の本義を説き、それに基づく日本精神を説いて国民を領導したということは決して『国文学』の例外状況、一時の逸脱ではない。それは国学から受け継いだ『国文学』の根源にあるものであるということを自覚すべきである。その追求が戦後の出発においてなされなかつたということはその後の『国文学』のありようを曖昧な、不透明なものとしただけではなく、日本のありようをもその深部において左右した」との問題意識はきわめて本質的である。杉山前掲「『国文学』の戦中・戦後」七三頁、傍線引用者。

(7) 猪野謙二「藤村作『ある国文学者の生涯——八恩記』について」（『日本読書新聞』昭三一・七）..『日本文学の遠近 I』（昭五二・七、未来社）三六九頁。猪野（一九一三—一九九七）もまた昭和戦前期の東京帝国大学文学部国文学科に学んだ一人（昭九・四～昭一二・三）であつた。

(8) 米原謙『国体論はなぜ生まれたか——明治国家の知の地形図——』（ミネルヴァ書房、平二七・四）一一七、一一八頁。

(9) 芳賀矢一『国学史概論』（国語伝習所、明三三・一一）..『明治文学全集 四四／芳賀矢一集』（筑摩書房、昭四三・一二）二二四頁。

(10) 一方で、皇典講究所からは國學院が派生（明二三・七 設置）し、官学アカデミズムとは異なる位相から伝統国学の墨守がはかられていた。芳賀登「幕末変革期における国学者の運動と論理——とくに世直し状況と関連させて——」（『日本思想体系 五一／国学運動の思想』岩波書店、昭四六・三）七一〇頁。國學院大學日本文化研究所編・発行『國學院黎明期の群像』（平一〇・三）一七〇・一七五頁。牟禮仁「皇学四大人から国学四大人へ」（『皇學館大学神道研究所紀要』平一五・三）一二一、一二二頁。藤田大誠『近代国学の研究』（弘文堂、平一九・一二）二四三・三〇七頁。

(11) 斯文会編・発行『斯文六十年史』（昭四・四）、東京帝国大学編・発行『東京帝国大学五十年史 上冊』（昭七・一一）、帝国大学学友会編・発行『帝国大学大観』（昭一四・一二）、東京大学百年史編纂委員会編『東京大学百年史 通史一／部局史一』（東京大学出版会、昭五九・三／昭六一・三）、橋本鉱市「近代日本における『文学部』の機能と構造——帝国大学文学部を中心として——」（『教育社会学研究』平八・一〇）、神野藤昭夫「近代国文学の成立」（酒井敏他編『森鷗外論集 歴史に聞く』新典社、平一二・五）等を参照。

(12) 当該年度および前年度の帝国大学編・発行『帝国大学一覧』（国立国会図書館デジタルコレクション [<http://dl.ndl.go.jp/>] にて自由閲覧可）を比較参照。学生の専門指導も、明治二六（一八九三）年九月の講座制導入以降「国語学国文学第〇講座」という名称において実施された。

(13) 安田敏朗『帝国日本の言語編成』（世織書房、平九・一二）七四、七五、四一三、四一四頁。

(14) 藤井貞文「江戸国学転生の問題」（『國學院雑誌』昭三三・一一）二二九、二三〇頁。阿部秋生「国学」（国史大辞典編集委員会編『国史大辞典 第五卷』吉川弘文館、昭六〇・二）六二〇頁。

(15) 鈴木貞美『日本の「文学」概念』（作品社、平一〇・九）一八五、一八六頁。シラネ前掲「『国文学』の形成」七五、七六頁。

(16) 立花隆『天皇と東大 上——大日本帝国の生と死——』（文藝春秋、平一七・一二）一一三、一一四頁。

(17) 夏目漱石（本名金之助、一八六七—一九一六）が大学予備門入学前の一時期漢学塾の二松学舎に通った（明一四〇—一五頃）ことはよく知られている。鈴木前掲『日本の「文学」概念』一六九—一七一、一七六頁。

(18) もつとも仏文学については、明治日本が「立憲君主政体＝プロイセン（ドイツ）、資本主義経済＝英米、陸軍＝ドイツ、海軍＝イギリス」という国家的志向のもと、第三共和制下のフランスを主たる制度モデルにしなかつたことから、同じ西洋文学でも英文・独文に比べて微妙な立場にあつたといわれる。柄谷行人「近代の超克」（『戦前』の思考）文藝春秋、平六・二）一〇三—一〇六頁。高田理恵子『文学部をめぐる病い 教養主義・ナチス・旧制高校』（松籟社、平一三・六）一二八—一四〇頁。

(19) イ・ヨンスク『「国語」という思想——近代日本の言語認識——』（岩波書店、平八・一二）、安田前掲『帝国日本の言語編成』、安田敏朗『「国語」の近代史——帝国日本と国語学者たち——』（中央公論新社、平一八・一二）等を参照。

(20) 大久保利謙『大久保利謙歴史著作集7／日本近代史学の成立』（吉川弘文館、昭六三・一〇）、関幸彦『「国史」の誕生——ミカドの国の歴史学——』（講談社、平成二六・七）、松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィー』（山川出版社、平二七・一一）等を参照。

(21) 堀尾輝久『天皇制国家と教育——近代日本教育思想史研究——』（青木書店、昭六二・六）、前川理子『近代日本の宗教論と國家——宗教学の思想と国民教育の交錯——』（東京大学出版会、平二七・四）等を参照。

(22) 田中康二『本居宣長の大東亜戦争』（ペリカン社、平二一・八）五三—五五頁。

(23) その意味で、笛沼俊曉の「西欧化が目指された近代日本の高等教育にあって、『国文学者』の多くは西欧の言語や思想文化の習得に対する挫折感からその道を選んだのである。このコンプレックスは、日本の『国文学』を形づくる体質となつていた。まさに『宿痾』といつてよいだろう」という見解も一面真を穿つている。

笛沼前掲『「国文学」の思想』二九三頁。

(24) 三上参次『外山正一先生小伝』(私家版、明四四・七)三二・三七、五三、五四頁。同『明治時代の歴史学界——三上参次懐旧談——』(吉川弘文館、平三・二)三一、五四頁。

(25) 三上前掲『明治時代の歴史学界』一一二、一二三頁。その後も戦前を通じて文科大学——改正「帝国大学令」の施行(大八・四)以降は文学部——では、第四代学長(明四五・三・大一〇・三)等をつとめた上田萬年を除いて、国文学科の教員が学長(学部長)や評議員など学内の要職に選任されることはなかった。前掲『東京大学百年史 部局史一』四六八、四六九頁。

(26) 井上哲次郎「漫言數則」(『東洋学芸雑誌』明二五・二)一〇六頁。

(27) 芳賀前掲『国学史概論』二二五、二二六頁。

(28) 昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書 一一／藤岡作太郎』(同大学光葉会、昭三四・一)、同『近代文学研究叢書 二六／芳賀矢一』(同大学近代文化研究所、昭三九・一二)、神野藤前掲「近代国文学の成立」等を参照。他にも芳賀は、臨時仮名遣調査委員会委員(明四一・五・明四一・一二)、教科用図書(国定国語教科書)調査委員会委員(明四一・九・大九・七)等を、藤岡は、文部省美術展覧会(文展)審査委員(明四〇・八・明治四二・?)等をつとめている。

(29) 芳賀矢一『国民性十論』(富山房、明四〇・一一)・前掲『明治文学全集 四四／芳賀矢一集』二八一頁。

(30) 久松潜一「垣内先生のことなど」(『国語と国文学』昭二七・一一)五一頁。

(31) 鈴木貞美によれば、明治期の読書界には幾度か日本古典ブームの波があり、井原西鶴（一六四二—一六九三）、近松門左衛門（杉森信盛、一六五三—一七一四）などがもてはやされたという。鈴木前掲『日本の「文学」概念』一七三、一七五頁。

(32) 以下の記事は昭和初期のものだが、国文学を含めた文学専修者の大学卒業後の現実を端的にいい表している。「彼等の行く手を見よや！ 先ずウマく行つて田舎の中等教員であり、ホンの少しばかりが作家であり新聞記者である。悪く行つた多数が此の世では使ひ道の少いそして厄介なインテリ ルンペーンに押流されて行くのだと」。新聞記事「大学教授室（一七）／東京帝国大学文学部（一）」（『時事新報』昭六・一二・一八八面）。

(33) 芳賀矢「『法科万能主義を排す』（『帝国文学』大六・一〇）、「『法科万能主義を排す』に就いて」（『東亜之光』大六・一二）、「文科大学論」（『東亜之光』大七・六）等。芳賀のこうした問題提起以降、東京帝国大学工科大学土木工学科出身の技術者で日本工人俱楽部（大九・一一 発足）の中心人物でもあつた宮本武之輔（一八九二—一九四一）のように、他の学問分野からも同様の異議を呈する者があらわれて来る。金子務「日本における『科学技術』概念の成立」（鈴木貞美他編『東アジアにおける知的交流——キイ・コンセプトの再検討——』国際日本文化研究センター、平二五・一一）二九六頁。

(34) 立花前掲『天皇と東大 上』一一二頁。須藤靖『ものの大きさ——自然の階層・宇宙の階層——』（東京大学出版会、平一八・一〇）四、五頁。

(35) 芳賀前掲「文科大学論」（『東亜之光』大七・六）六五頁。

(36) 芳賀矢「万葉集を經典とせよ」（『心の花』（大六・一一）一一頁。

(37) スペインの哲学者で大衆（mass）性に対する批判的分析で有名なオルtega (José Ortega y Gasset, 1883-1955) は、「<sup>ハ</sup><sup>リ</sup><sup>ト</sup>選ばれた少數派」とは単に優秀（高學歴）である以上に「自ら進んで行動」し「自分に多くを要求し、自分の上に困難と義務を背負い」む人であると定義している。その意味で、彼らは「国文学エリート」と類型化し得る存在である。オルtega『大衆の反逆（La rebelión de las masas, 1930.）』（寺田和夫訳、中央公論社、昭四六・四）三九一頁。なお、国文学

に関する論ではないが、前川理子は「「：」学問をとくに旧帝国大学のそれを中心にしてみようとする場合にはいつそう、その制度的属性からくる自覺的、無自覺的拘束性に注意を払う必要が出てくる。いかなる時代のいかなる学問も時代的・社会的文化的政治制約を受けないということはないが、その学的言説や理論構築が政策論や具体的な政治過程に関わっていくことがより自然に受けとめられていた戦前の帝国大学の学問研究活動においてはこの傾向はいつそう強まる」として、筆者と共通する視座から「『國家の大学』に形成された宗教学」と井上哲次郎、姉崎正治（一八七三—一九四九）ら「宗教学エリート」たちの思想解明を試みている。前川前掲『近代日本の宗教論と国家』五頁、傍線引用者。

（38）大塚健洋『大川周明』（中央公論社、平七・一二）一〇三頁。

（39）久松潛一「日本学問の伝統と国学」（『文芸世紀』昭一六・一二）四、六、七頁。

（40）山本正秀「明治の新国学運動——落合直文を中心として——」（『国語文化』昭一七・三）一五一頁。

（41）内野吾郎『新国学論の展開』（創林社、昭五八・一）、石川公彌子『「弱さ」と「抵抗」の近代国学——戦時下の柳田國男、保田與重郎、折口信夫——』（講談社、平二一・九）、同「近代国学の諸相」（『叢書 新文明学3／方法としての国学——江戸後期・近代・戦後——』北樹出版、平二八・四）等を参照。

# 第一章 沼波瓊音の学問と思想

## 第一節 個人から全体への道程

### 一 はじめに

近世の国学に淵源する日本の古典研究すなわち国文学が明治新政府の発足以降糺余曲折を経て近代学問としての形式を実質的に整えたのは、文學・思想史上では今日一般的に、芳賀矢一（一八六七—一九二七）が西欧（ドイツ）留学より帰朝し東京帝国大学文科大学教授となり国文学研究室主任・国語学国文学第二講座担任として研究・教育を開始する明治三五（一九〇二）年前後とみられている<sup>(1)</sup>。おりしもそれは、日英同盟協約（明三五・一・三〇 調印）成り、来たるべき対露開戦に向けて国民の意識が収斂され、ナショナリズムが全国的に高揚していく時期に当たっていた。芳賀が学内外で示した「国民性・民族性の闡明」<sup>(2)</sup>という国文学の使命は、リアルな国家的危機・苦難を前に国民一丸とならざるを得なかつた時代の精神的要請——「盛なりし西洋主義も、終に其極端にや達しけん。一兩年前よりは次第に衰へて、国粹主義の流行を見るに至れり。「…」今迄は夢にだも知らざりし国文学の講究、次第に盛になりて、国語、国文といふ学科の、忽にすべからざることを知る者多くなりしより、普通教育の学制をも一新するの勢にて「…」<sup>(2)</sup>にまさしく函蓋相応するものであつた。

一国の性質を研究するには、即ち日本國の性質を研究するには、古來の日本語に現れた日本人の思想を取つて研究するより外に途はない。〔……〕日本の国学は日本の文献学である。日本のフイロロギーである。これを日本人は国学と名づけたので、西洋の文献学について、ベイツク〔August Boeckh,1785-1867〕の唱へた科学としての文献学が成立するならば、日本の国学もまた立派に科学として成立つのであります。〔……〕すべての生活上のあらゆる所にはいつて来て、その国民を外の国民と区別するのが国学の目的であると、フンボルト〔Friedrich Wilhelm von Humboldt,1767-1835〕は更に明瞭に言つて居ります。すべて一国には、その国特有の特性がある。その特性を指摘するのが、国学者の役目であります。〔……〕国学とは国語国文に基づいて、すべての学科を研究して行くべきものである。国学は西洋の文献学と均しいものである。(3)

だがそれは、ひと時の可能性に過ぎなかつた。約一七億円の戦費と戦死・戦病死者約八万四千～一二万人と推計される甚大な犠牲を払つて大國ロシアに軍事的勝利をおさめ、とにかくも「一等国」のあかしを手に入れた日露戦争（明三七・二～明三八・九）後の日本人一般の意識は長い緊張から解き放たれた達成感・安堵感と相まって漸次弛緩していく、とりわけ青年層の思潮は国民としてより個人として自我の充足や成功を追求する傾向——「個人的發展を貴ぶこと今日の如く又た物質的幸福を求むること今日の如きは世界を通じて有史以来未だ曾て見ざる所なり」(4)——が目立ち始めたとされる<sup>(5)</sup>。一方で文学・思想・宗教各界も、一高生・

藤村操（一八八六—一九〇三）の投身自殺（明三六・五・二二）等を契機として既に戦前から鋭敏な知識人たちが意識していた「人生とは何ぞや、我は何処より來りて何処へ行く、といふやうなことを問題とする内観的煩悶の時代」<sup>(6)</sup>の本格的到来を前に、より活発な動きをみせ始めるのである<sup>(7)</sup>。

かかる社会状況において、「国文学／日本文献学」は、国民的名著として版を重ねた芳賀矢一の『国民性十論』の刊行（富山房、明四〇・一二）以降は、本来の使命を尽くす決定的なよすがを得ぬまま、明治末年から大正期にかけて文字通り象牙の塔にこもつた状態での「保守停滞」<sup>(8)</sup>を余儀なくされることになる。

本章の主人公・沼波瓊音（本名武夫、一八七七—一九二七）は、まさにそうした日露戦前—戦中—戦後の精神史を一身に体現するかのように自己を形成し、結果として芳賀の学問性を、本来のバランス感覚——「我民族の美德の底には亦必ずその欠点の潜んで居ることも知らねばならぬ」<sup>(9)</sup>——を捨象したより先鋭的なかたちで継承するに至った政治的文学者である。以下、彼の学問と思想の特質を、その志向が我／個人の完成から全体／国家の完成へとドラマティックに変容していく大正中期（第一次世界大戦終結前後）を境目に、大きく前期（第一節）と後期（第二節）に分けて考察する。

## 二 キャリア形成

沼波瓊音<sup>(10)</sup>は、明治一〇（一八七七）年一〇月一日、愛知県名古屋（市制施行前）のかつて尾張藩の御目見得御用掛医師をつとめた医家の長男と

して出生している。敬神の念篤い質朴な家風のもと幼少年期より漢籍に親しみ、長じては文芸全般就中小説を「酷愛」し「小説に養はれ小説に酔ひ小説に教訓され小説に慰藉され」<sup>(1)</sup>ながら多感な日々を送り、菅原学校、大成尋常高等小学校、愛知県尋常中学校（明二二・四～明二八・三）、第一高等学校第一部文科（明二八・九～明三一・七）を経て、東京帝国大学文科大学国文学科に入学（明三一・九）する。家業の医道でなく国文を志望した直接の動機は、中学在校当時、国語教諭で国文学者の鈴木忠孝（一八六二～一九一八）の熱心な古典講義に「感化」されてのことだという<sup>(1)</sup>。後の国文学者としての沼波の、愚直で実践的な学問スタイル——「読む時は味ふといふ外に他の目的なく、而して知らず／＼の中に自ら深く知るといふ遣方」<sup>(1)</sup>——はこの師によつて培われたものといつてよい。

中学校時代には他にも「人が皇室に關して、とやかく評するのを聞くと、何とは知らず、胸塞まり、涙ぐましくなつて、物言ふことさえ出来なかつた」<sup>(1)</sup>とか、高等学校受験時に下宿の一室に「勉強中如何なる来客あるも勅使の外一切応接せざる事」<sup>(1)</sup>と壁書していたとか、あるいは露独仏三国干涉（明二八・四・二三）の報に接しては「深い谷の中へ突落されたやうに感じた。幼い僕の頭には目前に國家が亡びつつあるやうに感じた」<sup>(1)</sup>等のエピソードがあり、後世人ごとに評される「熱情的な狂信的」<sup>(1)</sup>な草莽<sup>ナシヨナリスト</sup>の志士としての意識の淵源を垣間みることが出来る。

さて、沼波が在籍（明三一・九～明三四・七）した当時の東京帝国大学文科大学国文学科の教員スタッフは、ちょうど黒川眞頼（一八二九一一九〇六）、栗田寛（一八三五一一八九九）、物集高見（一八四七一一九二八）など旧幕時代に生まれ「近世以来の国学の学統を伝えることに汲々」<sup>(1)</sup>と

して來た老大家たちが病氣や加齡等により順次フェードアウトし、代わつて上田萬年（一八六七—一九三七）、芳賀矢一など若い世代の国語・国文学たちが頭角を現し始める過渡期<sup>(19)</sup>に当たつており、沼波ら明治三十一年入学組は前者の聲咳に接した最後の学生となつた。もつとも沼波にいわせれば、高等学校時代に講義を聽講して以来親炙していた芳賀矢一を除けば「大学にて聽きし國語の講義の總べては遂に鈴木「忠孝」先生の講義に及ばず「…」小生が國文學の趣味を解したるは全く鈴木先生のみのお蔭」<sup>(20)</sup>とのことであるが。

赤門の国文学徒としての沼波は、中・近世古典文学就中蕉風俳諧を研究テーマとして種々の文献資料を涉獵する一方で、大野酒竹（本名豊太、一八七二—一九一三）、佐々醒雪（本名政一、一八七二—一九一七）、笹川臨風（本名種郎、一八七〇—一九四九）ら東京帝大O.Bが運営する俳句結社「筑波会」（明二七・一〇 結成）に加入（明三一・一一）し、また一期上で博言学科の八杉貞利（一八七六—一九六六）らと和歌結社「わか菜会」を立ち上げる（明三二・一）などして文学的感性と鑑賞眼をみがいた。二年次末には初の単著『俳諧音調論』（新声社、明三三・八）を芳賀矢一の懇切な校閲<sup>(21)</sup>を受けて刊行する。その内容は、一句内の同音連鎖——例えは松尾芭蕉（一六四四—一六九四）の有名な「古池や蛙飛びこむみづの音」の句にみられるMの子音<sup>(22)</sup>——をはじめ、力行音、夕行音、促音、撥音、字余り、等々、俳句の音調における多様な表現効果を考察したもので、国文学界では「この種の研究の最初のもの」<sup>(23)</sup>として大いに注目を集めただいう。これに自信を得た沼波は、卒業後も「俳論書の三珍」（『学燈』明三六・五）、「俳句紹介者としての小泉八雲氏」（『帝国文学』明三七・

一一）、『蕉風』（金港堂書籍、明三八・五）、『俳論史』（文祿堂、明四〇・四、芳賀矢一序）、『徒然草講話』（東亞堂、大三・一）などの斬新で実証的な論著や、『瓊音句集』（新潮社、大二・五）などの個性的な句集を次々とものとしていき、気鋭の若手俳諧研究者・俳人として明治後期から大正初期にかけて漸次その存在を社会一般に認知させていった<sup>(24)</sup>。

わけても、前出『俳論史』のなかで江戸中期の俳諧師・上島鬼貫（一六六一一七三八）を論じ、その著『独言』に説かれる「まこと」の理念の写実性・不易性・道徳性に近代の国文学者として最初に着眼したこと——「僕等は詩は虚偽を言つては味を損するものでまことを言はねばならぬといふことを辛つとこの頃知つた」<sup>(25)</sup>——は、戦後の研究史にも明記されている<sup>(26)</sup>。

### 三 国文学者は「不思議なる宇宙」に驚いたか

叙述は前後するが、明治三四（一九〇一）年七月に東京帝国大学を卒業した沼波瓊音は、専門の俳諧研究を着実に進めつつも、哲学館講師（明三四・九）、三重県第三中学校国語教諭（明三四・一〇）、明三五・一一、中途で教頭に昇進）、京北中学校出講（明三五・一一）、文部省嘱託（明三六・一、明三九・一二）<sup>(27)</sup>、『萬朝報』記者（明四〇・一、明四四・三）など職を転々とし、明治四四（一九一一）年四月からは体調の悪化もあって著述専業に入っている。

この間（日露戦前—戦中—戦後）に在つて、彼の文筆の領域は多方面に拡大し、「一種の味」<sup>(28)</sup>ある文体で小説、評論、詩文、隨想、紀行文などさまざまな原稿を『中央公論』『中学世界』『秀才文壇』『女子文壇』

等中央の諸雑誌に精力的に発表している<sup>(2)9</sup>。また、それとともに、中学校時代より作品を愛読していた幸田露伴（本名成行、一八六七—一九四七）をはじめ、戦後「新文学」の旗手<sup>(3)0</sup>としてにわかに脚光を浴び始めた国木田独歩（本名哲夫、一八七一—一九〇八）、夏目漱石（本名金之助、一八六七—一九一六）、田山花袋（本名録弥、一八七一—一九三〇）、小栗風葉（本名磯夫、一八七五—一九二六）、更には森鷗外（本名林太郎、一八六二—一九二二）、岩野泡鳴（本名美衛、一八七三—一九二〇）、新進の洋画家・小杉未醒（本名国太郎、一八八一—一九六四）など多彩な文士・文化人たちと親交を結んでいる。

なかでも偶然手にした『独歩集』（近事画報社、明三八・七）に衝撃を受けて筆を執り、「嘗て文の人井原西鶴翁を生み、今想の人国木田独歩子を生んだ日本の文壇の光榮は、全世界に誇るべし」<sup>(3)1</sup>とまで断言した「独歩論」（『中央公論』明三九・五）は、従来マイナーな一小説家に過ぎなかつた独歩の「文名を世間に伝播」する上で「確かに大なる力」<sup>(3)2</sup>を發揮したといわれ、近代文学史上に特筆すべき意義を有するものと評価される<sup>(3)3</sup>。

沼波が独歩の小説に惹かれたのは、何よりその作中に遍満する人生不可解・宇宙不可解の煩悶——「宇宙の不思議を知りたいといふ願ではない、不思議なる宇宙を驚きたいといふ願です！」<sup>(3)4</sup>——とそれに対して安易に「慰藉」と「解決を与へな」い作者の真摯で求道的な態度が「実に余自身の語余自身の文たるを覚える」<sup>(3)5</sup>として、今現在の自分の志向に全く符号していることを認めたためであつた。

そして同じ頃から、沼波は、漱石にも徐々に注目し始め、「漱石の文学論序なるものが昨年読売『新聞、明三九・一一・四』に現はれた。僕はこれを読んだ時一種怖しいやうな感に打たれた。漱石はいつまでも己が不足を感ずる人である、そこに偉大な所がある」（<sup>36</sup>）と述べるなどして、その「いつまでも己が不足を感じ」じてゐるようなたたずまいに、自身と根源的に通じ合う「何か」（<sup>37</sup>）を感じ取つていくのである。なお、両者の具体的な接点が確認出来るのは漱石の長篇小説『坑夫』連載中（『東京／大阪朝日新聞』明四一・一、四）のことと、同作の材料を提供した荒井伴男（生没年未詳）なる人物の素行について沼波が漱石に口頭で注意を与えたのが最初とみられる（<sup>38</sup>）。

独歩・漱石との知遇を機縁として、国文学の論著以外での沼波の言説は、

物と物とを分ける為に線を引く。物を知得する為にぐるりと線を引く。前者を区別といひ、後者を異説といふ。斯うして線にいらねば何物をも会得することが出来ないやうに人間が墮落して來た。「……」線は迷の始である。線は墮落の始である。事物を事物の僕に感ぜよ、事物の各のまはりは總べてぼかしなることを記せよ。「線を引くな、線を引くな」と僕は絶叫する。（<sup>39</sup>）

あるいは、

一の物を二つの物に意識することは、吾人夢の中によくあることだ。

或狂人は醒めてる時にもこれがあるさうだ。これを二重人格といふ。

余は思ふ、この二重人格は狂的病的として疎んずべきことで無い。これを遣ることを熟練すると、たしかに己れを向上することが出来ると。

「……」それは私情に蔽はれずして事物の眞体を見るの双心眼を開くといふ大効がある。(40)

等々、修養色の強い哲学的な内容のものが目立つ(41)ようになつてくる。

しかして彼の煩悶は、時日を経るに従つてより実存的な苦惱の趣を強めていき、思索によつて得たひと時の小悟（安心）とそこに腰を下ろす暇もなく次々とわき上がつて来る疑念の無限ループを繰り返しながら——その間には「惜み惜み惜みても余りあ」(42)る畏友・独歩の死（明四一・六・二三）があつた——明治末年に至つて極限に達する。

この頃既に彼の「文字通りの孤独」(43)な精神は生の意味・目的を完全に見失い、その先の「行末のドンづまり」に待ち構えている「身の毛のよだつやうな、正視すべからざる、二目と見られぬ怖しい物」すなわち「死＝虚無」の想念を前に、「発狂するか、自殺するか、どちらか」にまで追い込まれつつあつたという(44)。

「汝は何を為しつゝあるか」と云戦慄すべき問題「……」これを解決するには、宇宙はどんなもの、全実在の形如何、これを知り得なければならぬのだ。(45)。

かかる言辞に集約される沼波の根源的な問題意識には、西田幾多郎（一八七〇—一九四五）の著作等によつて膾炙され明治末期から大正初頭にかけて日本の哲学・思想界を席巻した生命哲学の思潮——「ベルグソン」[Henri Bergson, 1859-1941] やジョーハイムス [William James, 1842-1910] の意識の現象学的な思考法が、ショーベンハウエル [Arthur Schopenhauer, 1788-1860] の哲学の流行とないまぜになり、自分の意識を『生命』の現象と見、また、理性で抑えることの出来ない性欲などの衝動を、『宇宙の意志』の現れとする思想になつていった」<sup>(46)</sup>——とのまさしき共時性シンクロニシティをみて取ることが出来よう。

#### 四 〈始めて確信し得たる全実在〉とは何か

さて、危機的状況のまま明治の終焉一大正の開幕を迎えた沼波瓊音は、大正二（一九一三）年一月に漱石の友人で英文学者の野上臼川（本名豊一郎、一八八三—一九五〇）、翻訳家の村上静人（一八八四—一九六〇）らと芸術・宗教に関する一般研究公開の自由講座を企画し、五月にはみずから六回講壇に立つてそれまでの自身の迷える歴程とこのほどようやく「掴み得」た（と信じた）大悟の内容を詳細に語り、七月にその述録を『始めて確信し得たる全実在』として東亜堂書房より刊行している。同書を献呈された漱石は、礼状のなかで「頂戴した其日に読みました私は何より先にあなたの大意気とあなたの心持とに感服致しました近頃は小説も評論もいくらでも出ます然しあゝいふ方面の事は誰も考へてゐません、所があゝいふ方面の事は窮所迄行くと是非共必要になつて来ます」<sup>(47)</sup>と述べ、これに最大級の賛意を以て応じた。その上で、かねて「小生もあなたに劣らぬ孤

立ものに候」<sup>(48)</sup>とゞゝか同志じみた親近感を抱いていた沼波に対し、「人の事ではないみんな自分の頭の上の事です私はあゝいふ意味の事で切実な必要を感じつゝいまだ未程の地に迷つてゐます」<sup>(49)</sup>とみずからの真情を率直に吐露してみせたのである。

この『始めて確信し得たる全実在』に目を通したことが、漱石をして一時中断していた長篇小説「行人」の最終章「塵労」（『東京朝日新聞』大二・九・一六連載再開）の構想を大きく変化させるきっかけとなつたことは、漱石文学の研究者ならば今日周知の事実であろう。朴裕河の緻密な分析に従えば、「塵労」において登場人物のHさんが語つた有名な山を呼び寄せるモハメッド（Muhammad, 570?-632）の逸話（三十九、四十）や、事実上の主人公・長野一郎のどこかシェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）を想起させる数々の台詞——「死ぬか、気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか」（三十九）、「僕は絶対だ」（四十四）、「何うしたら此研究的な僕が、実行的な僕に変化出来るだらう」（四十五）等々——は、そのままだ時の瓊音＝漱石の内実としてよむことが可能となる<sup>(50)</sup>。

ところで、沼波が「日輪右に在り、月輪左に在つて、汝黙せよと云つても、自分は黙しない」とまで言い切つた「モハメットの豪語」<sup>(51)</sup>よろしく、自信を持つて「掴み得」た大悟とはどのようなものであったのか。要点を抽出しつなげてみよう。

宇宙は一つか。或は無数の箇々の集りか。

宇宙は空か。或は実か。

Aかnot-Aか。

諸君、私は解つたのだ。

私は、全宇宙は、Aであつて、同時に not-Aだ、と答へ得たのだ。

我々はあらゆる場合に於て、Aと not-Aとを、全く別所の物と考へて居たのが、迷であつたのだ。Aと not-Aとを、一つに視得て、始めて、ここに真の知識が出来たのだ。

これ実に私の悟であります。

一言にして便利な云方をすれば、矛盾の承認だ。

これを大宇宙に展げるのだ。大宇宙に就ても、やはり同様の承認が出来たら、即ちそれが大宇宙を知つた、全実在を見たと云ものであるのだ。

ベルグソンなども、斯うは云つてやしまい。よし、在つたとしても、それは暗合なんだ。<sup>(5 2)</sup>

多少なりと哲学・宗教を専門的に学んだ者であれば、沼波の説く「A == not-A / not-A == A」が大乗佛教就中「一即一切 一切即一」という華嚴教学特有の哲理<sup>(5 3)</sup>あるいは西田幾多郎が晩年に到達したとされる「絶対矛盾的自己同一の世界」<sup>(5 4)</sup>と、そのいわんとする内容においておよそ大差ないことを察知するであろう。じつきい沼波も、大悟の後に「これは禪の方では、實に言ひ古されたことであるのだ」<sup>(5 5)</sup>と知つて甚だ落胆したという。

だが、それでもともかく自力で得証したものには違ひなく、氣を取り直した沼波は、「悟つたゞけで、悟りッぱなしでは駄目だ。実行をせねば駄目だ。〔…〕それを実地に活用しなくては駄目だ」として「眞の

意味の、修養を一生やる覚悟」（<sup>56</sup>）をかためる。そしてまずは、参禅体験を持つ露伴や漱石のもとに出向き率直に助言を乞い、後者の紹介で長篇小説「門」（『東京／大阪朝日新聞』明四三・三・六 連載）に登場する禅僧・宣道のモデルとなつた臨濟僧・釈宗活（一八七〇—一九五四）とその師である釈宗演（一八五九—一九一九）に法縁を得て、傍から見ても尋常ではない熱心さで谷中の禅堂・両忘庵に通い詰めて——「両忘庵には毎日御出掛ですかあついから往復が御難儀でせう」（<sup>57</sup>）——いった。一時は家庭を棄てて本気で出家得度することまで考えた（大二・一一）とのことである（<sup>58</sup>）。

## 五 世外への逸脱

みずから「掴み得」た（と信じた）大悟をより確かなものに練り上げるべくひところ参禅に打ち込んだ沼波瓊音は、次には、それを生きていく上で「実地に活用」すべく、具体的な「目的」を探し求めるようになる。

諸君が、私に、「我々は如何に活くべきか」と問はれるならば、私は「其倣で宜しい」と答へる。自覚して進みたいとなれば、「好きな事をなさい」と勧める。泥棒がしたいなら、泥棒をしなさい。姦淫がしたいなら、姦淫をしなさい。「……」其の罰を少しでも恐れる心があるならば、それは貴君が、本当に、「したいこと」、「好きしたこと」では無いのである。私が所謂「好きなこと」と云のは、渴したる者が清水に対するやうな心、即ち前後の分別も何も無く、殺され

ても、そちらの方へ駆附ける底の「」<sup>(アヤ)</sup>を指すのであります。〔…〕斯くて我等は、「我の完成」を為しつゝある、と云ふとに、つまりなる。何でもよいか、「好きな事」をして、「我」を完成して行くのだ。<sup>(5 9)</sup>

たとえ人の世の理<sup>(ノンノリ)</sup>に照らしてどれほど愚かしくあろうと「殺されても、そちらの方へ駆附け」るに値すると想い定めた「したい」と／好きなこと」に有限なる自身（A）の全存在を挙げて取り組み、我を完成する。沼波にとつては、それがそのまま、無限なる宇宙（not-A）の意志と一体化する嘗みすなわち「実行」となるのである。

しかして、大正四（一九一五）年から翌年にかけて、大平良平の「未来の世界教」（『早稲田文学』大四・三）など天理教に関する各種文献やベルギーの劇作家・メーテルリンク（Maurice Maeterlinck, 1862-1949）の『死後は如何（La Mort, 1913.）』（栗原古城訳、玄黄社、大五・四）等を熟読し靈的<sup>(スピリチュアル)</sup>な方面ににわかに刮目<sup>(60)</sup>した沼波は、大正五（一九一六）年二月に、巣鴨町庚申塚の明治女学校跡で「至誠殿」という新興宗教を創唱していた山田鶴子（生没年未詳）なる祈祷師に出遇い、予言や透視、難病治癒等同人のもたらす数々の奇蹟<sup>(パフォーマンス)</sup>に魅入られ迷わず入信し、七月には一家を挙げて巣鴨に移住するまでに至る<sup>(61)</sup>。教母の身辺に絶えず奉侍しその布教伝道に随行する、そうした非日常的な生活のなかに、彼はまず以ておのれの「したい」と／好きなこと」を見出したのであった。本人の証言によれば、入信中にはじつやいさまやまな神秘現象が眼前で起り、「雨中に立つて濡れず、日月を隠し、風塵を避け、電車の腰掛から人を立たし

むる」（<sup>6</sup><sub>2</sub>）など「神様に一口御願するだけで、いろ／＼の不思議な事が出来た」（<sup>6</sup><sub>3</sub>）とのことである。

俳人の沼波瓊音は、此頃は千里眼になり済して、どんな病氣でも治すと威張つて居るが、どんなに頼まれても、たとへ又マ向ふがどんな恩人であつても決して自ら出向くと云ふ事はせない。何時かも旧師の芳賀「矢一」博士の慢性の病氣を見て遣つたらどうだと友達が勧めたら、「有難いと信ずるなら此方へ来るが宜い、其信仰ばかりでも病氣が治る訳だ」と高飛車に出たので、勧めた人は二言と継げず、恐れ入つて参つて了つたのださうな。（<sup>6</sup><sub>4</sub>）

しかるに、この時期のあまりにも常軌を逸した沼波の言動は、いたるところで贅躉を買い、佐々醒雪などごく一部の理解者を除いて「或人には敗マ徳漢と罵られ、或人には狂者として嘲けられ」、結果「多くの友人を失」（<sup>6</sup><sub>5</sub>）つたという。漱石もまたそうした友人たちの一人であつたか、どうか。

じつさい、大正二（一九一三）年中には頻繁に書簡をやり取りしていた兩者であるが、翌年以降はぶつつりと途絶え、生前に言葉を交わしたのも確認出来る限りでは大正四（一九一五）年二月が最後——「節」「長塚、一八七九一一九一五」氏の死去「大四・二・八」の報が新聞に出た翌朝沼波武夫君が来て（わざく）向後長塚君の事に関し何かやる（遺稿を出版するとか其他）なら自分も加盟したいからどうぞ通知してくれと頼んで行きまし

た」<sup>(66)</sup>——である。以後再び好誼を通じる機会を得ぬまま、翌年一二月九日、漱石は満四十九歳で没している。

## 六 個人的思考からの脱却

大正六（一九一七）年四月、諸般の事情から「至誠殿」に出入り出来なくなつた沼波瓊音は、意を決して信仰生活を打ち切り東京帝国大学文科大学の国文学研究室および帝大図書館に通い始め、国文学者としての日常にひとまず復帰——「著述業者に戻るべき運命になつた」<sup>(67)</sup>——する。一説には、教母・山田鶴子の「教養言動がいかにも低級で追々金箔が脱げ」ていき、「遂に厭気がさし」<sup>(68)</sup>たとのことであるが。

時あたかも国際社会では、ロシア二月革命が勃発（大正・三）しおよそ三百年にわたつてヨーラシアに霸を唱えたロシア帝国（ロマノフ朝）が滅び、続く十月革命においてはレーニン（Vladimir Lenin, 1870-1924）率いる左派のボリシェヴィキが権力を掌握（大正・一一）して史上初の社会主義政府<sup>ソциズム政体</sup>が樹立される。また、新興国アメリカが第一次世界大戦（歐洲大戦）に参戦（大正・四）し、膠着状態に陥つていた戦線も連合国側の優位に大きく傾き始める。そうした海の彼方の情勢を望見しながら、沼波は、「今世界は絶苦の底にある。〔…〕一個人の身に起る神秘、個人と個人との間に起る神秘と云ふやうな事にのみ驚いて居る、又歓喜して居る場合では無い」<sup>(69)</sup>と述べるなどして、次第に脱個人的な志向をあらわにしていく。それは、最後まで「朋党」を結ぶことをよしとせず己が「個」を貫き通して「葛藤をもつて葛藤にまつわる世界」を生きる道を選んだ漱石<sup>(70)</sup>と、最終的かつ決定的に袂を分かつたことを意味していた。

ここで今一度、前出の『始めて確信し得たる全実在』をひもといてみよう。該書の終盤で、瓊音は「我の完成」こそが「現代人の耳に、最も快く勇ましく響く」（<sup>7</sup>1）として各自にその「実行」を奨励しつつ、一方では次のような可能性も示唆していた。

私が、若し、没我を快しとし、團結を快しとする時代に生れたら、「団体の完成」を唱道したであります。何と云つても、其の行為は、つまり同じ事をすることになるのであります。「我の完成」は自から「団体の完成」となるもの、「団体の完成」は自ら「我の完成」となるものであります。（<sup>7</sup>2）

日露戦後における「内観的煩悶の時代」の空気を一身に体現するかのように生き、文字通り満身創痍となつて「孤独」な「懷疑の海を泳ぎ越し」（<sup>7</sup>3）て来た沼波瓊音。その鋭敏な意識は、「没我を快しとし、團結を快し」とする新たな時代の氣配を、大正も半ばに差しかかった今、はつきりととらえていた。

#### 注

(1) 例えば、神野藤昭夫「近代国文学の成立」（酒井敏他編『森鷗外論集』歴史に聞く』新典社、平一二・五）三二一・三五頁。

(2) 高津鉢三郎『国文学と漢文学との関係』（金港堂、出版年未詳）二頁、ルビ引用者。國學院編『国文論纂』（大日本図書、明三六・一〇）一八四頁を参照。

(3) 芳賀矢一「国学とは何ぞや」(『國學院雑誌』明三七・一一二)・『明治文学全集 四四／芳賀矢一集』(筑摩書房、昭四三・一二)二二八、二三〇、二三三、二五頁。

(4) 浮田和民「現代生活の研究」(『太陽』明四三・六)三頁。

(5) 有馬学『日本の近代 四／「国際化」の中の帝国日本』(中央公論新社、平一・五)二〇・二四頁。

(6) 安倍能成『岩波茂雄伝』(岩波書店、昭三二・一二)六一頁。

(7) 末木文美士『明治思想家論』(トランスピュー、平一六・六)、坪内祐三『「近代日本文学」の誕生——百年前の文壇を読む——』(PHP研究所、平一八・一〇)等を参照。

(8) 風巻景次郎「芳賀矢一と藤岡作太郎——黎明期の民族の発見——」(『文学』昭三〇・一一)四四頁。

(9) 芳賀矢一『国民性十論』(富山房、明四〇・一二)・前掲『明治文学全集 四四／芳賀矢一集』二八一頁。

(10) 沼波の経歴と業績について基本的な事項は、「故瓊音沼波武夫先生略歴」(瑞穂会編・発行『噫瓊音沼波武夫先生』昭三・二)、昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書 二七／沼波瓊音』(同大学、昭四二・八)、松本常彦「沼波瓊音」(原武哲他編『夏目漱石周辺人物事典』笠間書院、平二六・七)等を参照した。

(11) 沼波瓊音「独歩論」(『中央公論』明三九・五)九三頁。

(12) 沼波瓊音「学生時代の学科に対する名流の回想 沼波瓊音君」(『江湖』明四一・七)二五頁。同『俳話小品 しろ椿』(博文館、明四五・七)一七二、二二一、二二二頁。同「鈴木先生」(『心の花』大七・九)・山口昌男監修『沼波瓊音／意匠ひろひ』(国書刊行会、平一八・八)六九頁。なお『万葉集』の研究者として知られた鈴木忠孝には、江戸後期の歌人・香川景樹(一七六八—一八四八)の作歌を「道ゆく人のさまたげ」と論難した『難桂園一枝』(興文社、明三二・一一)等

の著作がある。上田正昭他監修『日本人名大辞典』（講談社、平一三・一一）一〇一六頁。

(13) 沼波瓊音「時文 文学史上的事実」（『新古文林』明四〇・一）・前掲『沼波瓊音／意匠ひろひ』一九四頁。

(14) 石村貞吉「追憶」（『国語と国文学 十月特別号／日本精神研究』昭二・一〇）五〇頁。

(15) 沼波前掲『俳話小品 しろ椿』一二四二頁。

(16) 沼波前掲『俳話小品 しろ椿』二三九頁。後に沼波と国家主義運動の親密な同志となる右派ジャーナリスト・満川亀太郎（一八八八一九三六）も、少年時代の三国干渉体験が、自身の国家に対する "Loyalty" や "Attachment" の目覚め——「國家の受けた汚辱を自らの汚辱として甘受」——をもたらしたと回想している。満川「自序」（『三国干渉以後』平凡社、昭一〇・九）一頁。

(17) 青山なを「断片」（昭一・八）・『青山なを著作集 別巻／若き日のあゆみ——師 沼波瓊音の』など——（慶應通信、昭五九・八）一九四頁。

(18) 昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書 二六／芳賀矢一』（同大学近代文化研究所、昭三九・一一）一〇五頁。

(19) 昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書 八／黒川眞頬』（同大学光葉会、昭三三・三）四一四頁。三上参次『明治時代の歴史学界——三上参次懐旧談——』（吉川弘文館、平三・二）九九、一三五、一四八、一四九頁。神野藤前掲「近代国文学の成立」三三頁。既に、明治一八（一八九五）年三月には、文部省の国語科教員（尋常師範学校、尋常中学校、高等女学校）検定試験の委員が、物集、黒川らから上田、芳賀らへと交代し、国語・国文学界の「新陳代謝」を象徴する出来事として注目されていた。佐多翠「物集高見／近代文学研究資料 第二百七十七篇」（『学苑』昭三九・一一）三四頁。

(20) 沼波前掲「学生時代の学科に対する名流の回想」二五頁。

(21) 沼波瓊音「親切なりし芳賀先生」（『国語と国文学』昭二・四）九二、九

(22) 沼波瓊音『俳諧音調論』（新声社、明三三・八）九頁。

(23) 西垣修「沼波瓊音」（『人と作品 現代文学講座 第3集／明治編第3』明治書院、昭三六・七）三三七頁。一方で、俳壇特に当時の革新勢力であった高浜虚子（本名清、一八七四—一九五九）ら日本派の評価は「ざつと見るのに無用の議論で終始してゐる様だ「…」と必ずしも高くはなかつたようである。虚子「俳諧 音を現したる句」（『ほとゝぎす』明三三・一一）一一頁。

(24) 他に著述以外の業績としては、専門誌月刊『俳味』の刊行（明四三・三、大五・三）と、盟友・大野酒竹の死後その貴重な所蔵俳書の保存・整理分類に尽力（大三・一・二）し後の酒竹文庫（現東京大学総合図書館蔵）創設につなげた点が挙げられよう。沼波瓊音「余がこの心を察せよ」（『俳味』大三・四）・前掲『沼波瓊音／意匠ひろひ』四三・四九頁。反町茂雄編『紙魚の昔がたり 明治大正篇』（八木書店、平二・一）一〇四、一〇五、二八一・二八八頁。なお俳諧研究者・俳人としての沼波に関する先行研究には以下のものがある。森銑三『古い雑誌から』（文藝春秋新社、昭三一・六）、松本旭「二つの俳論史——沼波瓊音と樋口功——」（『俳句』昭四〇・七）、紅野敏郎「沼波瓊音『瓊音句集』」（『国文学 解釈と鑑賞』平一一・六）、山口昌男『敗者学のすすめ』（平凡社、平一一・二）、山下武「ドッペルケンガー文学考㉗——沼波瓊音——」（『幻想文学』平一四・三）、小塩卓哉「定型のリング 沼波瓊音の再評価」（『獅子吼』平二二・一二、平二三・一）等。

(25) 沼波瓊音『俳論史』（文禄堂書店、明四〇・四）五六頁。

(26) 久松潛一『日本文学評論史 詩歌論篇』（至文堂、昭二五・一〇）・『久松潛一著作集6』（至文堂、昭四三・一二）二〇〇頁。

(27) この間、「小学校令」の改正（明三六・四）による国定教科書制度の導入があり、これに関連して沼波も国語科教科書等の各種編纂業務（調査、研究、執筆）に従事したと思われる。

(28) 無記名「新刊紹介／默想の天地 沼波瓊音著」（『太陽』明四三・一二）

(29) 前掲『近代文学研究叢書』二七／沼波瓊音』二七・三二頁。

(30) 坪内前掲『「近代日本文学」の誕生』を参照。

(31) 沼波前掲「独歩論」一〇二頁。

(32) 忘憂子「文芸時報／丙午文壇の概観（上）」（『読売新聞』明三九・一二・二三六面）。

(33) 大東和重『文学の誕生——藤村から漱石へ——』（講談社、平一八・一二）を参照。

(34) 国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」（『小天地』明三四・一一）・『独歩集』（近事画報社、明三八・七）八二頁。

(35) 沼波前掲「独歩論」九四、一〇〇頁。

(36) 沼波瓊音「時文 文学論序」（『新古文林』明四〇・二）・前掲『沼波瓊音／意匠ひろひ』一九五頁。

(37) 松本常彦は、沼波の「馬鹿々々しきまでの西洋崇拜か、馬鹿々々しきまでの国粹保存か、日本人はこの二途の外に歩む路を発見せざるか。両つながら馬鹿々々しきなり。『……妥協は更に馬鹿々々し。馬鹿の骨頂なり』という文明批評的言説に注目し、沼波と漱石は「西洋近代の受容の不可避を十分に知りつつ、その受容の苦さと不幸とを見てしまうジレンマを抱え込む点」において「本質的」に「通じている」と意味深い指摘をしている。沼波瓊音「二途」（『大疑の前』東亜堂書房、大二・七）三〇、三一頁。松本前掲「沼波瓊音」五一九頁。

(38) 夏目鏡子「漱石の思ひ出」（改造社、昭三・一一）・再版（文藝春秋、平六・七）二〇九、二一〇頁。なお、前掲「故瓊音沼波武夫先生略歴」三頁には、明治四一（一九〇八）年四月に「偶然夏目漱石來訪、近づきとなる」とある。

(39) 沼波瓊音「時文 線」（『新古文林』明三九・九）・『さくら貝』（修文館、明四〇・一二）一二〇、一二二頁。

(40) 沼波瓊音「時文 二重人格獎勵論」（『新古文林』明四〇・一）・前掲『さくら貝』一七〇、一七一頁。

(41) こうした傾向について沼波は後年、「具体よりも抽象を高しとし、実行よりも瞑想を高しとし、日本人と言ふ態度よりも人類と言ふ態度を高しとし、因襲の一切は、その因襲たるが為のみにて卑しとなす。これ等の心持に似たるもの」と自嘲氣味に回想している。沼波瓊音「卷首辭」（『徒然草講話』再版、修文館、大一四・一）一頁。もつとも、全てがそうであつたわけではなく、「日本が露国に勝ち得しは眞の國家なりしが為なり、國家陣中個人の隻影を止めざりしが為なり、日本は清める實在を建てむが為に露国と戦ひしなり」、「日本の今日の現状は、實に善惡顛倒の世である。【…】斯くまでに切迫し来つた時代を、もはや一日も我慢が出来ぬ」といつた言説も時折確認出来る。沼波瓊音「御旗の光の後に書す」（『日露戰役御旗之光 第一師管健兒部隊戰記』大日本奉公会編輯部、明四〇・九）三頁。同「『幼稚なる感想』を読みて」（『読売新聞』大元・一一・一〇六面）。

(42) 沼波瓊音「独歩」（前掲『大疑の前』）一二三頁。

(43) 沼波瓊音『現代文芸叢書 第三十編／七面鳥』（春陽堂、大二・一〇）二六頁。

(44) 沼波瓊音『始めて確信し得たる全實在』（東亜堂書房、大二・七）二〇、六七、六八、七一頁。

(45) 沼波前掲『始めて確信し得たる全實在』七一頁。

(46) 鈴木貞美「『大正生命主義』とは何か」（同編『大正生命主義と現代』河出書房新社、平七・三）六頁。明治末期から大正初期にかけての生命哲学の流行と諸潮流については他にも、船山信一『大正哲学史研究』（法律文化社、昭四〇、一）、檜垣立哉「西田幾多郎の時代的役割——大正時代の生命主義に関するノート——」（千葉正昭他編『大正宗教小説の流行——その背景と“いま”——』論創社、平二三・七）、鈴木由加里「大正期のベルクソンの流行について」（前同）等を参考照。

(47) 夏目金之助「大二・九・一付／沼波武夫宛書簡」・『漱石全集 第二十四卷』（岩波書店、平九・二）二〇〇頁。

(48) 夏目金之助「大元・一二・二六付／沼波武夫宛書簡」..前掲『漱石全集』 第二十四卷』一二八頁。

(49) 夏目前掲「大二・九・一付／沼波武夫宛書簡」二〇〇頁。

(50) 夏目漱石「行人」..『漱石全集』第八卷』（岩波書店、平六・七）四一二、四一四、四一五、四二六、四二九頁。朴裕河『ナショナルアイデンティティとジエンダ――漱石・文学・近代――』（クレイン、平一九・七）二〇七・二一八頁。

(51) 沼波前掲『始めて確信し得たる全実在』二頁。

(52) 沼波前掲『始めて確信し得たる全実在』七七・八〇、八二、九二頁。

(53) 鍵主良敬『華嚴教學序説――真如と真理の研究――』（文栄堂、昭四三・六）を参照。

(54) 西田幾多郎「絶対矛盾的自己同一」（『思想』昭一四・三）..『西田幾多郎全集』第九卷』（岩波書店、昭二四・二）一四七頁。小坂国継「『絶対矛盾的自己同一』とは何か」（『西田幾多郎の思想』講談社、平一四・五）を参照。

(55) 沼波前掲『始めて確信し得たる全実在』九五頁。

(56) 沼波前掲『始めて確信し得たる全実在』九六、九七頁。

(57) 夏目金之助「大二・八・八付／沼波武夫宛書簡」..前掲『漱石全集』第二十四卷』一九五頁。

(58) この時期の参禅体験について沼波自身が私小説風に語った文章に「白日下の涙」（『新小説』大二・七）、「夏の陽炎」（『反響』大三・四）がある。

(59) 沼波前掲『始めて確信し得たる全実在』一四九、一五〇、一五五頁。

(60) 露伴の日記（大五・四・一七付）には「夜沼<sup>（マママ）</sup>彼武雄 栗原元吉「古城、一八八二・一九六九」来る。二人降神術の如きことを語る。所謂御筆さきによつて古今の事を知るといふ。御筆さきは蓋し許氏の書に見えたる敷<sup>すい</sup>なるべし。論語の如きも御筆さき即神示によりて新解を得、これを新修養社に寄せたりといふ。「…」とある。幸田露伴『露伴全集』第三十八卷』（岩波書店、昭二九・九）三五二頁、ルビ引用者。

(61) 文壇からは他にも小山内薰（一八八一一九二八）や池田大伍（一八八五—一九四二）が入信するなど、山田鶴子は一時「巣鴨の神様」として世間の注目を浴びたが、後に教団本部を巣鴨から他所へ移転してからは大した発展もなく終わったという。以下の文献中の記述を参照。新聞記事「奇蹟を行ふ婦人 巣鴨至誠殿の神様として知らる」（『読売新聞』大五・六・一〇）、石橋臥波「女神様列伝」（『婦人世界／愛情研究号』大一〇・一）、中村武羅夫編『明治大正文豪研究』（新潮社、昭一一・九）等。

(62) 松本道別「沼波さんと信仰」（前掲『噫 瓊音沼波武夫先生』）一九一頁。

(63) 沼波瓊音「紅の雲」（『花月』大七・一〇）..前掲『沼波瓊音／意匠ひろひ』三八五頁。

(64) △□●「文芸雑事」（『日本及日本人』大五・四・一）一九九頁。

(65) 沼波瓊音「俳味が無くなつてから今日まで」（『旅日記』大九・一）..前掲『沼波瓊音／意匠ひろひ』三三一頁。

(66) 夏目金之助「大四・二・一七 付／斎藤茂吉宛書簡」..前掲『漱石全集 第二十四卷』三九六頁。

(67) 沼波瓊音「自序」（『やなぎ樽評釈』南人社、大六・一〇）三頁。

(68) 松本前掲「沼波さんと信仰」一九一頁。

(69) 沼波瓊音「第一義の所から」（『雄弁』大六・一〇）四一一页。

(70) 夏目漱石「私の個人主義」（学習院講演、大三・一一・二五）..『漱石全集第十六卷』（岩波書店、平七・四）六〇八頁。松本常彦「漱石と禅——行人」の場合——（『語文研究』平一八・一二）三四頁。漱石の個人主義の特質については、亀山佳明『夏目漱石と個人主義——「自律」の個人主義から「他律」の個人主義——』（新曜社、平二〇・二）が詳しい。

(71) 沼波前掲「始めて確信し得たる全実在」一五七頁。

(72) 沼波前掲「始めて確信し得たる全実在」一五七、一五八頁、傍線引用者。

(73) 沼波前掲「俳味が無くなつてから今日まで」三三三頁。

## 第二節 国文学的ナショナリズムの萌芽

### 一 再び国文学者として

大正六（一九一七）年春、数年来の個人的煩悶に区切りを付けた沼波瓊音は、巣鴨から本郷に転居し、俳友の角田竹冷（本名真平、一八五七—一九一九）、伊藤松宇（本名半次郎、一八五九—一九四三）、佐々醒雪らと俳書刊行会を始め、その為の資料蒐集も兼ねて古巣の東京帝国大学文科大学国文学研究室および帝大図書館に通い始める<sup>(1)</sup>。研究室には国文学科同期卒の朋友で今は助教授となつた藤村作（一八七五—一九五三）がおり、ほどなく旧師の芳賀矢一も二度目の洋行（大五・七・大六・五）から帰朝し、彼らの理解もあって沼波は、フリーの国文学者としてひとまずの落ち着きどころを得る。同年中には早くも、江戸後期（明和・天保）の川柳句集である『柳樽（誹風柳多留）』の初篇を解説した『やなぎ樽評釈』（南人社、大六・一〇）を刊行している。また、大正八（一九一九）年七月に岩波書店より編纂を委嘱され約二年半の歳月をかけて刊行（大一〇・一二）した総千頁強の『芭蕉全集』は、「芭蕉研究としてはまことに空前の名著」<sup>(2)</sup>と各方面で高い評価を受け、当代俳諧研究の第一人者としての沼波の力量を改めて世に知らしめることとなつた。

生活の方も徐々に安定し、大正六（一九一七）年一二月には文部省より国定教科書『高等小学唱歌』編纂委員を委嘱され、大正八（一九一九）年六月には拓殖局の嘱託となり、大正九（一九二〇）年四月からは逐次東京女子大学、法政大学、東洋大学等の講師（非常勤）となり、翌年四月には芳賀矢一の斡旋<sup>(3)</sup>で東京帝国大学文学部の国文学講師（俳諧史担

当）兼第一高等学校の国語講師となり、更に翌年三月には一高の教授に昇任している。芳賀としては、もとよりその俳諧・俳句に関する学識を嘱望しての措置ではあったろうが、それ以上に、師である自分の説すら必要とあれば、

芳賀先生は、「徂徠「荻生、一六六六—一七二八」が漢文を以て一世を風靡した如く、自分も古い国文を以て一世を風靡しようと云ふ考を起したのではありますまいか」とまで云はれ、故藤岡「作太郎、一八七〇—一九一〇」先生は「今の時学を弘め名を伝へむとせば、江戸に出づるに如くはなしと」と真淵「賀茂、一六九七—一七六九」先生の江戸入りの意を忖度として居られる。これでは真淵先生の事業は野心から起つたやうに解されはしないか。「⋮⋮」文学史は、もつと深い内的要求、（言換へれば絶大な外的 requirement）、に理解をもつて書かなければならぬと思ふ。「⋮⋮」先生「真淵」の意志は宣長「本居、一七三〇—一八〇一」となり篤胤「平田、一七七六—一八四三」となり、明治の教育の一部となり、明治大正の日本主義となつてゐるのであるでは無いか。決して「古文学の研究となり了」してゐないのである。（<sup>4</sup>）

等々、時に遠慮なく堂々と論駁し自説を開陳してくる沼波の氣概に満ちた學問姿勢に、大正期に入つてしまし「保守停滞」（<sup>5</sup>）氣味の国文学界を活性化させる「カンフル剤」の役割を期待していたのではないだろうか。もつとも後からみれば、それは想像以上の「劇薬」として作用したわけだが。

ともあれ、後々まで学科内で語り継がれる沼波の帝大での「霸氣のある講義振」<sup>(6)</sup>はたちまち学生の心をつかみ、国文学科のみならず他学科からも聽講希望者があらわれ、「あれだけの人が面白がつて聞いて居るのだから」<sup>(7)</sup>といわれるほど毎回教場は賑わいを見せたという。当時の聽講者の一人は次のように回想している。

「芭蕉及び七部集」の御講義は十、十一両年にわたつてなほ完結しなかつたのであるが、芭蕉に入る前提として鬼貫に就いて、「誠のほかに俳諧なし。」を講じ、「鬼貫のいふ誠は千古を一貫したもので道徳芸術の源泉である。」と説き、ひいて「人間に知恵ほど悪いものはなし。」などを解せられる時、「……」先生は俳諧を通して御自身の人生觀をおのべになつたのである。何時であつたかも芭蕉の進んだ跡を顧みて、其の後で、「原文改行」「人間は三十にならなければだめだと思つてゐた、しかし四十を越してみると、四十過ぎなければ何もわかるものでないと思ふ。」などど、講義のひまに当時の御実感をお話しなつたことがある。<sup>(8)</sup>

「へ人生」にいかに向き合うかについて、生徒に向けて語りかけることができる教師は幸せである」<sup>(9)</sup>とは熊本・第五高等学校教授時代（明二九・四～明三三・七）の夏目漱石に関する坂元昌樹の深みある評であるが、その意味からいえば、沼波もまたかつてないほどの「幸せ」を享受していた。

## 二 ナショナリズム実践運動へのめざめ

叙述は前後するが、沼波瓊音が著作・研究生活に復帰した大正六（一九一七）年から翌々年にかけて、日本の思想界・言論界は疾風怒濤の内外情勢——ロシアでの二度にわたる革命の勃発（大六・三、大六・一一）、アメリカの第一次世界大戦（歐洲大戦）参戦と大統領・ウイルソン（Woodrow Wilson, 1856-1924）による「十四ヶ条」の平和原則の発表（大七・一）、日本を含む連合国側諸国のシベリア出兵開始および日本国内での米騒動の拡大（大七・八）、東欧・アジア諸民族における独立機運の高まり、ドイツ革命の勃発と大戦の終結（大七・一一）、パリ講和会議の開催（大八・一・六）、新たな世界秩序（ヴェルサイユ体制）の確立と国際連盟の発足（大九・一）等々——の余波を受けて、文字通り混迷の極みにあつた。

官学アカデミズムの牙城である東京帝国大学の圏域でも、法科大学政治史講座担任教授の吉野作造（一八七八—一九三三）を中心にも、民本（民主）主義の研究・啓蒙を目的とした「黎明会」が結成（大七・一二）され、同じ月には、宮崎龍介（一八九二—一九七一）、赤松克磨（一八九四—一九五五）ら法科の学生有志によつて社会主義——漸次共産主義に特化——の研究・実践を目的とした「新人会」が結成される。他方ではそれらに対抗して、憲法講座担任教授の上杉慎吉（一八七八—一九二九）や太田耕造（一八八九—一九八一）、天野辰夫（一八九二—一九七四）、蓑田胸喜（一八九四—一九四六）、岸信介（一八九六—一九八七）など国家主義を信条とする学者・学生有志が「興国同志会」を結成（大八・四）し、検事総長の平沼騏一郎（一八六七—一九五二）とその側近である弁護士の竹内賀久

治（一八七五—一九四六）の協賛を得て「黎明会」「新人会」を相手に激しい政治理論闘争を開始する<sup>(10)</sup>。

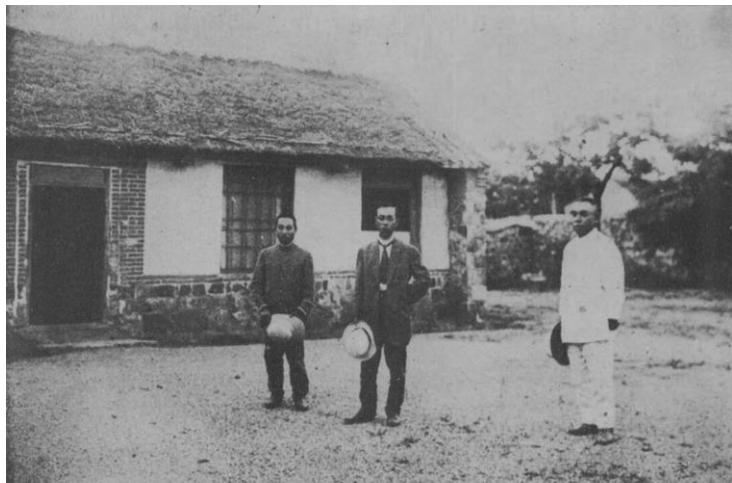
当時興国同志会の学生会員で後に沼波とも別の団体で親密な同志となる綾川武治（一八九一—一九六六）<sup>(11)</sup>は、次のように述べている。

世界大戦の末期大正六年の露西亞革命<sup>(ロシア革命)</sup>は、我が日本の社会主義運動に画期的刺激を与へ、大正七、八年の交は、全国に労働組合及び社会主義団体を簇出した<sup>(12)</sup>。けれども一方に於て、我が日本が参加した連合国側の、米国参戦誘導の爲めにせるデモクラシー擁護讃美の宣伝は、我が国内に民本主義なるデモクラシー運動を起し、次いで国際連盟組織を促進する爲めにせる国際「協調／平和」主義の宣伝は、我が国に流入し来つて我が知識階級間に国際主義の思潮を喚起した。この欧米より殺到し来つた社会主義、デモクラシー、国際主義の三思潮は、常に新しき傾向を喜び迎へんとする習癖を有する学者思想家の大部分を捲き込んで、異常なる迫力を以て、日本精神、日本国家に挑戦し來つたのである。「……一方国際連盟協会は、朝野の名士を集めて組織「大九・四」され、一般知識階級に国際主義を鼓吹し、帝国教育会長沢柳政太郎「一八六五—一九二七」博士は『人類の奉仕すべきは国際であつて國家でない』とまで放言するに至り、教育界にまで反日本主義的思想が鼓吹されたのである。<sup>(13)</sup>

また、藤村作の回想<sup>(1)4)</sup>によれば、大正八（一九一九）年に、経営難のため廃刊の危機に瀕していた『帝国文学』と、新たに発刊予定の興国同志会の機関誌との統合化計画が持ち上がり、同年四月より東京帝大文学部——大正八（一九一九）年四月、分科大学制より学部制に移行——の事実上の機関誌たる『帝国文学』の編輯を委嘱されていた沼波が、その新雑誌の文芸欄の責任者に就任する予定であった。だが、翌年一月に興国同志会の一部急進分子が経済学部助教授の森戸辰男（一八八八—一九八四）の論文「クロポトキンの社会思想の研究」（『経済学研究』大八・一二）を無政府主義礼賛と決め付けた過剰な糾弾行動に出て「学問の自由の侵害」<sup>アナルギズム</sup>と学内外から猛反発を受け、組織が著しく弱体化し脱会者が続出した、いわゆる森戸事件<sup>(1)5)</sup>のために計画は頓挫してしまったのだという。興国同志会は二月に単独で機関誌『戦士日本』を発刊したが創刊号のみに終わり、『帝国文学』も結局一月の新年号を以て終刊となつた。

いずれにしても、そうした喧々諤々の思想・言論環境に在つて纖細な沼波がひとり専門の俳諧研究のみに没頭していられようはずがなく、この時期のものと推定される書簡のなかでは「欧洲大乱につきつく／＼思ひ候は、日本文壇の精神的独立の機の至りつゝあることに候。今日のやうに自国を輕侮して居ては、兵力でいくらどこと勝つても、心は属邦に候。この際日本の芸術の発展を熱望する『日本を知つてる人』と、西欧芸術をウンと知り抜いた人と提携すること急務「……」<sup>(1)6)</sup>と述べ、日本の文芸・文化ひいては国民の意識そのものにおける外国への隸従、精神的亡国の兆候について憂慮をのぞかせている。

### 三　国文学者は国家革新の夢を見たか



日露戦争水師營会見所跡にて（中央沼波瓊音）  
『鮮満風物記』（大阪屋號書店、大正 9 年 11 月）より

アジア全域の欧米植民地支配からの解放をライフワークとするジャーナリストの満川亀太郎（一八八八—一九三六）らによつて結成され、翌年一月には上海から革命思想家の北一輝（本名輝次郎、一八八三—一九三七）を招聘し、明治的な色調を帶びない「革命主義、國家主義で、而して民族主義」（<sup>20</sup>）の普及・実践を目指した、フレッシュな右派団体であった。

大正八（一九一九）年の七月から九月にかけて、拓殖局より出張（視察）を命じられ人生初となる日本本土外への旅行に赴いた沼波瓊音は、總督府治下の朝鮮や國益の最前線（生命線）とされた満洲の実情をつぶさに目の当たりにし「日本國の姿を、國の外皮に立つて明らかに認め得」て、そこから「東亜を先づ我が國と観じて、ひろく東亜を引つ包んでの愛國の熱情」をたぎらせる（<sup>17</sup>）。しかして帰国後、沼波は、フランスの詩人・宗教学者で西歐文明の行き詰まりと東洋就中日本の世界史的使命を説くため長期滞日中のリシャール（Paul Richard, 1874-1967）を訪ねた」とをきつかけに、その同居人でかつて面識（<sup>18</sup>）のあつたインド・イスラムおよび日本文明研究家の大川周明（一八八六—一九五七）と昵懇となり、翌年二月頃から同人の関係する思想結社「猶存社」に出入りを始める（<sup>19</sup>）。同社は、大正八（一九一九）年八月に大川周明と、

ここで沼波は、大川、満川、北の三領袖（社内では三位一体の「三尊」と呼ばれた）をはじめ、欧米留学の経験を持つ観念論的哲学者の鹿子木員信（一八八四—一九四九）、スラヴ・ロシア研究家の嶋野三郎（一八九三—一九八二）、中国研究家の笠木良明（一八九二—一九五五）、国際人種問題研究家の前述綾川武治、北の配下で実行力に富む岩田富美夫（一八九一—一九四三）、同じく清水行之助（一八九五—一九八〇）等々、後々官憲から右の革新勢力における「最も有力なる指導的人物」<sup>(21)</sup>と評される人々と識り合い、親交を深め、「同人全体が非常に仲睦まじく、和気藹々たる雰囲気」のなかで「談笑の裡」<sup>(22)</sup>に専門外の政治・外交・社会・経済・軍事等に関する蒙を啓かれていった。よほど水が合つたのであろう。沼波は、大正一一年（一九二二）年七月に、その頃はまだ東京帝大法学部を卒業したばかりで後に一部政官界の黒幕的存在とみなされ「昭和の由井正雪」<sup>(23)</sup>などの呼称を奉られる東洋思想研究家の安岡正篤（一八九八—一九八三）を帶同して社に引き入れていて<sup>(24)</sup>。

猶存社は、北一輝の『国家改造案原理大綱』（大八・八初稿、後に『日本改造法案大綱』と改題して公刊）を理論的柱に「革命的大帝国の建設運動」「国民精神の創造的革命」「道義的対外策の提倡」「亜細亞解放のための大軍国的組織」「エスペラントの普及宣伝」等を綱領に掲げ<sup>(25)</sup>、機關誌『雄叫び（雄叫）』（大九・七創刊）等を通じて沼波いうところの「馬鹿々々しきまでの国粹保存」<sup>(26)</sup>とは全く趣の異なる前衛的なナショナリズムを社会一般に向けて発信した。わけても異彩を放つエスペラント採用論は、北が『国家改造案原理大綱』「卷六 国民ノ生活権利」のなかで日本語の言語文字として「甚タシク劣悪」で「不便」な点を問題視し、

将来的に北部は極東シベリア・満洲から南部は濠洲まで版図に收めるこ  
とになるであろう「革命的大帝国」日本の「第二国語」に採用すべし——  
さすれば「五十年ノ後」には「自然淘汰律」によつておのずから日本語を  
駆逐し「第一国語」の座に就いていよう——と説いた<sup>(27)</sup>ことを受けたも  
のであつた。さすがに沼波も、多年日本語の冠絶性を自明<sup>(28)</sup>とする國  
語・国文の世界を生きて來ただけに、このようなプランをそのまま受け容  
れることは出来なかつたろうが、來たるべき「世界を導く者」「……」より  
よき世界に君臨するもの<sup>(29)</sup>としての「革命大帝国」日本のビジョンに

はやはり心躍らされるものがあつ  
たに違ひない。



北一輝（遺影）  
『日本改造法案大綱』（同刊行会、昭和 41 年 1 月）より



復興亜細亜講演会（大正 11 年 11 月 30 日）弁士控室  
左より満川龜太郎、一人おいて綾川武治、右端大川周明  
『東京日日新聞』（大正 11 年 12 月 1 日 9 面）より

ともあれ、猶存社への加盟を機に  
右の言説空間に恒常的に身を置く  
ようになつた沼波は漸次その意識  
を先鋭化させていき、時には黎明会  
の吉野作造を外来思想に毒され「青  
年の精神に正しからざるもの吹  
き込」む奸賊と公然罵り「もうとう  
に殺されていて然るべきなんだ。誰  
か彼奴を殺さないかな」<sup>(30)</sup>と本気  
でその死を願い、また時には、北一  
輝に倣つて日本を「魂のドン底から  
覆<sup>くつが</sup>へ」<sup>(31)</sup>すべくそのための国家改

造（革新）にかかる運動資金の調達に腐心するなどしたという。

又或る日お訪ねした際申されるには、革新運動には淨財が必要である。自分の郷里は名古屋（アマヤ）で、家伝の脚気の妙薬の処方が残つて居るから之で軍資金を作つてはどうか、自分は革新奉公のためには浅草界隈に出てサンドキッチマンでも何んでもやると真剣に述懐されたこともあつた。<sup>(32)</sup>

ところで、猶存社の活動のうち注目すべきものの一つに、東京帝國大学の「日の会」、東洋協会大学（拓殖大学）の「魂の会」、早稻田大学の「潮の会」、慶應義塾大学の「光の会」、それに沼波が教鞭を執る東京女子大學の第一次「国の会」<sup>(33)</sup>など、同人たちの関係する官公私立大学・高等学校・専門学校内に傘下の学生思想団体を次々と発足させたことがある。なかでも有力視されたのは、前述の森戸事件（大九・一）を機に興国同志会を脱会した岸信介、三浦一雄（一八九五—一九六三）らが、鹿子木員信、大川周明を指導者に迎えて同年中に組織した「日の会」であった。後に東京帝大文学部の講師に就任（大一〇・四）する沼波も、同会の運営には当初から深く関わったとされ、鹿子木が欧米再留学に出立（大一二・三）してからは新たな指導者に推戴されている<sup>(34)</sup>。

猶存社は、大正一二（一九二三）年になつて首領格の北一輝と大川周明の「意見の不一致」がにわかに顕在化し、三月に事実上解散<sup>(35)</sup>してしまうが、沼波はその後も兩人と変わらぬ好誼を続いている。とりわけ大川の存在は、この頃はまだ「日本の世界的地位」や「日本人の心」に

ついてみずから國文學の學知で「明晰に内容づ」けて「説明する事」が出来なかつた沼波にとつて、それらを「自分に代つて語つてくれ」る得がたい先達<sup>(36)</sup>なのであつた。

#### 四 「新國学」の建設に着手

大正一二（一九二三）年九月一日、関東一円に最大震度6以上と推計される未曾有の大地震が発生する。直接罹災は免れた沼波瓊音であつたが、少年時代に体験した濃尾地震（明二四・一〇・二八）を上回る惨状を目の当たりにして國家滅亡への危機感はその脳裡に否応なく増幅——亡き漱石が、かつて小説「三四郎」（『東京／大阪朝日新聞』明四一・九一—二連載）中の登場人物をして語らしめた予言「（日本は）亡びるね」（一の八）<sup>(37)</sup>もあるいは脳裏をよぎつたかもしれない——されていつた。

長明「鴨、一一五五一二一六」が元暦の地震「平家滅亡の約三ヶ月後」を書いたあとに、「いさゝか心の濁もうすらぐかと見し程に、月日かさなり、年越えし後は、言の葉にかけて、いひ出づる人だに無し」「『方丈記』」と記したるその絶望に似たものが、昨今時々私の心に起る。併し絶望は天に対しての冒涭である。力めてこれを払つて、根気よく使命を続けねばならぬ。<sup>(38)</sup>

更に、同年一二月二七日には左派テロリスト・難波大助（一八九九一一九二四）による虎ノ門・摂政宮裕仁皇太子狙撃事件が起こり、ここに至つて沼

波は、荒廃した人心を立て直し日本人・日本国民としてより強い自覚と団結を促す、そのための実践的学問を構築する必要性を痛感する。翌大正一三（一九二四）年六月一日付の書簡のなかで、沼波は、あたかも天皇の名によつて「浮華放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ズ」（「国民精神作興ニ関スル詔書」大一二・一一・一〇）と示された世相<sup>(39)</sup>を端的に反映したかのような虎ノ門事件の意義を、自身に引き寄せて次のように総括している。

小生浅学不才をかへりみず敢て日本精神の闡明、新国学の建設に着手致候事まことに難波大助様のおかげにて候。あのピストルは攝政宮を害せむとのものにあらずして小生の怠慢を責めたる一発と感じ候。<sup>(40)</sup>

しかして彼は翌月、宮内省図書寮編修課長の本多辰次郎（一八六八—一九三八）らと第二次「国の会」を立ち上げ、神話・国史研究を本格的に開始し、わずかな時日の間に「ひた押し」の「根気」を以て『古事記』『日本書紀』をはじめとする多量の史書・国典を次々と読了していく。<sup>(41)</sup>こうしたところから沼波はみずからの存在性を、「専門」という近代学術の枠組に縛られた「国文学者」から、「日本の国民精神の自覚の上に立つて、大に国風を興し、現在の利己的な、物質的な道徳の頽廃を救」<sup>(42)</sup>わんとする「国学者」<sup>(43)</sup>へと自覺的に変容させたのである。

今日の学問の欠点の第一は、余りに細かく学問を分け過ぎてゐることなり。「……」日本を知りたし、日本は如何なる国か、この問を、当

代一流の知者と目せられる何々教授、何々博士に片ツ端より問ひめぐりて、誰が満足なる答をなしくるゝぞ。「……」よしたとひ日本文学全部にわたりての知ある人と雖、今まで国文学者の扱ひしのみの日本文学にて、いかにして日本を会得し得む。（<sup>44</sup>）

## 五 東京帝国大学講義「日本精神ト国文学」

虎ノ門事件を契機として「新国学」の建設に実質的に着手した沼波瓊音であったが、それと同時に、東京帝大における彼の国文学講義（俳諧史）のスタイルにも変化がみられ始める。それまでは芭蕉以下蕉門の俳諧・俳論をテクストに沿って順次講説するというまがりなりにも実証的であったものが、大正一三（一九二四）年度からは芭蕉、鬼貫、各務支考（一六六五一七三一）、広瀬惟然（生年未詳一七一一）らの句作や文章、事跡から直接「日本人の精神の非常に重要な一面」（<sup>45</sup>）をよみ解いていくというやり方に転じたのである。

まづ先生の芭蕉觀は主としてその武士的な、凜とした方面を強く見られた様である。「……」芭蕉の俳諧は一の芸術の範囲に止まるものではない、それは彼の全人格、全生涯を支配したものだ、筆先丈ではなくく、身ぐるみの俳諧だ、と言ふのは、強ち先生丈の主張ではないにしても、それが先生の口から発せられる時に、非常な力を以て響いたのであつた。かうした芸術即生活の立場から、先生は又、「まこと」を以て芸術道德両方面を貫く根本の道と見た鬼貫を頗る推重せられ、古来の俳人中、最も偉いのは芭蕉と鬼貫で蕪村「与謝、一七一六一七八

三」などは遙かに下位にある者だとのお説であつた。「……併し何と言つても、当時の先生の俳諧史上に於ける最大の御収穫は、支考の研究であらう。【……】支考が「新撰大和詞」などで試みた漢文の日本化の問題で、之も勿論其内容の拙い事は認められたが、単に一時の興なる俳諧のほかに、何か永久的な仕事を残さうとした支考の精神を諒とせられたので、就中漢文の日本化と言ふ点が、先生の立場から御気に召したものと思はれる。<sup>(4-6)</sup>

だが、やがてそれすらも「こんなに人類社会を挙げて苦しんで居るのに俳諧がどうの和歌がどうのと呑気なことをならべて居られるか」<sup>(4-7)</sup>と倦み始めた沼波は、到頭意を決して「『日本精神』に関する講義をやらせるならば続けるが、俳諧の講義ばかりならば断然講師を辞する」<sup>(4-8)</sup>と朋友の藤村作に申し出る。既に退官（大一一・三）した芳賀矢一の後を襲つて国文学研究室の主任教授に昇任していた藤村は、これに最大限の好意を以て報い、教授会を説得し大正一四（一九二五）年度に「日本精神ト国文学」と題する毎週二時間の自由講義（無単位）を開講させた<sup>(4-9)</sup>。沼波が勇躍これに取り組んだことは論を俟たない。彼の没後に公開された小稿「国に就て」は、その初回講義（序論）の手控えであり、倫理学者・深作安文（一八七四－一九六二）の講演「國家と偉人」（大一四・？）<sup>(5-0)</sup>や大川周明の論文「道義国家の原則」（月刊『日本』大一四・四）に拠つてみずからの国家観を断片的に明示した貴重な資料である。

国家は、完成した社会なりと云はれてゐる。国家といふ社会には一の社会精神あり。これを国家精神或は国家心と云ふべし。

沼波云——わが日本精神と云ふもこれなり。〔……〕

偉人は国家精神を人一倍に分け前してゐるもの也。わが偉人においては、個人精神は、意識の下に潜み、国のために働く、公のために働くといふことが、心のほとんど全部を領してゐる。国家精神は国家我と云ひて可なり。國家に関する偉人とは、國家我の所有者なり。この國家我が国家の本体なり。

沼波云——この辺すべて異存なし。〔……〕

国家生活に於ける文教、政治、経済の三部門に於て夫々正しき関係を樹立することによつて、始めて我等の道徳的実現としての国家たることが出来る。「……」

現時この余の胸にをどり湧き上る同じものを秩序整然と披瀝して、しかも火の如きものを読者及び聴者に与ふる人大川周明の外にあるなし。こゝに畏友の語即ち余の心を語つて、序論の結びとし、歴史的踏査に入らむとす。(51)

かの歴史学者・カー(Edward Hallett Carr, 1892-1982)も「全体主義は、病氣ではなくて一つの徵候であつた。危機におそわれたところはどこでも、」の徵候の形跡を見出すことができたのである」(52)と指摘しているように、こうした沼波の見識に、おりしも西欧、ヴァイマル＝ドイツに浸透していたプレ・ファシズム、伝統的な「民族共同体」への無条件の奉仕と自己同一化を以て個人の最高の徳義と推定する全体主義・民族社会主義の思

潮——例えば、メラー・ファン・デン・ブルック (Arthur Moeller van den Bruck, 1876-1925) や国家社会主義ドイツ労働者党 (ナチス) の創始者の一人・エツカート (Dietrich Eckart, 1868-1923) などが高唱したそれ<sup>(53)</sup>——との共振性をみて取ることは容易であろう。

該講義には「沼波ファンともいるべき学生が三、四十名〔…〕」文学部以外の学生や、女子聴講生など<sup>(54)</sup>が参集し、教場は毎回異様な熱気に包まれたとい。準備に伴う「過度の勉強」で体調を崩しがちになつた沼波が大正一五（一九二六）年三月にやむなく帝大講師を辞任した<sup>(55)</sup>こととで結局單年度限りに終わつたが、大正期には未だ「一個の学として十分に成立してはゐな」かつた「日本精神」なるものの講究<sup>(56)</sup>を官学アカデミズムの場で初めて実践に及んだ沼波の先駆性<sup>(57)</sup>は特記に値する。

## 六 更なる前衛へ、終焉

さて、前述猶存社の消滅後も沼波瓊音は実践的な思想運動への意欲をいきさかも失つておらず、震災以降皇居内旧本丸跡の社会教育研究所に転居した大川周明のもとに北一輝を除く旧猶存社同人たちが再結集した「行地会」<sup>(58)</sup>に加わり、その流れで会を拡大発展させた「行地社」の結成（大一四・一・一一）にも自然と参画するところとなり、機関誌となる月刊『日本』創刊号（大一四・四）の巻頭を自作の雅文——「皇の大御宝」「日本国民の意」よ、物な思ひそ。皇を信ぜよ、神を信ぜよ、道を信ぜよ、かの燐爛たる彼岸の浄光を見よ。「……」字々実たり、句々力たり。吾人誓つて行を伴はざる言を記せし」——で飾つてゐる<sup>(59)</sup>。

## 読むべき雑誌はたゞ一つ

# 日本

で  
す

△道義國家を地上に建設せんとする雑誌  
△日本國民の針路を指示せんとする雑誌  
同人 沼波武夫 大川周明 安岡正篤 藩川龜太郎 村上徳太郎  
執筆者 松延繁次 中谷武世 佐伯綾 柳瀬薰 熊順一 島野三郎 笠木良明  
月刊毎月一日發行 定價一部金二十錢郵稅錢 半年金一圓五十錢  
口二ヶ年金參圓稅去郵便小爲替又は振替金口座に拂込乞ふ

東京市牛込區南横町二十二番地

行  
地  
社

振替東京五二四八一一番

「国民的理想の確立」「有色民族の解放」「世界の道義的統一」の立場から軍人（士官）、学校教員、学生、農村部の青年団員など「将来の民衆指導者たるべき

人々」に訴えかけ、彼らを国家革新の同志細胞として獲得すべく積極的な宣伝・啓蒙事業を展開した<sup>(59)</sup>。沼波も社や社傘下の学生団体が主催する講演会に適宜出講し、社附属の青年鍊成道場である「大学寮（社会教育研究所教育部）」の開寮式（大一四・四・一三）では講師陣を代表して訓示を述べ、寮生たちに定期的に「日本文学」を講じるなど<sup>(60)</sup>して、あたう限り協力している。この時期彼が一般誌に寄稿した檄文からは、「没我を快しとし、団結を快しとする時代」<sup>(61)</sup>の前衛としての自負が如実に伺える。

昼となく夜となく、日本国を撼<sup>うごか</sup>して轟きわたる声あり。

『出でよ偉人』『出でよ救世主』

この声、日々に高鳴り、刻々に響きまさる。「……」

国人模倣に倦み、雷同に倦み、論に倦み、理に倦み、肉の跳梁に倦む。「……」

偉人出でよと呼ぶ者はその者すなはち偉人なるなり。救世主出でよと叫ぶ者はその者すなはち救世主なるなり。

行地社は、「維新日本の建設」

「国民的理想の確立」「有色民族の解放」「世界の道義的統一」の立場から軍人（士官）、学校教員、学生、農村部の青年団員など「将来の民衆指導者たるべき

人々」に訴えかけ、彼らを国家革新の同志細胞として獲得すべく積極的な宣伝・啓蒙事業を展開した<sup>(59)</sup>。沼波も社や社傘下の学生団体が主催する講演会に適宜出講し、社附属の青年鍊成道場である「大学寮（社会教育研究所教育部）」の開寮式（大一四・四・一三）では講師陣を代表して訓示を述べ、寮生たちに定期的に「日本文学」を講じるなど<sup>(60)</sup>して、あたう限り協力している。この時期彼が一般誌に寄稿した檄文からは、「没我を快しとし、団結を快しとする時代」<sup>(61)</sup>の前衛としての自負が如実に伺える。

昼となく夜となく、日本国を撼<sup>うごか</sup>して轟きわたる声あり。

『出でよ偉人』『出でよ救世主』

この声、日々に高鳴り、刻々に響きまさる。「……」

国人模倣に倦み、雷同に倦み、論に倦み、理に倦み、肉の跳梁に倦む。「……」

偉人出でよと呼ぶ者はその者すなはち偉人なるなり。救世主出でよと叫ぶ者はその者すなはち救世主なるなり。

求むる者こそ与ふる者なれ。「……」

日本国は至誠の国土、至上の靈魂なり。

斯国体は最も古くして常に新しく、最も原始的にして常に最も合理的なり。「……」

知る者醒めたる者は、箇々相応の法音と箇々相応の利劍とをもて、修理の神業に従へ。「……」

聞け、聞け、求むる声は怒涛の如し。

機は十分に熟す。

いざ揚げよ狼煙を。<sup>(62)</sup>

結成以来、行地社は「当時幾多の日本主義運動が行はれて居つたが特異的存在北一輝一派を除いては行地社のそれと比すべきものはなかつた」<sup>(63)</sup>と評されるほどに、少壯の右派論客・運動家の一大拠点として順調にその歩武を進めていた。だが、大正一四（一九二五）年八月に安田共済生命争議事件——北一輝が、先に調停を依頼されていた大川周明を出し抜いて事態の取りまとめを会社側に約束し報酬を受け取つたとされる件<sup>(64)</sup>——が発生し社内では北と大川いずれを支持するかで同人間に意見対立が生じる。更に翌年五月には宮内省怪文書事件——北一輝の側近・西田税（一九〇一—一九三七）らが北海道の御料地売却に関して宮内省高官に種々の不正があつたとする怪文書を大川周明と個人的に親しい内大臣の牧野伸顕（一八六一一一九四九）、宮内次官の閔屋貞三郎（一八七五—一九五〇）、内匠頭の東久世秀雄（一八七八—一九五一）らに送付し、暗に恐喝を行つたとされる件<sup>(65)</sup>——が発覚し、事件の黒幕とされた北を大川が虚実ないまぜに誹謗中傷する

に及んで、北に肩入れする満川亀太郎、嶋野三郎、笠木良明、綾川武治ら主要同人のほとんどが七月から八月にかけて行地社を脱退するという騒動に立ち至ってしまう<sup>(66)</sup>。沼波もまた、大川とその取り巻きによる強引で独善的な運営体制にかねがね反感を募らせていたこともあって、これを機に「今や判然として天狗道に在る」<sup>(67)</sup>とみなした大川一派および社との関係を断ち、「行地社精神を持つ正統派」を以て任じる満川らが新たに立ち上げた「一新社」に名を連ねている<sup>(68)</sup>。

たしか行地社の社歌を作つてくれと大川「周明」氏から依頼され作つたが、これは気に入らなかつたと見えて、棄てられて、大川氏自ら作つたものが社歌として歌はれて居た。「原文改行」或時行地社から例の不鮮明な謄写版刷のはがきが来た。それは会の通知であつたが、今度の会に出席しない者は処分をする、と書いてあつた。糞オクらへと思つてわざと欠席した。一向何の処分もされずに今日に至つた。こんな馬鹿なことを一体どいつが書くのか、書かせるのか、これぢや行地社なるもの、大事をなし得ざるものと、全く侮蔑する心持になつて了つた。<sup>(69)</sup>

因みに大川はこの後、デマゴーグの資質を大きく開花させ、昭和六（一九三一）年には橋本欣五郎（一八九〇—一九五七）ら陸軍のエリート幕僚将校（佐官級）たちと結んで三月事件・十月事件の謀議に参与し、更に、翌年の五・一五事件では首相・犬養毅（一八五五—一九三二）を殺害した海軍青

年将校らに對する幫助等の容疑で逮捕・起訴され有罪判決を受けることになる。

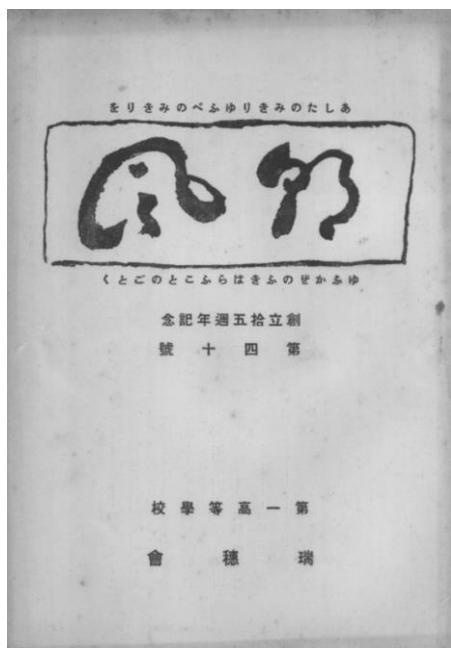
なお、前述宮内省怪文書事件では、沼波も証人の一人として検事・予審判事から各々聴取・訊問を受けている。それらの記録によると、大正一五（一九二六）年六月に、怪文書の流布を知った元警視総監で宮内省に太いパイプを持つ貴族院議員の赤池濃（一八七九—一九四五）が北一輝に三千円を贈与して事が大袈裟になる前に穩便に収めさせようと画策し、その取り次ぎをかねて面識（<sup>70</sup>）のあつた沼波に依頼した。「左様な汚い使を支度くないのと又三千円許りの金で解決仕様とするのは余りに馬鹿々々しい事と思ひ」（<sup>71</sup>）ながらも沼波は不承不承その役目を引き受けたが、肝心の北は額を不服としてか受け取った金包みを自宅に放置したまま一時姿をくらまし、あげく西田税ともども市ヶ谷刑務所に収監（翌年一月に保釈）されるなど、何とも不透明で後味の悪い結果に終わってしまった。北とは「互いに先生」（<sup>72</sup>）と呼んで認め合い、その識見と行動力を「気品の高い人と交はれば、随分実際的活動の出来る者であるが然らざれば知らず世の中に如何なることをするか判らぬ様になりはせぬかと思はれる胆略の人」（<sup>73</sup>）と良くも悪くも高く評価していた沼波であったが、他方で、以前から無職の北が「大邸宅に豪奢の生活をして居ることに就ても幾分疑惑を懷く様になつて」（<sup>74</sup>）いたこともあって、事件を機に交情は自然と薄まつたとみられる。

因みに北はこの後、陸軍部内の皇道派と呼ばれる革新勢力、就中隊附青年将校（尉官級）たちの熱烈な支持を得てより一層カリスマ性を高めてい

き、下つて昭和一一（一九三六）年の二・二六事件では叛乱部隊の民間側首魁に擬され、遂には刑死の運命を辿ることになる。

さて、行地社を離れた沼波は、大正一五（一九二六）年二月一一日にみずから中心となつて第一高等学校内に組織した「瑞穂会」——前述の第二次「国の会」もこれに吸收——に運動の拠点を全面的に移す<sup>(75)</sup>。以降は、会専従の指導者として「皇國千古一貫の生命たる日本精神の正しき把持」<sup>(76)</sup>を旗印に「戈を執つて姦を斬る」<sup>(77)</sup>たゞいの直接行動路線<sup>(テロリズム)</sup>でも「正義を街頭に叫んで衆を激する」<sup>(78)</sup>たゞいの大衆扇動路線<sup>(デモンストレーション)</sup>でもない第三の道、「われわれが世の中へ出て、それぞれの適當なポストについていた時、あらゆる部面にいる仲間が、いわゆる平和革命をやるべきだ」<sup>(79)</sup>との展望に立つた人材育成強化活動を精力的に展開していく。

主な取り組みは以下の通り。第二次「国の会」以来となる、神話・国史研究会の継続。沼波の元個人雑誌（大一二・一一創刊）で中途から会の機関誌（大一五・八〇）となつた、月刊『朝風』を通じての言論発信<sup>(80)</sup>。児島惟謙（一八三七—一九〇八）、島山勇子（一八六五—一八九一）、副島種臣（一八二八—一九〇五）など近時日本精神の真個体現者と認めた「偉人」たちの顕彰事業<sup>(81)</sup>。「外国の統治下にあるアジア民族の現状の改善／アジア諸国間に現存する不平等条約の撤廃」等を期して亡命・帰化



『朝風』第40号（昭和16年2月）表紙

インド人のボース（Rash Behari Bose, 1886-1945）や

アフガニスタン政府顧問・プラタップ (Raja Mahendra Pratap, 1886-1979)

などアジア諸国の著名な民族主義者が、ぞつて参加を表明した、長崎での「全亞細亞民族會議（全亞細亞連盟発足大會）」（大正五・八・一～三）への会員派遣<sup>(82)</sup>。「現代の誤れる教育は徒に怠慢遊惰の徒をつくり多量生産に陥れる〔…〕大学の法文両科は亡国要素の製造所なり〔…〕小学校が國家の神聖の場所たるべく」云々として初等から高等まで教育制度全体の抜本的刷新を訴えた「現代教育改革論」の提唱<sup>(83)</sup>。等々。

瑞穂会の搖籃に子守の役を勤められしは先生「沼波」なり。十人余の高生の会合が一年にして八十の会員を加へ多数有能なる先輩の御指導を得るに至りしも、實に先生の力与つて最も大、否、殆んど全てなりき。

日本を救はむが為、現代の日本、この腐敗頽廃の日本を純真なる日本に帰せしめんが為、先生は身を抛ち家を顧みず、全力を我が瑞穂会に注がれしなり。<sup>(84)</sup>

しかるに、大正一五（一九二六）年一〇月、前述宮内省怪文書事件に巻き込まれた心労も加わってか、かねて変調をきたしていた沼波の健康状態は著しく悪化<sup>(85)</sup>し長期加療を宣告され、一高も休職（昭二・四）を余儀なくされてしまう。それでも病床では、一世を震駭させた「英傑」として尊敬するファシスティタリア統領・ムッソリーニ（Benito Mussolini, 1883-1945）に宛てて「日本精神」と「殆一」なるその「伊國魂」を讃え「伊日両国相提携して世界に新風を布かむ日」<sup>(86)</sup>を近い将来に期待すると述べ

た瑞穂会名義の信書（昭二・五・二二一付）を執筆するなど意氣軒昂なところを見せたが、病勢は日ごとに進行していった。

かくて昭和二（一九二七）年七月一九日、「新国学」の興隆と瑞穂会の更なる発展におもいを残して、沼波瓊音は奇しくも漱石と同じ満四十九歳で没したのである。

無二の柱石を喪った瑞穂会は、その後、OBの中井淳（一九〇三—一九五四）や澤登哲一（一九〇二—一九七九）、贊助会員で実業家・教育家の大倉邦彦（一八八二—一九七一）や聖徳太子（五七四—六二二）の研究家として知られる黒上正一郎（一九〇〇—一九三〇）らの主導するところとなり、一時は一高生だけでも百数十名の会員を擁するまでに会勢を拡大せる<sup>(87)</sup>。また、黒上を通じて後述する三井甲之（本名甲之助、一八八三—一九五三）の学問と思想に影響を受けた一部のメンバーは、瑞穂会とは別に一高「昭信会」を立ち上げ（昭四・五）、やがては同会出身の田所廣泰（一九一〇—一九四六）、吉田松陰（通名寅次郎、一八三〇—一八五九）の実妹の曾孫に当たる小田村寅二郎（一九一四—一九九九）らが「日本学生協会」を組織（昭一五・五）し、ナショナリズム学生運動のかつてない全国的展開をプロデュースしていくことになる<sup>(88)</sup>。だが、そこに待ち受けていたのは、戦時体制下における右派学生の暴走（反体制化）を警戒する官憲からの弾圧と、更にそれから先昭和二〇（一九四五）年八月に訪れる全体的破局であった。そのような結末を見届けることなく、国家革新の明夢から醒め切らぬまま幽冥境を異にしたことは、沼波自身にとっては、むしろさいわいであったといえるのかもしねない。

## 七 小結

以上ここまで、政治的文学者・沼波瓊音の明治中期から昭和初頭にかけての学問と思想を鳥瞰的に論じたえた。

近代日本のナショナリズムとしての沼波の特徴は、ひとえにその前衛性と能動性にあつたといつてよいであろう。昭和初年代の終わり、和辻哲郎（一八八九—一九六〇）は、

『日本精神』といふ言葉は目下の流行語の一つである。しかしそが何を意味してゐるかといふことは、あまり明白ではないやうに思はれる。「……」外に発して露はにきれたものを媒介とし、そこに己れを表現するところの主体的なものを捕へる仕方は、我々が精神を把握し得る唯一の仕方であると云つてよい。「……」我々は生活のあらゆる方面に実現せられた日本の文化を通じてそこに発露した日本精神を捕へねばならない。これが日本精神への通路である。（<sup>89</sup>）

と述べ、また横光利一（一八九八—一九四七）も長篇小説「紋章」（『改造』昭九・一・昭九・九連載）を執筆し、そのなかで「民衆から独立した巨大な別個の存在」として国家の全体性・超越性を観念し「およそ何事によらず、ただ自身が正しいと直覚したことのみに驅進する主人公・雁金八郎の人物造形を通して「日本人の根柢に座りつゞけて来た昔からの精神」「日本精神といふもの」の表象を試みている（<sup>90</sup>）が、沼波の言説と行動は「現実」の人生において彼らのとうに先を行っていた。

沼波が東京帝国大学文学部国文学科の講師として教鞭を執ったのは五年前ほどであったが、そのもたらした作用は決して小さくなかった。国文学に加えさまざまな哲学的・宗教的思索を経て、大正中期に確立された沼波のナショナリズム。その異様なまでに能動的な信念は「日本精神の闡明、新國学の建設」への志向となつてあらわれ、講義や研究室での談話等を通じて多くの教員・学生に感化を及ぼし、結果的に官立アカデミズムの国文学が自分たちの学問を「國家ノ須用ニ応スル學術技芸」（「帝國大學令」明一九・三・二公布、第一条）として改めて強く意識し直していく、その方向性をある意味決定付けたと考えられる。

じつさい藤村作は、沼波からたびたび「一切の教職などを抛つて国家精神の覺醒に全力を捧げたいと思ふ。「……」君も大学の教職を抛て」と國家革新運動に勧奨されその「熱烈な感情に動かされ」と述べており<sup>(9-1)</sup>、そうしたこともあってか昭和初期には、西洋文明の輸入・模倣の時代を脱した今日の日本にあつて外国語の学習はむしろ「国民的自覚自尊を促す障害」<sup>(9-2)</sup>となつていると断言して中等教育における英語科の廃止を提唱し、市河三喜（一八八六—一九七〇）らアカデミズムの英語・英文学者たちの猛反発——「吾々英語教師は英語を通して我が国の文化を進め、同胞に世界の市民として恥かしからぬ資格を与へんが為に、あらゆる不利な状況と戦ひつゝ努力してゐるのである。然るに何事ぞ、外国語廃止といふが如き暴論を責任ある識者の口から聞かんとは」<sup>(9-3)</sup>——を買つてゐる。

更には下つて昭和一〇年代、藤村の後を襲つて国文学研究室の主任教授（昭一一・五）となつた久松潛一は、沼波の植えた国文学的ナショナリズム

ムの種子、そこから発芽した「新国学」を、より整然と、国家の精神的需要に応じるかたちで開花・結実させていくのである。

### 注

- (1) 沼波瓊音「俳味が無くなつてから今日まで」(『旅日記』大九・一)・山口昌男監修『沼波瓊音／意匠ひろひ』(国書刊行会、平一八・八)三三三頁。
- (2) 相馬御風「沼波瓊音氏の死を悼みて」(瑞穂会編・発行『噫 瓊音沼波武夫先生』昭三・二)一四六頁。
- (3) 藤村作「あゝ沼波君」(前掲『噫 瓊音沼波武夫先生』)八九頁。
- (4) 沼波瓊音「真淵先生の生命」(『帝国文学』大七・一)五三、五四頁。
- (5) 風巻景次郎「芳賀矢一と藤岡作太郎——黎明期の民族の発見——」(『文学』昭三〇・一一)四四頁。
- (6) 東大元級「東大国文科評判記」(『日本文学』昭六・一一)一一一頁。
- (7) 五十嵐祐宏「紅百合」(前掲『噫 瓊音沼波武夫先生』)一一三頁。
- (8) 各務虎雄「沼波先生を憶ふ」(前掲『噫 瓊音沼波武夫先生』)一一〇一、一一〇二頁。
- (9) 坂元昌樹「第五高等学校時代の夏目漱石——論説『人生』を読む——」(同他編『越境する漱石文学』思文閣出版、平二三・三)二五一頁。
- (10) 以下の文献中の記述を参照。望月茂(豹子頭名義)「帝國大学々生の思想団体」(『國本』大一〇・一)、蓑田胸喜「追憶」(『原理日本』昭九・四)、竹内賀久治伝刊行会編『竹内賀久治伝』(酒井書房、昭三五・三)、H・スマス『新人会の研究——日本学生運動の源流——(Japan's first student radicals, 1972)』(松尾尊児他訳、東京大学出版会、昭五一・一一)、夜久正雄「太田耕造先生と興国同志会の人々」(『亜細亜大学教養部紀要』昭五九・六)、中村勝範「黎明会創立における大正デモクラシーの一齣」(『法学研究』昭六〇・二)、長尾龍一『日本憲法思想史』(講談社、平八・一一)、中村勝範編『帝大新人会研究』(慶應義塾大学法学研究会、平九・五)、竹内洋『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化——』(中央公論新社、平一五・七)、同『丸山眞男の時代——大学・知識

人・ジャーナリズム——』（中央公論新社、平一七・一一）、清水あつし「永井了吉『日の会』人脈と『帝大新聞』」（『U.P』平二八・一〇）等。

(11) 綾川については、木下宏一『近代日本の国家主義エリート——綾川武治の思想と行動——』（論創社、平二六・一一）を参照。

(12) 新聞記事「最近に於て意外に増加した労働争議の内容」（『中外商業新報』大一三・一一・一〇六面）には「大正五年においては物価の昂騰に伴れて争議件数は著しく増加し大正六七八年は所謂物価暴騰時代で同期においては労働争議頻発しその件数はいよ／＼激増して大正八年の如きは四百九十七件に及び戦前に比すれば実に十倍の多きに達し参加人員はほとんど十倍して居る」とある。

(13) 綾川武治「純正日本主義運動と國家社会主義運動」（『経済往来』昭九・三）四二頁、ルビ引用者。

(14) 藤村前掲「あゝ沼波君」九〇・九一頁。

(15) 新聞記事「失はれた大学の自由 七百の学生奮起す」（『東京日日新聞』大九・一・一六七面）、同「学説が非と云ふのなら何故学説で争はぬ 独逸でさへ学問の自由はある 安部早大教授談」（『大正日日新聞』大九・一・一六七面）、同「興国同志会の改造」（『大正日日新聞』大九・二・一九七面）等を参照。

(16) 沼波武夫「大？・九・一三付／佐佐木信綱宛書簡」..信綱『明治文学の片影』（昭九・一〇）二五六頁。

(17) 沼波瓊音「序」（『鮮満風物記』大阪屋號書店、大九・一一）七頁。

(18) 大川によれば、両者の出遇いは大正二（一九一三）年中、東京帝大図書館の特別閲覧室にはじまる——「病みぬれば図書館恋し、マホメット研究者なる鼻高男「大川」も」（沼波詠）——という。大川「沼波先生を憶ふ」（前掲『噫 瓊音沼波武夫先生』）五四頁。同『安樂の門』（出雲書房、昭二六・一〇）..『近代日本思想体系一二／大川周明集』（筑摩書房、昭五〇・五）二五二頁。沼波と大川の思想的関係性については、土屋久「沼波瓊音のナショナリズム——ある忘れられたナショナリスト——」（『法学政治学論究』平九・九）が詳しい。

- (19) 満川亀太郎「沼波先生のことゞも」(前掲『噫瓊音沼波武夫先生』)五五、五六頁。同『三国干渉以後』(平凡社、昭一〇・九)二四七、三一四頁。同時期には、やはり満川らの主宰する左右合同の思想研究会「老社会」(大七・一〇発会)にも参加している。なお、猶存社および老社会について詳細は以下の文献中の記述を参照。木下半治『日本国家主義運動史』(慶應書房、昭一四・一〇)、宮本盛太郎『宗教的人間の政治思想 軌跡編——安部磯雄と鹿子木員信の場合——』(木鐸社、昭五九・三)、大塚健洋『大川周明と近代日本』(木鐸社、平二・九)、刈田徹『大川周明と國家改造運動』(人間の科学社、平一三・一一)、C・スピルマン『近代日本の革新論とアジア主義——北一輝、大川周明、満川亀太郎らの思想と行動——』(芦書房、平二七・三)等。
- (20) 満川前掲『三国干渉以後』二四八頁。橋川文三(一九二二一九八三)は、「それ以前の右翼団体」には「たんに左翼は國賊だ、社會主義は非國民だという感情的反発しかなく、「いわゆる日本ファシズム運動史をたどるには、この猶存社に結集した右翼人の思想と、その後の経歴をたて糸として追及するのがもつとも適切である」と論定している。橋川「日本ファシズムの推進力」(『シンポジウム日本歴史一一／ファシズムと戦争』学生社、昭四八・九)・『昭和ナショナリズムの諸相』(名古屋大学出版会、平六・六)一二四頁。同「昭和維新とファシシヨ的統合の思想」(J・ピタウ編『総合講座日本の社会文化史 6／近代国家の思想』講談社、昭四九・二)・前掲『昭和ナショナリズムの諸相』一四五頁。
- (21) 斎藤三郎『思想研究資料(特輯) 第五十三号秘／右翼思想犯罪事件の綜合的研究(血盟団事件より二・二六事件まで)』(司法省刑事局、昭一四・二)四二一頁。
- (22) 中谷武世『昭和動乱期の回想 中谷武世回顧録』(泰流社、平元・三)一〇三頁。
- (23) 国民新聞社政治部編『非常時日本に躍る人々』(日東書院、昭七・一一)二〇三頁。
- (24) 満川前掲「沼波先生のことゞも」五六、五七頁。安岡正篤先生年譜編纂委員会編『安岡正篤先生年譜』(財團法人郷学研修所他、平九・二)一一、二二三頁。
- (25) 宮本前掲『宗教的人間の政治思想 軌跡編』一三六、一三七頁、ルビ引用者。

(26) 沼波瓊音「二途」（『大疑の前』東亜堂書房、大二・七）三〇頁。

(27) 北一輝『國家改造案原理大綱』（大八、謄写版）・『北一輝著作集 第二卷』（みすゞ書房、昭三四・七）二五一、二五三頁。それはまた、つきつめれば「五十年ののちには天皇さえも日本語ではなくエスペラント語で話すことになつて」しまつても構わないという、文字通り「革命的」な発想であつた。イ・ヨンスク『「国語」という思想——近代日本の言語認識——』（岩波書店、平八・一二）三一三頁。

(28) 安田敏朗『帝国日本の言語編成』（世織書房、平九・一二）、同『「国語」の近代史——帝国日本と国語学者たち——』（中央公論新社、平一八・一二）等を参照。

(29) 青山なを「断片」（昭二・八）・『青山なを著作集 別巻／若き日のあゆみ』（慶應通信、昭五九・八）一九四頁。

(30) 青山なを「陥没」（昭二・三）・前掲『青山なを著作集 別巻／若き日のあゆみ』一七三、一七九頁。

(31) 北一輝『日本改造法案大綱』（西田税發行、大一五・二）・前掲『北一輝著作集 第二巻』三五六頁、ルビ引用者。

(32) 笠木良明「瓊音故沼波武夫先生のこと」（宇都宮仁編『北一輝著 造法案大綱』日本改造法案刊行会、昭四一・一）一四四頁。

(33) 大正一〇（一九二一）年初頭に発会し、沼波の主導で二年余り盛んに活動した後、自然消滅したとされる。月一回の学習会には、満川龜太郎、鹿子木員信、嶋野三郎ら猶存社の主要同人や、沼波と親しかった法政大学教授の安倍能成（一八八三・一九六六）、國士館高等部学長の長瀬鳳輔（一八六五・一九二六）などが講師として次々に来会したという。生越富興「無題」（前掲『噫 瓊音沼波武夫先生』）二六〇、二九一頁。青山なを「沼波先生のおもいで——国の会のことなど——」（昭三・二）・前掲『青山なを著作集 別巻／若き日のあゆみ』一九六・二〇二頁。

(34) 行地社「東西南北」（月刊『日本』大一四・四）四八頁。日の会については他にも以下の文献中の記述を参照。夜久前掲「太田耕造先生と興国同志会の人々」、中谷前掲『昭和動乱期の回想』、清水前掲「永井了吉「日の会」人脈と『帝大新聞』」等。

(35) 大川周明「五・一五事件訊問調書」（昭八・四・一七）・高橋正衛編『現代史資料』五／國家主義運動二』（みすず書房、昭三九・一）六八四頁。

(36) 青山前掲「沼波先生のおもいで」二〇〇、二〇一頁。

(37) 夏目漱石「三四郎」・『漱石全集 第五卷』（岩波書店、平六・四）二九二頁。

(38) 沼波瓊音「怖しくされど美しかりし日」（大一二・一一・一三）・『芭蕉の臨終』（増補改版、斯文書院、大一五・一二）三六四、三六五頁。

(39) 橋川文三『昭和維新試論』（朝日新聞社、昭五九・六）二一四、二二六頁。

(40) 沼波武夫「大一三・六・一付／石郵貞吉宛書簡」・前掲『噫瓊音沼波武夫先生』「序」二頁。

(41) 本多辰次郎「沼波武夫君を憶ふ」（前掲『噫瓊音沼波武夫先生』）七一、七三頁。同時期、沼波は、猶存社以来の同志・安岡正篤を宮中に入れ杉浦重剛（一八五五一九二四）の後釜として皇太子の御進講係に就かせようと考へ、北一輝や大川周明らと協力して種々宮内省関係者に運動したとされる。原田政治『原田政治論策・饒舌余瀝』（私家版、昭五八・六）一一頁。塩田潮『昭和の教祖安岡正篤』（文藝春秋、平三・七）一二一、一二二頁。

(42) 安倍能成「沼波さんの思い出」（前掲『噫瓊音沼波武夫先生』）一五九頁。

(43) 竹友藻風「沼波瓊音氏を偲ぶ」（前掲『噫瓊音沼波武夫先生』）一七一頁。

(44) 沼波瓊音「咄、現時の学風」（『大正公論』大一四・九）七一、七二頁。

(45) 伊藤正雄「大学講師としての先生」（前掲『噫瓊音沼波武夫先生』）「大學講師としての先生」一二二頁。

(46) 伊藤前掲「大学講師としての先生」二一四、二一六、二一八頁。

(47) 五十嵐前掲「あゝ沼波君」八九頁。

(48) 藤村前掲「あゝ沼波君」二二三頁。

(49) 東京帝国大学『文学部学生便覧 自大正十四年四月至大正十五年三月』（大一四・三）五六頁。なお他にも沼波は、同月から東京女子大学の国文学専修の学生に対して「国文学と日本国民の精神」と題する特殊講義を開始している。安井哲「沼

波先生の追憶」（前掲『噫 瓊音沼波武夫先生』）一四四頁。東京女子大学五十年史編纂委員会編『東京女子大学五十年史』（同大学、昭四三・四）八三頁。

(50) のち述録として『現代と思索』（京文社出版、大一五・九）に所収。

(51) 沼波瓊音「遺稿／講義ノート 国に就て」（『国語と国文学 十月特別号／日本精神研究』昭二・一〇）一五、一六、一八頁。

(52) E・H・カー『危機の二十年 (The Twenty Years' Crisis 1919-1939, 1939)』

（井上茂訳、岩波書店、平八・一）四〇八頁。

(53) J・F・ノイロール『第三帝国の神話 (Der Mythos vom dritten Reich, 1957)』

（山崎章甫他訳、未来社、昭三八・一〇）、山口定『ファシズム』（有斐閣、昭五四・一）、G・L・モッセ『フュルキシシュ革命——ドイツ民族主義から反ユダヤ主義』——(The Crisis of German Ideology: Intellectual Origins of the Third Reich, 1981)』（植村和秀他訳、柏書房、平一〇・一〇）、E・トラヴェルソ『全體主義 (Il totalitarismo, 2002)』（柱本元彦訳、平凡社、平二一・五）等を参照。

(54) 伊藤正雄「私の三四郎時代」（『近世日本文学管見』伊藤正雄先生論文出版会、昭三八・一一）：『新版 忘れ得ぬ国文学者たち——并、憶い出の明治大正——』（右文書院、平一三・六）一一頁。因みに、堀辰雄（一九〇四—一九五三）は大正一四（一九二五）年四月に東京帝国大学文学部国文学科に入学したので該講義のこととは知っていたはずであるが、聽講した形跡はない。のち昭和一〇年代には古典文学を介して「日本的なるもの」の世界にのめり込んでいくとはいえ、震災で母を喪い、芥川龍之介（一八九一—一九二七）やコクター（Jean Cocteau, 1889-1963）に傾倒していた当時にあつては、沼波の説く男性的でアナ

ティックな「日本精神」論などはながら関心の埒外であつたろう。堀と学科同期入学の船橋聖一（一九〇四—一九七六）は「国文学では、藤村作氏の講読する『心中宵庚申』や『女殺し油地獄』のテキストを、二人で一緒に見た。上田萬年氏の国語学概論の試験のとき、堀は試験場の入口まで並んで来たが、急に、「僕はよす」と云つて、引つ返してしまつたりした。そういうところは、気の弱い学生だつた」と回想している。舟橋「堀辰雄思い出抄」（『臨時増刊 文芸』昭三二・一一）九三

頁。杉野要吉「昭和十年代の堀辰雄——『日本的なもの』への展開・第二次大和行まで——」（『文学・語学』昭四〇・六）七四頁。

(55) 藤村前掲「あゝ沼波君」八九、九〇頁。同年六月には東京女子大学の講師も辞任し、以後勤務校は第一高等学校のみとなる。

(56) 藤村前掲「あゝ沼波君」八九頁。因みに、国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/>) にて「日本精神」で検索をかけた（平二九・一・一〇現在）ところ、明治三三（一九〇〇）年から昭和四（一九二九）年にかけての総ヒット数三三件に対し、昭和五（一九三〇）年から昭和一四（一九三九）年は五三九件、昭和一五（一九四〇）年から昭和二四（一九四九）年は二五三件という結果が出た。このなかで、「日本精神」という言葉が思想的な文脈で用いられたのは、椎名固底『大和魂』（刀波社、明四四・一〇）一頁が最初である。

(57) 第七十回帝国議会における政府答弁（林銑十郎内閣、昭一二・三・二三）を受け、東京帝国大学文学部に国体明徴と日本精神の講究を目的とする「日本思想史講座」が国史学者の平泉澄（一八九五—一九八四）を初代担任教授として正式に開設されたのは、昭和一三（一九三八）年度のことである。竹内前掲『丸山眞男の時代』九二、九三頁。

(58) 他にも沼波は月刊『日本』に、詩篇「大空に日在り」（大一四・一一）や評伝「烈女畠山勇子」（大一五・七）を発表している。

(59) 大川前掲「五・一五事件訊問調書」六九〇頁。行地社については注（19）に示した猶存社・老社会に関するものと同文献中の記述を参照。

(60) 行地社「東西南北」（月刊『日本』大一四・五）四六、四七頁。

(61) 沼波瓊音『始めて確信し得たる全実在』（東亜堂書房、大二・七）一五七頁。

(62) 沼波瓊音「求むる声」（『現代』大一五・一）四四九・四五一页、ルビ引用者。

(63) 斎藤前掲『思想研究資料（特輯）』第五十三号秘／右翼思想犯罪事件の綜合的研究』五〇頁。

(64) 田中惣五郎『北一輝 増補版』(三一書房、昭四六・一)二五七、二五八頁。中谷前掲『昭和動乱期の回想』一七二、一七五頁。松本健一『大川周明』(岩波書店、平一六・一〇)二八一、二九三頁。

(65) 田中前掲『北一輝 増補版』二五九、二六〇頁。大塚前掲『大川周明と近代日本』一六六、一六七頁。中谷前掲『昭和動乱期の回想』一七五、一七七頁。

(66) 東京行地社脱退同人「我々は何故に行地社を脱退したか」(『鴻雁録』大一五・一一)。拓殖大学日本文化研究所附属近現代研究センター編『拓殖大学百年史研究 第一号』(拓殖大学創立百年史編纂室、平一四・一二)一五〇、一五二頁。

(67) 沼波瓊音「筑波おろし」(『鴻雁録』大一五・一一)。前掲『拓殖大学百年史研究 第一号』一五三頁。

(68) 石川龍星『日本愛国運動総覽』(東京書房、昭七・八)一〇五、一〇六頁。

(69) 沼波前掲「筑波おろし」一五二頁。

(70) 大正一三(一九二四)年三月二六日、沼波は、満川亀太郎、大川周明、安岡正篤らと連れ立つて警視総監在任中の赤池や特高課長の小林光政(一八九二一九六二)など主だった内務・警察官僚と会談している。C・スピルマン他編『満川亀太郎日記――大正八年(昭和十一年)』(論創社、平二三・一)四三頁。

(71) 沼波瓊音「証人訊問調書」(昭二・一・一一)。『北一輝著作集 第三卷』(みすず書房、昭四七・四)三四二頁。

(72) 沼波万里子『五十銭銀貨』(私家版、昭六三・九)六頁。

(73) 沼波瓊音「聴取書」(大一五・九・二)。前掲『北一輝著作集 第三卷』二四六頁。

(74) 沼波前掲「聴取書」二四八頁。

(75) 瑞穂会については以下の文献中の記述を参照。「瑞穂会記事」(第一高等学校寄宿寮編・発行『向陵誌』昭五・九)、中井淳集編集委員会編『中井淳集』(刀江書院、昭三四・四)、打越孝明「瑞穂会の結成および初期の活動に関する一考察――沼波瓊音、黒上正一郎、そして大倉邦彦――」(『大倉山論集』平一五・三)、占部賢志「旧制一高に『國士』ありき――沼波瓊音と『瑞穂会創立前史』――」(『祖國と青年』平一六・五)等。

(76) 沼波瓊音「瑞穂会趣意書」（前掲『噫 瓊音沼波武夫先生』）巻末二頁。

(77) 同右。

(78) 同右。

(79) 前掲『中井淳集』二五一、二五二頁。

(80) この『朝風』は後期沼波瓊音の思想の全貌を把握する上で必須の情報資料であるが、残念ながら沼波生存中に刊行された号の所在は、公益社団法人国民文化研究会所蔵の第二三号（大二・一）、第二六号（大二・四）等を除き、現時点まで公共蔵書に確認されていない。打越前掲「瑞穂会の結成および初期の活動に関する一考察」二〇三、二〇四頁。

(81) その一環として、沼波は『護法之神 児島惟謙』（修文館、大一五・五）、『大津事件の烈女 畠山勇子』（斯文書院、大一五・一一）等の伝記を刊行している。

(82) 外務省記録『自大正十四年七月廿五日至十五年八月五日／民族問題関係雑件 亜細亜民族問題 第一巻』（国立公文書館アジア歴史資料センター

[<http://www.jacar.go.jp/>] B04013200400~B04013200700 を参照。

(83) 麓保孝「沼波先生と瑞穂会との一斑」（前掲『噫 瓊音沼波武夫先生』）三

〇八、三〇九頁。こうした所見は、第三者を介して、文部大臣（第一次若槻礼次郎内閣）の岡田良平（一八六四—一九三四）など時の文教関係者に具陳されたという。

藤井虎雄「先生に報ずる唯一の道」（前掲『噫 瓊音沼波武夫先生』）三一三頁。

(84) 麓前掲「沼波先生と瑞穂会との一斑」三〇六頁。

(85) 後に北一輝が、危篤状態に陥った沼波の枕頭に駆け付け、その最期を看取り、遺族に何くれとなく親身に手を差し伸べたのは、概事件で沼波を消耗させた（死期を早めさせた）ことへの慰藉の念ゆえともとれる。沼波前掲『五十銭銀貨』を参照。

(86) 麓前掲「沼波先生と瑞穂会との一斑」三〇七、三〇八頁。なおこの信書は、贈呈書物である菊池容斎（一七八八—一八七八）の『前賢故実』とともに、当時著名なイタリア通でムッソリーニとも面識のある下井春吉（一八八三—一九五四）に託されたという。下位については、藤岡寛己「下位春吉とイタリア＝ファシズム——ダンヌンツィオ、ムッソリーニ、日本——」（『福岡国際大学紀要』平一一三・三一）、

Hofmann, Reto. *The Fascist Effect : Japan and Italy, 1915-1952*, Cornell University Press, 2015. 等を参照。

(87) 陸軍部内の実力者で後に皇道派の領袖となり一一・一一大事件に連座・失脚する真崎甚三郎（一八七六—一九五六）の長男秀樹（一九〇八—一〇〇一）も瑞穂会には創立時から加わっており、その関係で、会員たちは第一師団長等の要職にあつた真崎の官舎の一室を借りて『古事記』の輪読会を定期的に開催した。他にも中井淳、澤登哲一らは、会の活動を通じて、石原莞爾（一八八九—一九四九）、村中孝次（一九〇三—一九三七）、磯部浅一（一九〇五—一九三七）など革新系の将校たちと親交を結んだという。澤登「思い浮かぶ」と（前掲『中井淳集』）一〇一～一〇六頁。

(88) 「第一高等学校昭信会記事」（前掲『向陵誌』）、小田村寅二郎『昭和史に刻むわれらが道統』（日本教文社、昭五三・六）、打越孝明「黒上正一郎と三井甲之」（『大倉山論集』平成一九・三）、井上義和『日本主義と東京大学——昭和期学生思想運動の系譜——』（柏書房、平一〇・七）等を参照。

(89) 和辻哲郎『岩波講座東洋思潮 東洋思想の諸問題／日本精神』（岩波書店、昭九・九）三一、一七、二一頁。

(90) 横光利一『紋章』（改造社、昭九・九）：『現代日本文学館 一二三／横光利一』（文藝春秋、昭四三・一一）一四一、一四三頁。平野謙『昭和文学史』（筑摩書房、昭三八・一一）一六二～一七二頁。福田清人・荒井惇見『横光利一』（清水書院、昭四二・一）一七三、一七四頁。河田和子『戦時下の文学と〈日本の的なもの〉——横光利一と保田興重郎——』（九州大学博士論文、平二〇・一一）三八、三九頁。

(91) 藤村前掲「あゝ沼波君」八七～八九頁。

(92) 藤村作「英語科廃止の急務」（『現代』昭一・五）七、一一〇頁。

(93) 市河三喜「英語科問題に就て」（『英語青年』昭三・一）三頁。

## 第二章 三井甲之の学問と思想

### 第一節 反漱石とヴァント心理学の受容

#### 一 はじめに

本章では、歌人・評論家の三井甲之（本名甲之助、一八八三—一九五三）について論じる。彼の学問と思想<sup>(1)</sup>を、夏目漱石（本名金之助、一八六七—一九一六）への反発、ヴァント（Wilhelm Wundt, 1832-1920）の心理学の受容、親鸞（善信、一一七三—一二六三）—浄土真宗の受容という三つの論点から検討し、それらの営みを経て最終的に形成された「しきしまのみち（いとのはのみち）」なる体系の特質を考察する。

東京帝国大学の国文出身の「変り種」<sup>(2)</sup>といわれた三井もまた、六期先輩に当たる沼波瓊音（本名武夫、一八七七—一九二七）と同様、芳賀矢一（一八六七—一九二七）の学問性を結果としてより先鋭的なかたちで継承するに至った政治的文学者である。日本の古典研究のみならずさまざまな要素から構成されるその特徴的な学びは、芳賀の示した、

一言でいへば国学は、国体を知らせる学問といふことに帰するのであります。「……」一つは科学的研究法をやらなければならぬとおもひます。一体これまでの国学者のやつた事は偏狭に流れて居つたので、支那から何がはいつて来て居ても、印度から何がはいつて来て居ても、それらは頭から排斥してしまつて、日本の古い所を主としてやつて居つたか

ら、たとへ古今集の歌に支那の思想がはいつて居て、それを知つて居ても、註釈には書いて置かぬといふやうな風がありました。〔…〕如何なる文明でも、決して単独に発達した文明はありません。〔…〕単純な国学ばかりでなく、多くの補助学科の力によらなければなりません。また研究の範囲も、一時代に偏せず、歴史的に各時代に涉つて、残らず研究するやうにしなければなりません。(3)

という新たな国学の方法論を、彼なりに忠実に実践したものと考えられる。

その三井甲之は(4)、明治一六（一八八三）年一〇月一六日、山梨県中巨摩郡松島村の富裕な資産家の長男として出生した。生來非常に感受性が強く、幼少年期から詩歌や小説にのめり込んで「弟から日夜に気違ひ気違ひと悪口されて、實際氣違ひになりかゝ」つたり、空想に惑溺した結果「直接の刺激に堪へなく」なつたりもした(5)といふ。それでも学業はおむね順調で、松島小学校・同高等小学校、甲府中学校、京華中学校（四年編入）、第一高等学校文科（明三四・九～明三七・七）を経て、東京帝国大学文科大学文学科に入学（明三七・九）し、国語学国文学第二講座担任教授の芳賀矢一、言語学講座担任教授の上田萬年（一八六七～一九三七）それに文科大学名誉教師のチエンバレン（Basil Hall Chamberlain, 1850-1935）らに親しく指導を受ける(6)。明治四〇（一九〇七）年七月に卒業して以降は、一時期京華中の教員（明四四・四～大四・四頃）や郷里の村委会議員（昭二・四～昭四・四頃）、同村長（昭一四・九～昭一八・九）などを持つとめた以外はもっぱら野に在つて著述に没頭した。

文學者としての三井の學問・思想形成を問題にする上で、何より注目すべき点は、彼が東京帝國大學文科大學に入學した明治三七（一九〇四）年度から開始された新制度である。第三代學長（明三七・三・明四五・三）の坪井九馬三（一八五九—一九三六）のもとで、從來の九學科は、哲學、史學、文學の三學科に統合・再編され、國文學科は文學科内の一專攻（専修學科）となり、大正八（一九一九）年四月からの學部制以降に伴う再度の改編まで制度上は一旦消滅する。それまで各學科ごとに定められていた履修規定はゆるめられ、學生は個々の學的関心に沿つて比較的自由に単位を取得し、卒業までに十分な時間をかけて專攻（専修學科）を決定出来るようになつた<sup>(7)</sup>。外國語の比重も高まり、在學中に二ヶ國語の語學試験に合格しておくことが卒業要件の一つとされた<sup>(8)</sup>。「語學能力を就職の際の付加価値と捉え、実用的な語學教育を重視し」<sup>(9)</sup>た坪井本来の思惑はどうあれ、少なくとも形式的には高等學校のカリキュラムの延長、教養主義的<sup>リベラル・アーツ</sup>的な學修環境設定が整えられた<sup>(10)</sup>のである。それ故か、同じ東京帝大國文の出身でも、一世代前の「國文學科」という枠組のなかで学んだ沼波瓊音が時としてのぞかせた「多種多様なる外國文化」<sup>(11)</sup>の知見不足に対するあせり——「歐洲大亂につきつくゞと思ひ候は、日本文壇の精神的独立の機の至りつゝあることに候。〔…〕この際日本の藝術の發展を熱望する『日本を知つてゐる人』と、西欧藝術をウンと知り抜いた人と提携すること急務」<sup>(12)</sup>——は、三井にはほとんどみられない。

新制度のもとで、三井は、本来の志望であつた國文學と並行して哲學や宗教學、心理學など他の専門諸學や外國文學に關する講義を幅廣く聽講する。西欧（ロンドン）留学より帰朝（明三六・一）した嘱託講師の夏目漱

石の鳴り物入りの英文学の授業にも一度は出向いたことであろう。

わけても、嘱託講師の松本亦太郎（一八六五—一九四三）の講義を通じて吸収したヴァント心理学の影響は甚大であった<sup>(13)</sup>。ドイツのヴァントによって確立された個人心理学（実験心理学）——当時の学界では西欧最先端の「精神科学（Geisteswissenschaften）」というふれこみであつた<sup>(14)</sup>——の学知は、三井の国文学研究とその後の思想展開においてたびたび援用され、一々の論に科学的な「客觀性」「普遍性」という名分を与える拠りどころとなっていく。明治四〇（一九〇七）年四月に提出された彼の卒業論文『万葉集論』の「序論」には、そのことが端的に示されている。

故ニ心理学ノ確実ナル基礎ニ立ツヲツトメ他ノ造形美術ノ研究及外國詩人ノ作及作詩上ノ告白等ヲモ参考セムトツトメタリ。「……」故ニ批評家ハ少クモ作家タリ得ル素質ヲ有セザル可ラズ。故ニ確実ナル心理学的解明ト自己所信ノ創作的叙述トヲトモナハシメザル可ラズ。「……」シカシテ研究者ノ経験ハ現代文学界ノ現象ト根本的ニ關係スルヲ以テ、万葉集ノ研究ト雖モ現代日本文学界ノ情況ヲ顧ミザル可ラズ。<sup>(15)</sup>

他にも三井は、進んでは学外で、正岡子規（本名常規、一八六七—一九〇二）没後の根岸短歌会に加盟し伊藤左千夫（一八六四—一九一三）らと子規の歌学について議論をたたかわせたり、真宗大谷派（東本願寺）の学僧・近角常觀（一八七〇—一九四一）の主宰する求道学舎に入りし淨

土真宗の宗祖・親鸞の教えを真剣に聴聞するなどして、漸次「自分に一番適切な血や肉を多量に持つてゐるもの」<sup>(16)</sup>を攝取していくのである。

## 二 文学的出発

明治四一（一九〇八）年二月、前月を以て終刊となつた根岸短歌会の機関誌『馬酔木』の後継誌として月刊『アカネ』が創刊される。同人間の意見対立など糺余曲折を経て伊藤左千夫より編集責任者を一任<sup>(17)</sup>された三井甲之は、早速創刊号の「消息」欄に、

正岡子規先生の和歌革新は俳句研究の結果得たる文学觀より出立致し候ものに有之且同氏の重病は進んで文学一般の研究及創作に従事するを許さざりし事情も有之吾人は新たなる用意と決心とを以て我國文学の中心たる和歌の研究を中心とし進んで長詩小説戯曲に向つて確実なる歩武を進め度候。

と述べ、みずから「三千年の国文学史を有する日本国民たる十分の自覚」を以て、早世した子規の文学事業全体の後継者・革新者たらんことを高らかに表明する<sup>(18)</sup>。そうして彼は、大須賀乙字（本名績、いきお、一八八一—一九二〇）、増田八風（本名甚治郎、一八八〇—一九五七）、広瀬青波（本名哲士、一八八三—一九五二）など自身に同調する一部の同人たちとはかつて『アカネ』の誌面を「殆ど根岸短歌会の歴史など無視」<sup>(19)</sup>するかのように総合誌化し、短歌のみならず長歌、俳句、詩、隨筆、文芸評論、

小説等で埋め尽くしていった。なかでも文芸評論には力を入れ、毎号多くの頁を割いている。以下の文章には当時の三井の文芸観が端的に現れている。

世俗の趣味は常に崇高より離れて挑発的に傾いて居る。崇高の反対に、無氣力、部分的、人工的、斑色的、にして極めて小規模の趣味に墮落して居る。今日社会一般の風俗が皆此方向を取つて居る。〔：：〕現代の趣味の墮落は不確実な力の弱い点にあるので此淫靡なる趣味は又文壇にも現はれて居る。一つは冗漫なる空想文学、一つは野卑なる肉感描写文学である。(20)

国家的恥辱とされた露独仏三国干涉（明二八・四・二三）から臥薪嘗胆の戦間期を経て対露宣戦布告（明三七・二・八）へという明治ナショナリズムの最高揚期に自我を形成した文学青年・三井は、日露戦後の日本社会・国民意識の動向を一種の弛緩状態と否定的にとらえていた。

明治三十七八年戦役後の動搖は文壇にも及び候。一時成功と申すこと大流行を來し、可成早く名と利とを得むとする如き傾向文壇にも及び申候。ざれど斯の如きは文学に取つては最も不健全なる傾向と存候。(21)

このような認識は、もとより徳富蘇峰（本名猪一郎、一八六三—一九五七）を筆頭とする同時代の硬派知識人のそれ(22)に通じるものであるが、三井

の場合は、当時甲州（山梨県）人一般に通有するとされた保守的な気質と生來の病的なまでに鋭い感受性に加えて、帝大在学中に培われた国文学徒としての使命感——「三千年の国文学史」（<sup>23</sup>）の伝統は目下加速度的に墮落の途を進みつつあり何とかこれを食い止めなければならぬ——に由来するものであつた点に注目したい。

発刊以来、三井は毎号『アカネ』に「墮落文芸」の兆候を見出した文士を俎上に載せ、「文学の論ずべき点は決して外觀の如何では無くて、内心の感情の如何にあるかである」（<sup>24</sup>）との持論のもと辛辣な批評を遠慮会釈なく加えていった。主に標的としたのは、三井の独善的なふるまいに辟易して早期に『アカネ』を離脱し別に『阿羅々木』を創刊（明四一・一〇）した伊藤左千夫、長塚節（一八七九—一九一五）、斎藤茂吉（一八八二—一九五三）、島木赤彦（本名久保田俊彦、一八七六—一九二六）らアララギ派（<sup>25</sup>）、夏目漱石、高浜虚子（本名清、一八七四—一九五九）らいわゆる余裕派、与謝野鉄幹（本名寛、一八七三—一九三五）、晶子（本名志よう、一八七八—一九四二）ら明星派等であり、なかでも、漱石と茂吉に關する言及は群を抜いて多い。

作歌上の細かい語法から互いの人間性にいたるまで多岐にわたつて非難の応酬を繰り広げた茂吉とのやり取りが、根岸歌壇の正統・嫡流をめぐる内輪もめ（近親憎惡）の色合いを多分に帶びていた（<sup>26</sup>）のに対し、漱石への物言いは、ひたすら相手を一方的かつ徹底的に批判し抜くという神学的な「折伏」の趣があつた。

当時はまだ希少価値のあつた帝大卒の文学士としての矜持から来る嫉妬はともかく、三井はなぜそこまで、漱石に執着したのか。大正期に入つ

て、彼は次のように回想している。

漱石の作が流行し始めて全盛になつた頃、僕はゲー<sup>●</sup>テを愛読して漱石の作は重んじなかつた。ゲー<sup>●</sup>テは理知的啓蒙時代の一切を均一化して言語も道徳も宗教も国家も理性的粉本によつて構成しようとした空虚な論理的組立に対しても真実の個人々格の価値を主張し、それは深く歴史的意義にまで到達して、古い自然法から割出した孤立的個人々格が皆誰も彼も平等のものとして共同的に生活し、此に国を建て法律を制定するといふやうな理論的の迷ひを打破した。その内的経験の抒情詩的弾力を僕は感じて居つたのだ。〔…〕夏目漱石等はこれと反対に戦勝の夢を博覧会に実現し、凱旋門に具体化し、成金思想に変体せしめ、軽薄なる俗謡の流行とならしめ、外的に風船玉のやうに膨張したときに、此の国民の浮いた気分に投じて思はぬ喝采を博したのが漱石の『吾輩は猫である』である。〔…〕子規から得た写生文的技巧と、超越的俳味と、英文学の知識と、また外国文学の知識あるものにはともなはぬを普通とする漢文学の素養と、も一つ最も外的に効果があつたのは彼の文科大学講師といふ看板であつた。(27)

かの詩人・ゲー<sup>●</sup>テ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) が理知のはたらきを絶対視する啓蒙主義とその現実的所産たるフランス革命がもたらした外界の変化を拒絶し、人間精神の高揚と眞の充足を、おのが混沌たる内的世界に希求したことはよく知られている(28)。三井は、そのようなゲー<sup>●</sup>テを、洋の東西は違えど本物の文学者として惜しみなく称揚した。そ

して、対照的に漱石を膨張する「風船玉」のように内側は空虚なまま外側は華やかに近代化・文明化を成し遂げた——その一つの達成点としての日露戦勝——現下日本の「悪風潮」<sup>(29)</sup>を体現する象徴的存在として見出したのであつた。

もとより、漱石文学は、その底流に西欧（ロンドン）留学の体験を通して身に付けた近代性・文明性への本質的懷疑があり、時代社会に対する問題意識の深さと分析の鋭さにおいて他の追随を許さぬものがあつたことは今日周知の事実である。だが、文学革新にはやる当時の三井にはそこまで丁寧に作品をよみ解いていく余裕はなく、あくまで彼は最初の直観に「固着」して<sup>(30)</sup>、内にイメージした「漱石」を敵視し続けたのである。

### 三 反漱石とヴァントの個人心理学（実験心理学）

三井甲之が一時期執拗に繰り返した反漱石の言説<sup>(31)</sup>、それらの要点をまとめると、大体以下のようになる。すなわち、漱石の書くものは、いずれも「眞の文学」にはほど遠い、「全体」として「統一」された「人生觀」（信念、信仰、理想）を欠いた「空想文学」であり、人間・社会の「皮相」な「一部分」を芸術的に切り取つてみせただけの「高等講談」に過ぎない。その内容は、自然主義派と同じく、人間の「区々たる感情」を刺激するにとどまり、真面目な読者をして宗教的な「忘我の大歡喜」に導くものではない。その文章には、「不自然」な「技巧」と「粉飾」が目立ち、しかも「冗漫」で「衒学的」かつ「説明的」であり、小説中の登場人物は、どれもみな「現実の生きた人」の感じを与えない「操人形」同様のつくり

である、と。

こうした三井の分析批評が当時としてはそれなりに的を得ていたことは、左千夫門下の土屋文明（一八九〇—一九九〇）が「なかなか鋭いところ」があり「何かよいところを含んでをるといふべき」と認めている<sup>(32)</sup>ことからも伺える。特に「説明的」という評は、正宗白鳥（本名忠夫、一八七九—一九六二）、田山花袋（本名録弥、一八七二—一九三〇）といった自然主義系の文士たちから多く発せられており<sup>(33)</sup>、漱石もそれらを意識してか「活きて居る」としか思へぬ人間や、自然としか思へぬ脚色を捨へる方を苦心したら、「どうだらう」と述べるなど、職業小説家として作り物にみえない「自然」な作品世界の創造に常に心を碎いていた形跡<sup>(34)</sup>がいたるところに見受けられる。

三井は、時には「野卑なる肉感描写文学」<sup>(35)</sup>と嫌悪する自然主義に歩み寄つてでも「空想」の漱石文学をたたき、文学における「真」の重要性を訴えようとした。

漱石の「三四郎」の人生は操人形のやうだ、之に比すると白鳥の「明日」などは遙かに優れて居る。つまり強い感じを与へる。強いといふのは真であるといふ意味である。<sup>(36)</sup>

「真」すなわち「あるがまま」への志向、それは三井において、子規の有名な「写生」論<sup>(37)</sup>や次節で検討する親鸞の「じねんほうに自然法爾」の教説——「自然といふは、自はをのづからといふ、行者はからひにあらず、然といふはしからしむといふことばなり」<sup>(38)</sup>——にインスピアイアされ、最終的にヴ

ントの個人心理学（実験心理学）に拠つて確立されたものであった。

大学時代の三井にヴァント心理学を講じた松本亦太郎は、欧米に留学しドイツのライプツィヒ大学でヴァントにじかに学んだ経験を持ち、東京・京都両帝大の文科大学に心理学実験室を創設するなど、元良勇次郎（一八五八年一二）と並んで日本における心理学研究の草分け的存在であった。今日一般的に、ヴァントの学問的功績は、心理学を、哲学の一部門という位置付けから独立させ、従来の人間疎外の科学（自然科学）とは別個の人間中心の科学（精神科学）として体系化した点にあるとされている（<sup>39</sup>）。「抽象的な数学的自然」の「法則性」では必ずしもとらえ得ない人間の「精神的な生の諸内容」とその「思考の無限の形式」を究明する精神科学との遭遇は、当時の三井をして実に「動乱したわが心を明かにてらして興奮せしめたもの」（<sup>40</sup>）であつたという。ヴァントの心理学は、個人の意識を研究対象とする個人心理学（実験心理学）と、自然発生的人間集団（民族）の總體意識を研究対象とする民族心理学に大別されるが、先に三井が味得したのは前者であった。

ヴァントの個人心理学（実験心理学）の理論は、一般的に「要素主義」とも「構成主義」とも称され、個人の複雑な意識を自己観察（内観）実験を用いて「純粹感覺、簡単感情」とそれ以外の心的要素とに細かく分解し、「何等の反省や二次的なる概念区分によつて変化されて居な」い「直接経験」をみきわめ、かかる後、それらを結び付けることによつて、意識本来の在りようを総合的に把握しようとするものであった（<sup>41</sup>）。三井の説明をきこう。

ヴァントは歐洲の哲学を形而上学、弁証法、訓詁学のやうな認識論、偏執から解放したのである。彼の心理学は直接経験の学である。即ち人間経験があるがままにそのまま全体として生命があり統一あり調和あるものとして活きたものとして取扱ふものである。(42)

ヴァントは、実験を通じて、意識がある一つの心的表象を他に比較して著しく明瞭に知覚する、そのはたらきをカント (Immanuel Kant, 1724-1804) の認識論の用語を借りて「統覚 (Apperception)」と名付けた。そして三井は、散文・韻文を問わずあらゆる芸術の理想はその「統覚」の中身を端的に表現する」と——「緊張せる統一せる心的情態の表現」(43)——以外にく、「真」の小説とは、人間の「無常なる精神現象」の「変化開展」の「真相」をあるがままに力強く記述した「直接経験」の語りでなければならぬとしたのである。

『アカネ』に分載 (明四一・六・七) された中編小説「行く春」は、三井が右のような自身の文学理念を実践に移すべく、ゲーテの『若きウェルトルの悩み (Die Leiden des jungen Werthers, 1774)』を範として取り組んだ実験的小説である。もとより三井の念頭には、敵視する漱石や左千夫に対し「宗匠的態度」(44)を以て、本物の小説とはこのように書くのだという見本を提示してみせんとする気概もあつたことだろう。執筆に先立ち、三井は、文学の素材として男女の恋愛にこだわる理由を次のように述べている。

先づ文学は生き居る人間の製作候ものなることを考へねばならず候。

生き居るといふ自覚は恋愛に於て最も強く感ぜらるべく候。此時に当つては心は一つの目的に向つて集注せられ何等の雜念なく利害快樂を顧慮する疑惑的態度無くなり可申此時には肉欲等の如き利己的の考の無くなり又は淨化せらるゝものと存候。(45)

「行く春」の主人公は、作者の分身ともいうべき、東京帝國大学文科大学の学生・清木である。常日頃より「自然の衝動のまゝに願はくは一分時なりと息を吐きたい」と念ずる彼は、ドイツ語を習いに通う会話学校で教師の手伝いをしているしづ子と知り合い、閑達な少女に「天然のまゝ」の美を見出し、「僕に芸術に対する信仰を与ふる」と一人で恋情を募らせていく(46)。しかし、しづ子は、分相応の結婚を勧める家人に従い、活版所の画工と婚約する。清木は女の自分に対する本心からの愛に日ごと確信を深め、「現実の無常なる境遇運命を破るの力は即愛の力である」(47)と精神を高揚させていくが、現実の逆襲を恐れて、じつさいには何の行動も起こそうとはしない。ただいたずらに、

自己の周囲のあらゆる人を顧みると利己的な肉欲的行動を解脱して居るものは殆んど無い。「……」思ふさへ腹立たしい。自己の心を他人の心と融合せしむるのを知らぬ、人を愛することを知らず、愛せらるゝことも知らず、小さい弱い自我の感情を過重して自然の大勢力を知らずに居る。世の一切に向つては無頓着の態度をとる外は無い。身に近いものを考ぶれば彼等から受くるは報いられざる愛の苦のみである。(48)

と自問自答を繰り返すばかりである。物語は、しづ子に別れを告げた清木が、これから先は「自然の引力のまゝ」にしたがい、「唯一人の恋人」への「追慕の一念」に依つて「目に見る万象の裏に漲る不可測の威力に同化すべき内心の活動に赴かむ」（<sup>49</sup>）と、みずからを納得させ、悄然と旅に出るところで終わる。

清木は、一応近代小説の主人公然とした、恋愛における内発的衝動を自己再生の契機としそこから現実（世間）を突き抜けんと志向する人物である。ところが三井は、肝心なところで彼に主体性を放棄させ、「婆婆即寂光土」とばかりに不如意な人生そのものに沈潜させてしまう。それは、漱石が翌年に発表した「それから」（『東京／大阪朝日新聞』明四二・六）（一〇連載）において、「自然の児にならうか、又意志の人にならうか」（十四の一）との葛藤の末に「自己の運命の半分を破壊」（十四の五）してでも結婚という社会制度の埒外に生きること（姦通）を選び行動に移した主人公・代助をして、最後に「自分の頭が焼け尽きる迄電車に乗つて行かうと決心」させ「真赤」に「焰の息を吹いて回転」する「世の中」（十七の三）と真正面から向き合わせた（<sup>50</sup>）のと全く対蹠的である。

「内心の切実なる実験」（<sup>51</sup>）を通じて明瞭に知覚された「実世間生活の悲哀」（<sup>52</sup>）を「抒情詩的弾力」（<sup>53</sup>）あふれるゲーテの文体を模して描き出そうとした「行く春」だったが、作者の「直接経験」だけに表現の対象を求めたのは、詩歌としてならまだしも、小説としてはやはり無理があつたようだ。以下の寸評は、そのことを的確に指摘している。

三井甲之の『行く春』は完結した。此作者は、客觀を客觀として描かず

に、すべてを一度び主觀化して語つてゐるやうである。それが為めに、論文となり、時に抒情文となる。新機軸を出さんとする努力は努力として、此の点だけは先づ三省を欲する。(54)

心理学の理論をそのまま文学の方法論に持ち込むという、当時としては先駆的(55)な試みも文壇の注目を集めには至らず、漱石や佐千夫からは黙殺され、茂吉からは作者自身の恋愛心理を「惚れ方が足らぬなり。」(56)といはゆる『ネンネコ恋愛』なるなりと揶揄され、土屋文明からは「中学生の作文、少くとも高等学校生徒の校友会雑誌向きの域を出ない」と後々まで酷評されるなど、散々な失敗に終わった。

だが、三井自身の形成過程においてみれば、この小説は全く無意義であつたわけではない。作中に示された主人公の一見してスタティックな行動様式は、ある種の雛形として温存され、後々「現実を人為的に変改せむとせぬのである、理想境、または現世と正反対の世界と生活とを現ぜしめむとするのではない、現実のまゝに随順し、歡喜と悲哀と、希望と絶望と、恩愛と憎悪とそれらに没入しつゝそれらを内に調和せしめ綜合せしめむとする信心によつて、ここに不可思議の境に無極の生を創造せむとするのである」(57)と思想的に重要な意味を帶びて言説化されて来るからである。

#### 四 ヴァントの民族心理学と「民族的生活」へのめざめ

明治四三(一九一〇)年五月二十五日、明治天皇(睦仁、一八五二—一九二)の暗殺を企図したいわゆる大逆事件が発覚し、幸徳秋水(本名伝次郎、一八七一—一九一一)、大石誠之助(一八六七—一九一一)ら容疑者の一斉検

挙が始まる。司法省民刑局長の平沼騏一郎（一八六七—一九五二）を中心とした国家の司法権力によつて犯罪事実以上に被告人たちの無政府主義

的な思想性が断罪された苛烈な判決（明四四・一・一八 結審）は知識階級に衝撃を与える、文壇でも徳富蘆花（本名健次郎、一八六八—一九二七）

の有名な講演「謀叛論」（於第一高等学校、明四四・二・一）など多くの

文學者が個人の自由とそれを抑圧する国家・社会との相関について思考をめぐらすきっかけとなつた（<sup>58</sup>）。經營難による『アカネ』の休刊（明四

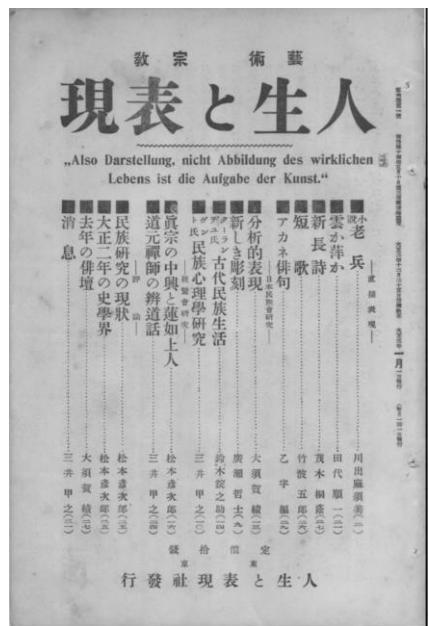
二・七）後は郷里の山梨に一時転居していた三井甲之であったが、そのようない時代の閉塞した空気は十分に感じ取つていいたことであろう。奇しくも該事件の発覚と同月、彼は自身と関わりの深い雑誌『日本及日本人』——明治四一（一九〇八）年九月一日号より歌欄の選者を担当——で次のように述べていた。

文芸と政治と対比して論ずるのは無意味である。『文芸』といふ名と、『政治』といふ名とは、全く異りたる見地より名けたる二概念である。

文芸は政治的活動をも内容とすべきは、文芸の内容は人生なることによつて言はずとも明かである。（<sup>59</sup>）

この頃から徐々に、三井の学問的・思想的関心は、個人の内面にまつわる事柄から外面にまつわるそれへと対象領域を拡げつつあつたとみられる。

明治四三（一九一〇）年一〇月に再び上京した三井は、翌年五月に『アカネ』を文芸新聞（タブロイド判）として再刊し、更に翌年五月には「吾等は



『人生と表現』第6卷1号（大正3年1月）  
表紙

明治思想界に於ける吾等の使命を自覚せねばならぬ」(60)と決意を以て同紙を『人生と表現』と改題して総合雑誌の体裁に改めた。「人生と表現」(Leben und Ausdruck)と

学系統論 (*System der Philosophie*, 1889) のなかから採つたもの(61)であり、この頃からまたしても彼の論著にはヴァントの名が頻繁に登場(62)するようになる。

明治末年から大正初頭にかけてヴァント晩年の大著『民族心理学 (Völkerpsychologie, 1900~1920)』全一〇巻のうち前半五巻と新刊の『民族心理学原論 (Elemente der Völkerpsychologie, 1912)』を原書で順次読み破した三井は、個人心理学（実験心理学）と同様、その学理にすっかり魅了されてしまう。

此民族心理学は人類の心理学的開展史である。古事記万葉集等は此の研究から照らされて新しい光を放たむとするのである。つまり此の研究から得た原理を日本また東洋の材料にあてはめねばならぬのである。(63)

三井はこのように述べ、「民族心理学とは「地層のうちに埋れて居る歴史前の遺物によつて研究する」(64)いわゆる民族考古学とは異なり、ある民族

の一精神的創造の本原地」<sup>(65)</sup>をたどり、そこにある「根本的な心理的動機を窮」<sup>(66)</sup>め「太古から的情况のまゝ」<sup>(67)</sup>に现代に抽出する、そのための実践的学問であると理解した。

元々、ヴァントの民族心理学は、個人心理学（実験心理学）の方法では解明出来ない——一個人の「直接経験」に還元し得ない——自然発生的人間集団いわゆる「民族（Volk）」に固有の精神的產物（言語・芸術・神話・宗教・習俗等）について、それらを産み出す集団心理の過程における一般的な法則性を解明しようとするものであった<sup>(68)</sup>。だがヴァントは、世界各地の多様な民族心理を分析しその特性を比較検討するうち、次第に自民族の潜在的可能性、文化的發展性に強い確信と明るい希望を抱くようになり、最晩年には「ヨーロッパ文化の新たな未来をもたら」し「文化諸民族の中心的国家」となるべき「ドイツ民族のこれから の使命」を熱心に説くに至るのである<sup>(69)</sup>。三井はそうしたヴァントの姿勢に深い感銘を受け、彼を学者として以上に民族主義の偉大な先導者として仰いだ。そして、みずからもそれに倣つて個人中心の生活を民族中心の「民族的生活」<sup>(70)</sup>に改めその上で、

国民的自覚は必ず個人的自覚より出立せねばならぬ。個人的自覚は人生の枢機生存生殖の問題より宗教的訓練を経てそが客觀化即表現を民族の運動に求めむとする時、即個人自覚の結果は個人の意識を民族の意識と同一化することであつて、新しき神話の創造！ そをして日本国民の活動の事実を以て成就せしめねばならぬのである。<sup>(71)</sup>

と、現実の日本民族・日本国家の歩みにどこまでも「隨順」していかんとする意欲をわき立たせたのであつた。

## 五 日本はほろびず

大正三（一九一四）年七月二八日、第一次世界大戦（歐洲大戦）が勃発する。明治天皇が崩御（明四五・七・三〇）し、大正新時代が始まつてから丸二年目に起きた海の彼方の大戦争の報は、かねて「日本は超個人意志を認めまた実現せざるべからざる時に迫られつゝある」（<sup>72</sup>）との予感にとらわれていた三井甲之に明らかなしるしをもたらすものであつた。

三井は、大戦の意義を、近代精神（理知）によつて構築された既存世界の「外的制約」——「従来の国際的関係」に息苦しさを感じていた人類の「内的生命の波動」がもたらした必然的な「現状打破の運動」と受け止めた（<sup>73</sup>）。そして、「全国民ことに青年は平和の仮設の上に静止して居るべきではない。生の動乱の脈搏に信順する緊張を保たねばならぬ」として、日本人挙げてあるがままの「世界的人類的動乱の渦中」に没入していくその心構えを説いた（<sup>74</sup>）。

片や漱石は、三井や岩野泡鳴（本名美衛、一八七三—一九二〇）、生田長江（本名弘治、一八八二—一九三六）、鹿子木員信（一八八四—一九四九）など一部論者の高揚（<sup>75</sup>）をよそに、戦争の帰趣を「案外落付い」（<sup>76</sup>）て冷静に觀察していた。随想「點頭錄」（『東京／大阪朝日新聞』大五・一連載）をみてみよう。

實際此戦争から人間の信仰に革命を引き起すやうな結果は出て來やう

とも思はれない。又從來の倫理觀を一変するやうな段落が生じやうとも考へられない。これが為に美醜の標準に狂ひが出やうとは猶更懸念できない。何の方面から見ても、吾々の精神生活が急劇な変化を受けないものである。「……」其中で事件の当初から最も自分の興味を惹いたもの、又現に惹きつゝあるものは、軍國主義の未來といふ問題に外ならなかつた。(77)

漱石の大戦への関心はもっぱら、「独逸に因つて代表された軍國主義」の台頭が「多年英仏に於て培養された個人の自由」をどこまで破壊し得るか、しかして「此時代錯誤的精神」が全世界を覆い尽くす時人類は「其報酬」として何を「給与」されるか(78)という点にあつた。どこまでも三井とかみ合わない思考である。

はからずも大戦勃発の二、三ヶ月前、三井は、久々に漱石に関する論説を執筆し次のように断じていた。

現在の日本は新旧交代せむとしつゝある。此の時に當つては文芸評論も無意義なる反省的論議の復習に終つてはならぬ。「……」そこで漱石門下の人々の思想をしらべると思想と行為との最後の目的を個人に置いてあるのが明になる。「……」然るに彼等は何等歴史的研究をも国民としての自覚をも示さず只々個人的の足元ばかりを見ての論を輸入紹介したり享樂的の作を示して居るばかりだ。高山樗牛「本名林次郎、一八七一—一九〇一二」ほどにも進まぬのはつまり夏目漱石・

といふ偶像の下に集まつた安逸の悲しさだ。【】現代日本が生存を主張するために新旧交代を要するならば漱石門下の人々も交代すべきよりもせらるべき旧思想の集りだ。（79）

——「人類文化の開展を概括すれば神話は宗教へ、宗教は科学へ進んで、その科学精神と科学智識とが普及せしめられ、こゝにデモクラシイの精神が世界を風靡しようとして居る。しかしながら個人の力が有効に協力せむとする。それは實に祖国と祖國の伝統とであつた」<sup>(8)</sup>——を迎えた。そのような彼にとって、この期に及んでなお「國家的道德といふものは個人的道德に比べると、ずっと段の低いものの様に見える」<sup>(8)</sup>と個人至上の立場を堅持するかにみえる漱石とその門下および文学的追随者たち（白樺派等）の思想こそ、喫緊に駆逐されるべき「時代錯誤的精神」そのものなのであつた。

夏目漱石氏は『軍国主義』を「點頭録」のなかで論じて居る。

「……」現戦争から何の教訓をも得ぬと主張する  
氏の態度そのものにこそ内面的背景が無いのであらう。「……」戦争  
は既成の文明を破壊すると同時に新文明のために路を淨めるもの  
である。「……」夏目漱石氏等の如く徵兵制度を軍国主義と名附け  
て之を自由平等主義と対峙せしめんとする如きは文士の遊戯論に

外ならぬのである。氏のいふ如く軍国主義が時代錯誤的・精神ではなく傭兵制度こそ時代錯誤的精神の産物である。(83)

大正五（一九一六）年一二月九日、長篇小説「明暗」（『東京／大阪朝日新聞』大五・五連載開始）を途絶させたまま、満四十九歳で漱石は没した。まるで合わせ鏡のように自分と対照的な文学性・思想性を具備した年来の好敵手<sup>(84)</sup>の死について直接には何らの感懷も示さなかつた三井であったが、それからおよそ七年後の大正一二（一九二三）年一一月、みずから主宰する「人生と表現社」（明四五・五称）の名において次のような宣言文を起草する。

故にわれら日本国民にとつては『日本』は『世界』であり『人生』である。『日本』はわれらの内心にいくるところの『宇宙』であり『永久生命』であり『信順意志』である。そは祖国日本を防護せむとする実行意志であり、『日本は滅びず』と信ずる一向専念の信仰である。(85)

更にこの二年後には、「人生と表現社」をより一層右派色を前に出した「原理日本社」へと改称（大一四・一一）し、機関誌『原理日本』を通じて非日本的・反国家的（個人主義的）とみなしたあらゆる学問・思想に対してのそれまで以上に攻撃的な言論活動を開始すべく、改めて次のような宣言を発する。

故にわれら日本国民にとつて『日本』は『世界』であり『人生』その

ものであり、われらの内心にいくるところの『宇宙』である。

故に『日本』はわれらの人生価値批判の綜合的基準——『原理日本』であり、宗教的礼拝の現実的対象——『永久生命』である。そは祖国日本を防護せむとする実行意志であり、『日本は滅びず』と信ずる一向専念の信仰である。(86)

これらのうち、いずれの宣言においても盛り込まれ、執筆者の強いこだわりがみて取れる「日本は滅びず」というフレーズ(87)。それはかつて小説中の登場人物をして「[日本は]亡びるね」(88)と言わしめたばかりか結局最後まで自分に真摯に応答しなかった男に向けて三井が放った、みずからのアイデンティティをかけた執念の「否」<sup>(ナイン)</sup>ともよめはしないだろうか。

ところで三井甲之の漱石への反発は、その文学・思想の基盤となる個人主義(89)への生理的好惡に加えて、個人主義の源流となつたアングロ・サクソンの精神文化とそれをおのづからに媒介する英語・英文学の学びに対する国文学プロパーとしての彼の属性から来る反発も大きく作用していたと考えられる。

英語の学習は一方に実用的目的をも有して居るけれども、又他方には国漢文と同じく学生の思想と道徳的観念とに直接大なる感化を及ぼすことは言ふまでもない。それ故に英語教科書の内容は此の如き思想的道徳的見地から厳重の選択を加へねばならぬのである。「⋮⋮」功利主義道徳や個人主義道徳に基く自助論的又は成功論的教訓よりも国家的運命と歴史的精神とに基く奉公協力の教訓を選択すべきであ

る。(90)

学生時代からゲーテに親しんで来ただけあって、さすがに三井も平田派など旧国学者たちのように外国語を問答無用で排斥するようなことはしなかった。それでいて、彼にとつての外国文学は、あくまでその国固有の言語（国語）テクストからその国の「勃興時代又は建国時代の緊張せる思想」（91）すなわち原初的なナショナリティをよみ取り日本におけるそれに当てはめていくという嘗みに限つて、その存在を許されるものであつた（92）のである。

#### 注

(1) 三井甲之に関しては、部分的に論及したものも含め、既に一定の知見が蓄積されている。なかでも、その思想的特徴を「歌学的日本主義」と性格付けた小松茂夫の着眼は、戦後における本格的な三井研究の事実上の嚆矢といえよう。小松「近代日本における『伝統』主義——『日本主義』を中心にして——」（『近代日本思想史講座 7／近代化と伝統』筑摩書房、昭三四・一一）一二六～一二八頁。

(2) 東大元級「東大国文科評判記」（『日本文学』昭六・一二）一二九頁。

(3) 芳賀矢一「国学とは何ぞや」（『國學院雑誌』明三七・二）・『明治文学全集 四四／芳賀矢一集』（筑摩書房、昭四三・一二）二三三～二三五頁。

(4) 三井の経歴と業績について基本的な事項は、三井甲之遺稿刊行会編「著作を中心としたる三井甲之略年譜」（『三井甲之存稿——大正期諸雑誌よりの集録——』同会発行、昭三四・四）、昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書 七三／三井甲之』（同大学近代文化研究所、平九・一〇）、塩出環『原理日本社の研究——歌人・三井甲之と蓑田胸喜——』（神戸大学博士論文、平一六・三）等を参照した。

(5) 三井甲之「古き家」（『アカネ』明四二・二）三頁。

(6) 三井甲之「東京帝大国文学科の現状に就いて」（『原理日本』昭一二・五）九八頁。

(7) 東京大学百年史編纂委員会編『東京大学百年史 通史一／部局史一』（東京大学出版会、昭五九・三／昭六一・三）四二一～四二三頁。

(8) その後、留年者数の増加など学生の履修上幾多の問題が生じたことにより何度か制度改変が為され、明治四三（一九一〇）年度からは専攻（専修学科）は二年次の始めまでに届け出るものとされ、外国語学の修業年限は二学年間となり、支那哲学、国史学、支那文学の専攻に限つては一ヶ国語に減じられた。更に大正五（一九一六）年度からは各専攻一律一ヶ国語となつた。当該年度の『東京帝国大学一覧』（国立国会図書館デジタルコレクション [<http://dl.ndl.go.jp/>] にて自由閲覧可）を参照。

(9) 橋本鉱市「近代日本における『文学部』の機能と構造——帝国大学文学部を中心として——」（『教育社会学研究』平八・一〇）九八頁。

(10) 竹内洋『日本の近代 一二／学歴貴族の栄光と挫折』（中央公論新社、平一・四）二五〇～二五四頁。衣笠正晃「国文学者・久松潜一の出発点をめぐつて」（『言語と文化』平二〇・一）二〇〇頁。

(11) 江口渙「伝統主義の価値を否定す」（『帝国文学』大六・一〇）・『日本近代文学大系 五八／近代評論集』（角川書店、昭四七・一）一八〇頁。

(12) 沼波武夫「大？・九・一三付／佐佐木信綱宛書簡」・信綱『明治文学の片影』（昭九・一〇）二五六頁。

(13) 三井甲之「はしがき」（『親鸞研究』東京堂、昭一八・二）二頁。

(14) 高島平三郎『心理漫筆』（開発社、明三一・六）一～四頁。金子馬治『最近心理学』（東京専門学校、明三三・八）三一〇、三一一頁。

(15) 三井甲之『万葉集論』（明四〇・四 脱稿）・前掲『三井甲之存稿』五三八、五三九頁。

(16) 武者小路実篤（無車名義）「三井甲之氏の白権評を読んで」（『白権』大元・一〇）一一一頁。

(17) 夜久正雄「根岸短歌会『アカネ』創刊前後」（『亜細亞大学誌諸学紀要』昭三八・三）、貞光威「伊藤左千夫と三井甲之 その一」（『岐阜教育大学国語国文学』平七・三）等を参照。

(18) 三井甲之「消息」（『アカネ』明四一・二）六六、六七頁。

(19) 伊藤左千夫「明四一・三・八付／堀内卓造宛書簡」（『左千夫全集 第九卷』（岩波書店、昭五二・九）四六九頁。

(20) 三井甲之「文芸管見 ●挑発的文学」（『アカネ』明四一・八）三六、三七頁。

(21) 三井甲之「消息」（『アカネ』明四一・三）六〇頁。

(22) 有馬学『日本の近代 四／「國際化」の中の帝国日本』（中央公論新社、平一一・五）二四、二五頁。

(23) 三井前掲「消息」（『アカネ』明四一・二）六七頁。

(24) 三井甲之「漱石氏の低徊趣味説を難ず」（『アカネ』明四一・三）一八頁。

(25) 貞光威「『アカネ』と『アララギ』対立の行方」（『岐阜教育大学紀要』昭五八・九）、同「伊藤左千夫と三井甲之 その二」（『岐阜教育大学国語国文学』平八・三）等を参照。

(26) 篠弘『近代短歌論争史 明治大正編』（角川書店、昭五一・一〇）、本林勝夫「斎藤茂吉と三井甲之」（『山梨英和短期大学国文学論集』昭五六・一〇）等を参照。

(27) 三井甲之「漱石門下の人々（1）」（『文章世界』大三・四）二〇〇、二〇一頁。

(28) 小栗浩『人間ゲーテ』（岩波書店、昭五三・五）、高橋義人「ゲーテと反近代」（『講座ドイツ観念論』弘文堂、平二・一一）等を参照。

(29) 三井甲之「消息」（『アカネ』明四一・五）六一頁。

(30) 本林勝夫は「そこらあたりに甲之の論のきめの粗さも弱点もまたある」と論断している。本林前掲「斎藤茂吉と三井甲之」二四二頁。

(31) 「最近の小説及脚本」（『アカネ』明四一・二）、「漱石氏の低徊趣味説を難ず」（『アカネ』明四一・三）、「空想文学を排して日本派の将来を論ず」（前

同）、「漱石氏の『鶏頭序』を評す」（『アカネ』明四一・四）、「漱石氏の『創作家の態度』を評す」（『アカネ』明四一・五）、「写生文派作品の価値及文壇近況」（『アカネ』明四一・一一）等。なお三井の没後ほどなく親しい関係者によつて編まれた「主要著作年表」（『新公論 三井甲之追悼特集号』昭二八・一〇）の一番初めに、「漱石氏の低徊趣味説を難ず」が、それ以前に発表された論説が数編あるにもかかわらず挙げられていることは、三井の思想活動の原点が「反漱石」にあつたことを端的に示唆しているようで興味深い。

- (32) 土屋文明『伊藤左千夫』（白玉書房、昭三七・七）一六七頁。  
(33) 石原千秋『漱石はどう読まってきたか』（新潮社、平二二・五）五七、五八、八一頁。

(34) 夏目漱石「田山花袋君に答ふ」（『国民新聞』明四一・一一・七）・『漱石全集 第十六巻』（岩波書店、平七・四）二五五頁。そうしたことは、例えば以下の弟子とのやり取りにもよくあらわれている。

「先生の『こころ』の主人公はおしまいに自殺しますが、あの場合、自殺したつて何にもならないと思ひますけれど、どうでしようか。」「……」「それにあの場合、自殺そのものが不自然ですねえ。」「そうかねえ。不自然かねえ。」

私の言葉がおわるが早いか、不思議そうにこう訊き返<sup>〔ママ〕</sup>えた漱石の顔は、それまでと打つてかわってすっかり真顔になつていた。

「自分じや、ちつとも不自然だとは思わないがね。もちろん、もう一ペン読みかえして見なけりやはつきりしたことはいえないけど……。」

ますます真顔になり、むしろ厳肅な表情にまでなつていった漱石は、さらにはあとをつづけた。

(36) 三井甲之「自然派作品の意義」(『アカネ』明四一・二) 五八頁。

(37) 桶谷秀昭『正岡子規』(小澤書店、昭五八・八) を参照。

(38) 親鸞『正像末和讃』「自然法爾章」…『真宗聖教全書 宗祖部』(大八木興文堂、昭一六・一一) 五三〇頁。同『末燈鈔』「第五通」..前掲『真宗聖教全書 宗祖部』六六三頁。

(39) 宮城音弥編『岩波小辞典 心理学』(岩波書店、昭三一・九) 一六頁。

(40) 三井甲之「改革者ヴァント」(『人生と表現』大元・一) 一六頁。

(41) 前掲『岩波小辞典 心理学』五五頁。ヴァントの個人心理学(実験心理学)については他にも、須藤新吉『ヴァントの心理学』(内田老鶴圃、大四・六)、宇都宮仙太郎「ヴァントの個人心理学に於ける基本概念」(『哲学研究』昭三・五)、ヴァント『体験と認識 (Erlebtes und Erkanntes, 1921) —— ヴィルヘルム・ヴァント自伝』(川村宣元他訳、東北大学出版会、平一四・九) 等を参照。

(42) 三井甲之「文化批判の尺度としてのヴァントと親鸞」(『野依雑誌』大一〇・五)..前掲『親鸞研究』二〇一頁。

(43) 三井甲之(塩山名義)「文芸の理想とは何ぞ」(『アカネ』明四一・五) 四四頁。

(44) 伊藤左千夫「明四一・五・一二付／三井甲之宛書簡」..前掲『左千夫全集 第九巻』四八〇頁。

(45) 三井甲之「消息」(『アカネ』明四一・三) 六二頁。

(46) 三井甲之「行く春(上篇)」(『アカネ』明四一・六) 七、一九頁。

(47) 三井前掲「行く春(上篇)」二四頁。

(48) 三井甲之「行く春(下篇)」(『アカネ』明四一・七) 三一、三二頁。

(49) 三井前掲「行く春(下篇)」三一、三三頁。

(50) 夏目漱石「それから」..『漱石全集 第六巻』(岩波書店、平六・五) 一五〇、二六五、三四三頁。柄谷行人「解説」(『それから』新潮文庫版、昭六〇・

九) 二九七頁。

(51) 三井前掲「漱石氏の『鶴頭序』を評す」二五頁。

- (52) 三井甲之「和歌入門」(『アカネ』明四一・六)六四頁。
- (53) 三井前掲「漱石門下の人々(1)」二〇二頁。
- (54) 無記名「七月の雑誌」(『文章世界』明四一・七)一〇一頁。
- (55) 藤井淑禎『小説の考古学へ——心理学・映画から見た小説技法史——』(名古屋大学出版会、平一三・二)を参照。
- (56) 斎藤茂吉「慢言(一)」(『阿羅々木』明四二・一)三一頁。
- (57) 三井甲之「親鸞の信者に」(『日本及日本人』大三・六・一)・前掲『親鸞研究』二七二頁。
- (58) 関口安義『芥川龍之介』(岩波書店、平七・一〇)・中村文雄『大逆事件と知識人——無罪の構図——』(論創社、平二一・四)・高澤秀次『文学者たちの大逆事件と韓国併合』(平凡社、平二二・一一)・山中千春『佐藤春夫と大逆事件』(論創社、平二八・六)等を参照。
- (59) 三井甲之「文芸時評」(『日本及日本人』明四三・五・一五)六五頁。
- (60) 三井甲之「改巻の辞」(『人生と表現』明四五・五)二頁。
- (61) 夜久正雄「『人生と表現』創刊前後」(『亞細亞大學教養部紀要』昭四六・一一)三、四頁。
- (62) 「ヴァントの歴史的開展に関する序説」(『人生と表現』明四五・六)・「ヴァント八回誕辰」(『日本及日本人』大元・九・一五)・「改革者ヴァント」(『人生と表現』大元・一一)・「オイケンよりもヴァント」(『日本及日本人』大二・一〇・一)・「ヴァントの単婚説」(『日本及日本人』大二・一〇・一五)・「ヴァント氏族心理学研究」(『人生と表現』大二・一一・大四・五断続連載)等。
- (63) 三井甲之「ヴァント氏族心理学研究(一)」(『人生と表現』大一・一一)一頁。
- (64) 三井甲之「ヴァント氏族心理学研究(三)」(『人生と表現』大三・二)一六頁。
- (65) 三井前掲「ヴァント氏族心理学研究(一)」一三頁。
- (66) 三井甲之「ヴァント氏族心理学研究(二)」(『人生と表現』大三・一)一二

頁。

(67) 三井前掲「ヴァント氏民族心理学研究(三)」一七頁。

(68) 前掲『岩波小辞典 心理学』一七七頁。ヴァントの民族心理学については他にも、桑田芳蔵『ヴァントの民族心理学』(改造社、大一三・三)を参照。

(69) ヴァント前掲『体験と認識』三八三・三九三頁。幸いにも、ヴァントのそうした言説は、後々ローゼンベルグ(Alfred Rosenberg, 1893-1946)などナチズムの理論家たちに積極的な利用価値を見出される」とはなかつたようである。F・L・クロル『ナチズムの歴史思想——現代政治の理念と実践——(Utopie als Ideologie: Geschichtsdenken und politisches Handeln im Dritten Reich, 1999)』(小野清美他訳、柏書房、平一八・二)を参照。

(70) 三井甲之「民族的生活の縦横断面」(『日本及日本人』大二・一・一五)九九頁。同「大正思想界動乱の要素」(『日本及日本人』大二・一・一)一〇四頁。同「民族的生活と國家組織」(『日本及日本人』大二・一・一五)一〇七頁。同前掲「ヴァント氏民族心理学研究(一)」一四、一五頁。等々。

(71) 三井甲之「文明の人間化」(『日本及日本人』明四五・五・一五)九二頁。

(72) 三井甲之「超個人意志論」(『日本及日本人』大三・七・一): 前掲『親鸞研究』二四一頁。

(73) 三井甲之「歐洲動亂の意義」(『文章世界』大三・九)四四頁。

(74) 三井甲之「親鸞聖人の信と生の動亂」(『人生と表現』大三・九): 前掲『親鸞研究』二六六頁。

(75) 宮本盛太郎『宗教的人間の政治思想 軌跡編——安部磯雄と鹿子木員信の場合——』(木鐸社、昭五九・三)一一九・一二八頁。中山弘明『第一次大戦の「影」——世界戦争と日本文学——』(新曜社、平二四・一)一一一・三七、五三・六一頁。

(76) 夏目漱石「點頭錄」: 前掲『漱石全集 第十六卷』六三〇頁。

(77) 漱石前掲「點頭錄」六三一、六三二頁。

(78) 漱石前掲「點頭錄」六三一、六三三、六三八、六四八頁。

(79) 三井甲之「漱石門下の人々（乙）」（『文章世界』大三・五）一一、二七、二八頁。

(80) 三井甲之「親鸞聖人の阿弥陀觀」（『人生と表現』大三・三）・前掲『親鸞研究』二八〇頁。

(81) 三井甲之「伝統主義の任務」（『早稲田文学』大六・六）・前掲『日本近代文学大系』五八／近代評論集Ⅱ一六九、一七〇頁。

(82) 夏目漱石「私の個人主義」（学習院講演、大三・一一・二五）・前掲『漱石全集 第十六卷』六一四頁。

(83) 三井甲之「戦争と文士学者」（『日本及日本人』大五・二・一一）七九、八一、八三頁。

(84) 当の漱石は、三井からの執拗な批判を一体どのように受け止めていたのであろうか。現時点で具体的な反論を試みた形跡は確認出来ないが、講演のなかで「『日本及び日本人』の一部では毎号私の悪口を書いてゐる人がある」と語つてゐるので多少なりとも意識はしていったと思われる。漱石前掲「私の個人主義」六〇九頁。吉田精一校訂『近代文学注釈体系／夏目漱石』（有精堂、昭四〇・七）一五五頁。

(85) 三井甲之「人生と表現社宣言」（大一二・一二脱稿）・『しきしまのみち原論』（原理日本社、昭九・一〇）一三八、一三九頁。

(86) 原理日本社「宣言」（『原理日本』大一四・一一）一頁。

(87) この文言自体は、これらより早く「『日本は滅びず』と『英國はたじろかず』と」（『戦士日本』大九・二）のなかにみられる。更にそれ以前にも「阿弥陀より祖国日本へ」（『日本評論』大五・一〇）のなかに「祖國日本の無窮の生命を信ぜねばならぬ」と文言は違うが同趣旨のものがみられる。三井前掲『親鸞研究』二九九頁。

(88) 夏目漱石「三四郎一の八」（『東京／大阪朝日新聞』明四一・九・八五面）・『漱石全集 第五卷』（岩波書店、平六・四）二九二頁。

(89) 龜山佳明『夏目漱石と個人主義——〈自律〉の個人主義から〈他律〉の個人主義へ——』(新曜社、平二〇・二) を参照。

(90) 三井甲之「国民思想の普遍的疾患」(『中外新論』大七・一)・前掲『三井甲之存稿』三六頁。

(91) 三井前掲「国民思想の普遍的疾患」三六頁。

(92) その意味で、三井ら原理日本社の同人に英語学者の松田福松(一八九六—一九九八)が加わっていたのも、何ら不自然ではない。松田『国文研叢書二五／米英思想研究抄』(国民文化研究会、昭五八・一二)、福間良明「英語学の日本主義——松田福松の戦前と戦後——」(竹内洋・佐藤卓己編『日本主義的教養の時代——大学批判の古層——』柏書房、平一八・二)、横川翔「松田福松の足跡——三井甲之とその同志たちの一側面——」(『國學院雑誌』平二八・九)等を参照。

## 第二節 親鸞思想の特異的受容

### 一 三井甲之と親鸞

三井甲之が、近代ドイツのヴァントと並んで生涯篤く尊崇したのは、中世・鎌倉初期の僧で浄土真宗の宗祖・親鸞であつた。いわゆる鎌倉新仏教の祖師たちのなかでもきわだつた存在感を放ち、かの神学者・バルト(Karl Barth, 1886-1968)によつて西洋のキリスト教界に先んじた東洋の仏教界における「宗教<sup>プロテス</sup>改革<sup>タント</sup>の実践者」<sup>(1)</sup>として、師の法然(源空、一三三一—一一二)とともに世界史的な存在意義を認められた親鸞。その親鸞の教説から、近代日本における最も攻撃的なナショナリズムの唱道者の一人と目される三井が、みずからの学問・思想形成にとつて「一番

適切な血や肉」(2)の大部分を摂取したといういきさか意外な事実は、既に多くの研究者によつて掲示(3)されている。

もとより親鸞その人は、

弥陀の本願まゝとおはしまさば、釈尊「釈迦牟尼仏 Gautama Siddhārtha, BC563-483? BC466-386?」の説教虚言なるべからず。仏説まゝとにおはしまさば、善導「真宗七祖の第五祖、六一二一六八一」の御釈虚言したまふべからず。善導の御釈まゝとならば、法然「真宗七祖の第七祖」のおほせそらびとならんや。法然のおほせまゝとならば、親鸞がまふすむね、またもてむなしかるべからずさふらう歟<sup>か</sup>。詮づるところ、愚身の信心におきてはかくの「」とし。(4)

という系譜を明示しており、みずからの浄土真宗こそがインド・中央アジアに発祥した仏教の正統——「大乗のなかの至極」(5)に位置するという自負を強く有していた、まさうかたなき釈家・仏弟子である。彼の普遍的な真理への志向は、時として自身が住まう国土を「粟散<sup>ぞく</sup>辺州」(6)すなわち粟粒のように散在するちっぽけな辺境の島国と相対化しているところにも伺え、その思想性にナショナリストイックな要素をはらんでいたとはいかようにも考えられない。「念佛まふさんひとぐは、わが御身の料はおぼしめさずとも、朝家の御ため国民のために、念佛をまふしあはせたまひさふらはゞ、めでたふさふらふべし」(7)といふ、真宗諸派が昭和一〇年代に全国の門信徒に向けて盛んに喧伝した親鸞晩年の書簡の一節も、切り離された前後の文脈を復元すれば、単純に念佛者の滅私報國を奨励することを目的

に書かれたものでないことは明白なのである<sup>(8)</sup>。

しかるに、そのような親鸞をして「日本民族の経験したところのもの」を「印度の仏教思想」の「形式」を借りて「表現」した国民的「偉人」と断言<sup>(9)</sup>出来てしまふところに、「崇祖敬神を以て国を建てた我國民は、其後印度や支那の文明を容れたのにも拘らず、つねに国民性に合せて、むしろ之を發揮させた」<sup>(10)</sup>とする芳賀矢一の見識を受け継いだ三井ならではの国学的な思考の枠組があると考える。換言すれば、彼の学問性・思想性の特質は、その親鸞受容の構造を精密に分析することで具体的に明らかにし得るのである。以下時系列に沿つてみていこう。

三井甲之と親鸞との具体的な出遇いは、第一高等学校文科在学中（明三四・九、明三七・七）に、真宗大谷派（東本願寺）の学僧・近角常觀が主宰する求道学舎（明三五・六開設）の門を叩いたことに始まる。幼少年期以来のもろもろのメンタルクライシスからの脱却を求めての入信であった。

自分がものごころのついた時に感じたのは人生の悲みであつた。さうして宗教を求め、芸術に走つた。中学時代に正岡子規の芸術に高等学校時代に親鸞の宗教にめぐりあつた。親鸞の宗教は求道学舎の近角常觀師から親しく教をうけた。「……すなはち明治四十年前後から大正末期までの間に専ら親鸞聖人の思想と文章とを研究したのである。伊藤左千夫を求道学舎へ誘つたのもその頃であつた。<sup>(11)</sup>

周知の通り、常觀は、同じく大谷派の清沢満之（一八六三—一九〇三）と並んで、近世幕藩体制下における本末・寺請制度の定着以来長らく惰眠を貪

り精神的活力を喪つてしまつた浄土真宗を日本人の自覺的な宗教として再起動させんとした、明治・大正仏教界の旗手の一人である<sup>(1-2)</sup>。彼がその主著『信仰の余瀝』（大日本佛教徒同盟会出版部、明三三・一二）や『懺悔録』（森江本店等、明三八・六）等で提唱した「懺悔道」<sup>(3)</sup>とは、「聖人のつねのおほせには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそれほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと」<sup>(1-3)</sup>という親鸞の有名な「二種深信」の教えを敷衍したもので、具体的には、自己の罪惡（それほどの業をもちける身）を徹底して凝視・内観しそれを信仰を同じくする友（御同行御同朋）に率直に披瀝するという嘗みを通して相対的に阿弥陀仏（阿弥陀如来とも、以下同）の救濟（たすけんとおぼしめしたちける本願）の確実性を自証していく<sup>(1-4)</sup>、きわめてエモーショナルな形式の仏道であつた。キリスト教の「告解（告白）」にも似たその実践的な信仰スタイルは、宗門内のみならず世間一般、とりわけ「人生とは何ぞや、我は何処より來りて何処へ行く、といふやうなことを問題とする内観的煩悶の時代」<sup>(1-5)</sup>に暗中模索する当時の青年層に大きくアピールしたといわれる。

三井は、東京帝国大学文科大学文学科在学中（明三七・九～明四〇・七）

も学業や創作の合間にみては本郷区森川町にあつた求道学舎に通い、常観の説教法談を真剣に聴聞し、また学舎の機関誌『求道』にも「親鸞聖人の御筆跡の石づくりを見奉りて作れる歌」（明三七・一二）を皮切りに、常観の影響が如実に伺える情趣的な法悦の詩歌をほぼ毎号のように発表している。代表例としては、以下の嘆詠が挙げられる。

人の事を偽りといふわが身を、かへりみすれば偽りのわれ。

偽りのわれをもすてぬ御仏の、慈悲はおもへど憂はやまず。

われが身をかへり見すればつみ深かき、我をすてざるみ仏かなし。(16)

三井の常観個人への親炙は大学卒業以降徐々に薄まつていった(17)ようだが、ともかく彼は、教理的な思弁よりも日常生活における内心の「実験」(18)を重んじた常観を触媒として、親鸞の思想からまず第一に、人間存在を「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごとたはごと、まことあることなき」(19)とみる根本的な視座を摂取し、そこから「わがはからひ」(20)にてはいかんともしがたい現実世界は「自然法爾」(21)としてあるがままに「隨順」(22)する以外にないのだという決定的な態度を身に付けた。「実験」は、元々清沢満之が用い彼の没後弟子たちによつて宗教界に膾炙(23)した表現であるが、同時期に帝大でヴァントの実験心理学（個人心理学）に関する講義を熱心に聴講していた三井にとつては、格別親しみやすい語であつたに違ひない。

彼「親鸞」は現実から理想へ達せむとしたのであつて、理想より現実を引出さむとはしなかつた。理想より進み出でむとせず、理想に帰向せむとしたのである。これを彼は他力の信と名づけたのである。

「……」故に親鸞の宗教は現世の罪惡を否定せぬのである、現実を人為的に変改せむとせぬのである、理想境、または現世と正反対の世界と生活とを現ぜしめむとするのではない、現実のまゝに隨順し、歓喜と悲哀と、希望と絶望と、恩愛と憎悪とそれらに没入しつゝそ

れらを内に調和せしめ綜合せしめむとする信心によつて、ここに不可思議の境に無極の生を創造せむとするのである。<sup>(24)</sup>

人生の真実は、外に「理想」の実現を求めて生きるところにはない。内に明らかな「信」を得て「歡喜と悲哀と、希望と絶望と、恩愛と憎悪」に満ちた生に「没入」する、そこにおのずから「理想」が立ちあらわれるのである。こうした親鸞受容のエッセンスは、前節三項で取り上げた三井唯一の中編小説「行く春」（『アカネ』明四一・六・七）における主人公の行動様式——「現実の無常なる境遇運命」を前に為すすべもなく別れた「唯一人の恋人」への「追慕の一念」を懷いて、それから先は「自然の引力」に牽かれるままに「目に見る万象の裏に漲る不可測の威力に同化すべき内心の活動に赴かん」と意欲する——にも反映されているとみられる。

## 二 宗祖から教祖へ

そもそも三井甲之にとつて親鸞の教説は、信仰や人生観、文芸に対する志向——抽象を排し対象（天然）に没入する「写生」の必要性を説いた子規や、人間の意識本来のありようを「直接経験」としてみきわめようとしたヴァントに拠つて、現実に感じた物事を「眞」に「あるがまま」にえがき出そうとする——など、自己の内面に属する一切の事柄と「完全なる調和」<sup>(25)</sup>を見出し得るものであつた。しかるに、前節四項でみたように明治末期にヴァントの民族心理学に触発され「日本に生れて日本人で無いならばそれは何国人なのか」<sup>(26)</sup>と「国民的自覚」を強化し「昔から日本民族は世界文化の王者たるべき素因を有して居つた」<sup>(27)</sup>との

確信を日ごとに深めていた三井は、それに伴つて自分のなかの親鸞の位相を単に一宗の祖師から元々が外来宗教である仏教を日本固有の民族精神に融合させ全くオリジナルな「眞の新宗教」<sup>(28)</sup>として創成し直した、国民宗教の「教祖」<sup>(29)</sup>へと変位させた。そして、その思想を自己の外に属する——「三井一人がため」以外の——事柄にも積極的に拡大適用し始めたのである。

宇宙の一切は人類の前に不斷に開展しつゝあるので、今後如何なる局面を吾等の前に展開し来るかは吾等の知らむとする最後の目的である。世界に於ける偉人は各種の方面より此の問題を解決せむと試みたのである。「……」親鸞は芸術家ではない、学者でも無い、政治家でもない、宗教家といふべく、更に明に言現はすためには大預言者といふべきである。「……」彼は人類の将来を預言したのである。人類の将来は自然の動搖的進行に信順して際涯なき流転の大渦流に没入する生滅の波瀾である。<sup>(30)</sup>

そうしたなか、大正三（一九一四）年七月二八日に勃発した第一次世界大戦（歐洲大戦）の報は、右の親鸞の預言をまさしく裏付ける出来事として三井の意識を必要以上に高揚させた。

親鸞聖人の宗教は今世界動乱によつて示されたる人生の情緒的因素の発動によつて客観的証拠を示されつゝある。「……」それは生そのものゝ動乱に外ならぬのである。それを大規模に客観化したものが国際

的戦争である。進んで止まざる生の動乱波瀾に信順するを教ふる信仰は、実に現代の信仰の預言であつた。われらは慶喜心を以て身を動乱に没入せしめねばならぬのである。「……」全国民ことに青年は平和の仮説の上に静止して居るべきではない。生の動乱の脈搏に信順する緊張を保たねばならぬ。日本は今世界的人類的動乱の渦中に没せむとする、このとき七百年の昔の聖教をしのぶ心は極めて切である。<sup>(31)</sup>

三井は、大戦の真因を、理性を以て本とする近代精神によつて構築された「従来の国際的関係」、その「外的形式」に耐えられなくなつた諸国民・諸民族のナチュラルな「内に開展する生命の波動」<sup>(32)</sup>によるものと認識した。そしてその上で、「真の近代精神覚醒の先駆者」<sup>(33)</sup>として「進んで止まざる生の動乱波瀾に信順する」ことを説いた親鸞の思想を今日に受け伝える日本人こそが、この先きわまりなく続くであろう「世界的人類的動乱」——「世界史的統御力としての世界帝国と世界宗教との出現、のための全人類の苦闘」<sup>(34)</sup>の求心的存在となるに相応しいと論じたのである。

後にその委細構わぬ攻撃的な言動によつて同志の蓑田胸喜ともどもあまたの学者・知識人から忌み嫌われる三井であるが、この頃はまだ、「外的形式が内に開展する生命の波動に堪へなくなるのは事実である。然し何故にそれが今起つて居る如き戦争とならなければならぬのか」<sup>(35)</sup>と眞面目に反駁されたり、あるいは「自覚といふ一線を個人生活から国民生活の上に移さうとしてゐるのが現下評論壇の中心問題かと思ひます。「……」三井甲之氏は史的開展の上から、国民性の原質を闡明しようとしてゐる人の一人の

やうに思はれます」<sup>(36)</sup>と丁寧に分析されたりと、ひとかどの評論家としてそれなりに読まれていた<sup>(37)</sup>。

とはいへ、現実はそう三井に都合よく「自然法爾」には進展しない。戦争の拡大長期化に伴つて生じた内外の諸事象は、三井の予測と期待を大きく裏切る方向性に、多くの日本人の意識と注意を向かわしめていった。今一度、前章第二節二項で引用した綾川武治（一八九一—一九六六）の所見をきこう。彼もまた、大正後期から昭和戦前期にかけて生粋の日本主義・國家主義の論客として活動し、三井とも新聞『日本』や『帝国新報』などの右派メディアでたびたび共闘している。

世界大戦の末期大正六年の露西亜革命は、我が日本の社会主義運動に画期的刺激を与へ、大正七、八年の交は、全国に労働組合及び社会主義団体を簇<sup>そく</sup>出した。けれども一方に於て、我が日本が参加した連合国側の、米国参戦誘導の為<sup>〔ママ〕</sup>めにせるデモクラシー擁護讃美の宣伝は、我が国内に民本主義なるデモクラシー運動を起し、次いで国際連盟組織を促進する為<sup>〔ママ〕</sup>めにせる国際主義の宣伝は、我が国に流入し来つて我が知識階級間に国際主義の思潮を喚起した。この欧米より殺到し来つた社会主義、デモクラシー、国際主義の三思潮は、常に新しき傾向を喜び迎へんとする習癖を有する学者思想家の大部分を捲き込んで、異常なる迫力を以て、日本精神、日本国家に挑戦し来つたのである。<sup>(38)</sup>

大戦終結前後の日本の学界・思想界をかくも席巻したという社会主義（マルクス・共産主義、無政府主義、労働組合主義）、デモクラシー（民

主・民本主義)、国際主義(協調主義、平和主義)の三大思潮。これらはいずれも三井にとつて、暴力的手段(デモ、革命)、個人意志の機械的総和(多数決)、抽象的 ideal(永遠の平和)を以て、現世をかれこれと「局分切斷」<sup>(39)</sup>し「人為的に変改」<sup>(40)</sup>せんと企図する、親鸞の「他力門」とは真逆の「自力聖道門」の教えに他ならなかつた。特に社会主義は、山梨県中巨摩郡松島村の旧家の長男という彼の社会的階級(資本家/地主権者)を脅かす文字通りの危険思想であり、到底看過出来ぬもの<sup>(41)</sup>であつた。少し後になるが、三井は次のように述べている。

「行者ははからひ」が「自力」であり「義」である。はからひといふのは徹底的論理主義である。人生を徹底的に理解しつくし、人生問題を解決しつくさうとするのである。現時に於てはマルクス主義の如きはその一例である。それは歴史的開展の終結を説くのである。その説くところの歴史的開展の第三階段に於て支配形式が推移して社会の自己組織が完成し生産手段が社会化し社会所有となり、労働者はその労働の全収穫を自身に享受すべきやうになつたならば、歴史は如何にその次に開展するであらうか。終結の無いのが歴史であり、人生は不可思議であるから人生である。人生は不可思議であるからして人生を味ふときは無限の感情が悲喜の涙をさそふのである。<sup>(42)</sup>

おりしも東京帝国大学の圈域では、これも前章第二節二項でみたように、デモクラシーを基調とするリベラルな学者たちが「黎明会」を、社会主義(マルクス・共産主義)を信奉する学生有志が「新人会」を、ほぼ同時に

結成（大七・一二）し、他方ではそれらに反発する学者・学生有志が「興国同志会」を結成（大八・四）し、左右に相分かれて激しい思想戦が開始される。

三井はといえば、当然後者の側に賛同し、請われて外部有識者として学生会員たちに適宜助言・指導を与える（<sup>43</sup>）一方で、在野の仏教研究家の木村卯之（一八七九—一九三四）、大谷派（東本願寺）僧侶で真宗大谷大学教員の井上右近（一八九一—一九六〇）ら「同信の友」数名とはかり月刊雑誌『親鸞と祖国』を京都から発刊（大八・一）し、外来思潮の侵蝕から自国を精神的に防護するという明確な目的意識のもと、宗教と政治を同次元の問題として論じる独特の思想営為に率先乗り出していった。

一切の政治経済的理論及びその応用としての政策の根柢には国民的信念を要するのであつて、それがわれらが親鸞を研究の中心として求めんとするところの宗教の重大任務の一つである。「…」親鸞の宗教によつてわれらに啓示せらるゝ対外及び対内政策の原理とは何であるか。それは今われらの研究し実現しつゝあるところの、又研究し実現しようとしつゝあるところのものである。（<sup>44</sup>）

だが興国同志会は、森戸事件（大九・一）のために結成一周年を待たずして分裂・解散状態となり、『親鸞と祖国』もまた、諸般の事情により丸二年で終刊（大九・一二）の憂き目をみてしまう。

倉田百三（一八九一—一九四三）の戯曲『出家とその弟子』（岩波書店、大六・六）、石丸悟平（一八八六—一九六九）の小説『人間親鸞』（藏経書

院、大一〇・一）等に描き出された親子の情愛と信仰のはざまで葛藤するきわめて人間的な親鸞像や、水平社（大一一・三結成）など部落解放運動の言説においてしばしば象徴的に取り上げられた「無差別平等」を説く平民的な親鸞像が広く受け容れられた大正中期（<sup>45</sup>）にあっては、三井らの提示する超個人的でナショナリスティックな親鸞像——「何となれば親鸞は個人的救済の宗教を説いたのではなく、個人は『他力本願』としての『歴史的生活』に没入すべきを説いたからである。『歴史生活』はわれら日本人にとっては『祖国日本の運命』に外ならぬのである」（<sup>46</sup>）——が一般性を獲得するにはやはりまだ尚早だったのだろう。

### 三 南無・阿弥陀仏から南無・祖国日本へ

大正一〇年代に入つて、日本の政治は、三井甲之らの焦慮をよそに、「世界の大勢」に順応すべくさまざまに試行を積み重ねていった。社会各層におけるデモクラシー・普通選挙要求熱の高まりは時の政府（加藤友三郎内閣）をして衆議院議員選挙法調査会の設置（大一一・一〇）にふみ切らせ、また、アメリカ主導によるワシントン会議（大一〇・一一・大一一・二）への参加以降、国際主義（協調主義、平和主義）は日本外交の既定方針となり、それに伴つて陸海軍では大規模な軍縮が決定（大一一・七）され、更には、ソ連の外交官・ヨツフエ（Adolf Ioffe, 1883-1927）の来日（大一一・二）によつて社会主義（マルクス・共産主義）の総輸出元たる同国と日本との国交正常化交渉も本格的に動き始める（<sup>47</sup>）。

当時政友会所属の衆議院議員で、そのきわめて保守的・復古的な政治信条によつて右派からの期待値も高かつた小川平吉（一八七〇—一九四二）は

次のように述べている。

時に大正十一年、露人ヨツフエの来朝して横行闊歩放言豪語憚る所なく、国家の功臣にして之に迎合して跪拝するもの「東京市長としてヨツフエを公式に招待した後藤新平（一八五七—一九二九）を指すと思われる」あるに至れり。之が為に共産主義者等は俄かに其勢を増し、白昼跳梁跋扈して氣勢を添ゆるに至れり。予は之を退治するに力を竭したるが、其の害悪の蔓延を奈何ともすること能はざりき。此歳日本に共産党の創立「七・一五」を見たるは浩嘆に勝たへざる所なり。<sup>(48)</sup>

併せてこの時期における三井の状況分析をきこう。

文化、交流は不斷の思想戦である。現時の国際関係の内容を分析すれば、その優勢要素は常に思想戦である。「……」現世界とは、世界現勢とは何であるか。それは世界各民族の史的生活要素の綜合的開展に外ならぬのである。世界現勢に於ける日本は、こゝに安住の極楽世界を見出しつては居らぬのである。内外から日本に迫るもののは圧迫と困難と不安とである。<sup>(49)</sup>

ここに至つて、三井は、今後ますます熾烈さを増していくであろう「外國の对外干涉意志又は世界征服意志の表示としての各種のプロパガンダ」<sup>(50)</sup>に対抗する、そのためには不可欠な国民宗教（國家への絶対的帰

依）の旗幟を鮮明に掲げるべく、親鸞—浄土真宗のかなめたる「念佛（名号）」を、「南無・阿弥陀仏」から「南無・祖国日本」へと、きわめて大胆によみ換えていく。それは三井にとつて、最後まで釈僧として「阿弥陀仏の名号をつることはできなか」<sup>(5) (1)</sup>つた親鸞の思想的限界を超えていくことでもあつた。

親鸞の他力とは阿弥陀仏の本願力である、といった。阿弥陀仏とは自然のやうを知らせむれうなりといつた。阿弥陀仏は外よりの救済者ではなく、内心の叫びであつた。阿弥陀仏とは形もましまさぬ無限の生命感であり、生活意志であり、無上涅槃の解脱感であつた。

「⋮⋮」われらの生活は日本国民としての生活であつて此の団体生活を分析して始めて個人生活を見出すのである。個人生活の集合堆積が国家団体生活となるのではなく、社会と国家とは個人より、先に存在してをるのである。「⋮⋮」われらは個人意志を總体意志に帰命せしむるときに、こゝに信を獲得し解脱を実現するのである。「原文改行」しからばわれらの帰命すべき總体意志は何であるか、それは日本意志である。それが本願力である。此の本願力としての日本意志に帰命し帰依するといふのは、「日本は滅びず」と確信することである。現日本の日本人にとつては反覆すべき名号は「祖国・日本」である。われらの宗教は祖国・礼拝である。「日本は滅びず」と信ずるが故にわれらのはかなき現実生活も悠久生命につながらしめらるるのである、それが摂取不捨である。摂取して捨てざるが故に阿弥陀仏といふ、即ち摂取して捨てざるが故に祖国、

そもそも親鸞その人は、本尊たる「阿弥陀仏」を、「大般無上涅槃」という三千大千世界（全宇宙）に常住遍満する摂取不捨の原理そのものの人格的表象と領解していた。

法身「大般無上涅槃」はいろもなし、かたちもましまさず、しかればこゝろもおよばれずことばもたへたり。この一如「前同」よりかたちをあらわして、方便法身とまふす御すがたをしめして、法藏比丘「阿弥陀仏の前身・法藏菩薩」となのりたまひて、不可思議の大誓願をおかげあらわれたまふ御かたちおば、世親菩薩「真宗七祖の第二祖・天親菩薩 Vasubandhu, 400-480?」は尽十方無碍光如来「阿弥陀仏」となづけたてまつりたまえり。(5<sub>3</sub>)

親鸞にとつて畢竟「南無阿弥陀仏」の念仏とは、自身が『仏説無量寿經』等の大乗經典に描写された「阿弥陀仏（法藏菩薩）」のイメージとストーリーを通して人間の認識を本来的に絶した「大般無上涅槃」からのはたらきかけ——「如來諸有ノ群生ヲ招喚シタマフノ勅命」(5<sub>4</sub>)——に「南無」と感應道交していく、その端的なあかしに他ならなかつた(5<sub>5</sub>)。三井は、そうした親鸞の領解をより先鋭的に推し進め、色も形もなく心も言葉も及ばないのが「大般無上涅槃」であるならば、その能動を得る形式（名号）は何も「南無阿弥陀仏」一つに限定される必然性はなく、得する者が生まれながらに帰属する環境に即して「南無○○」と具体的に表現されるの

がむしろ自然であるとしたのである。

実のところ、そのような考え方は、「浄土真宗」という一つの宗派にとつては「南無阿弥陀仏」を唯一絶対の旗印とする念佛教団としての存立基盤を根底から解体しかねない異端思想（異安心）であり、近世真宗学（宗乗）の確立以来一貫してタブーとされていた。じつさい本願寺派（西本願寺）の僧侶で宗立龍谷大学の教員でもあつた野々村直太郎（一八七〇—一九四六）は、三井の一連の言説に触発されたのか『中外日報』紙上に「浄土教革新論」の連載（大一二・一・二五、大一二・二・二八）をはじめ、そのなかで「苟も国民教育の大勢に逆行し、人の境遇を弄びてその頭脳を印度たらしめんとする固陋頑冥の一類あらば、そはモハヤ純真なる日本人には非ずして、詮ずるところ和装せる印度人である。〔：〕眞如が果して宇宙原理なりや否やは固より別問題とするも、要するにかくの如きは阿弥陀如来にその存在を与ふる所以の途には非ずして、却て反対にその存在を奪ひ去る所以の途たるに過ぎぬではないか」（<sup>56</sup>）と述べるなどして宗門内を騒然とさせ、結果的に大学を逐われている（<sup>57</sup>）。

いずれにせよ、三井甲之における親鸞思想の受容は「南無阿弥陀仏＝南無祖国日本」を確信したこの時点で完了したとみてよい。親鸞の思想を自身の体質に合わせてことごとく内在化してしまつた彼は、この先もはや一々親鸞の名を借りてみずから主義主張を語る必要はなくなつたのである。そのことは、「親鸞の宗教より開展すべき今日の宗教」（『日本及日本人』大一二・一・一）を最後に「親鸞」をタイトルに入れた論著を一篇もものしていない（<sup>58</sup>）ことからも伺えよう。

注

(1) K・バルト『教会教義学 (Die Kirchliche Dogmatik. 2-2, 1942)』：安田理深『親鸞の宗教改革 共同体』（彌生書房、平一〇・一一）一二頁。

(2) 武者小路実篤（無車名義）「三井甲之氏の白権評を読んで」（『白権』大元・一〇）一一一頁。

(3) 米田利昭「抒情的ナシヨナリズムの成立——三井甲之（一）——」（『文学』昭三五・一一）、清水威「三井甲之の国家論——日本のイデオローグはどのように開花・結実したのか——」（『帝京学園短期大学研究紀要』平元・一二）、石井公成「親鸞を讃仰した超國家主義者たち（一）——原理日本社の三井甲之の思想——」（『駒澤短期大学仏教論集』平一四・一〇）、片山杜秀「写生・隨順・抨誦——三井甲之の思想圈——」（竹内洋・佐藤卓己編『日本主義的教養の時代——大学批判の古層——』柏書房、平一八・一）、中島岳志「親鸞と日本主義 四——歌人・三井甲之と『同信の友』——」（『考える人』平一一・一〇）等。周知の通り、近代ナシヨナリズムと仏教思想との関連性といえば、従来はもっぱら日蓮（一一一一一一一一二八二）と『法華經』の思想、および田中智学（本名巴之助、一八六一一一九三九）、高山樗牛（本名林次郎、一八七一一九〇二）、北一輝（本名輝次郎、一八八三一一九三七）、井上日召（本名昭、一八八六一一九六七）、石原莞爾（一八八九一一九四九）などその熱心な信仰者たちを中心に論じられるのが常であった。丸山照雄「超国家主義思想と日蓮主義」（『伝統と現代』昭五〇・一）、伊勢弘志『石原莞爾の変節と満州事変の錯誤——最終戦争論と日蓮主義信仰——』（芙蓉書房、平二七・八）、島薙進・中島岳志『愛国と信仰の構造——全体主義はよみがえるのか——』（集英社、平二八・二）等を参照。

(4) 親鸞『歎異抄』「第二章」：『真宗聖教全書 宗祖部』（大八木興文堂、昭一六・一一）七七四、七七五頁。

(5) 親鸞『末燈鈔』「第五通」：前掲『真宗聖教全書 宗祖部』六五八頁。

(6) 親鸞『高僧和讃』「源空讚」..前掲『真宗聖教全書 宗祖部』五一四頁、ルビ引用者。

(7) 親鸞「建長？・七・九付／性信宛書簡」..前掲『真宗聖教全書 宗祖部』六九七頁。

(8) 西山邦彦「河上肇と服部之總について」（『親鸞に出遇つた人びと 2』同朋舎、平元・三）を参照。

(9) 他にも三井は、往昔「日出處ノ天子、書ヲ日没處ノ天子ニ致ス」（『隋書』「倭國伝」、原漢文訓み下し）と信書にしたため当時の国際秩序（華夷秩序）に昂然と対峙した聖徳太子（五七四・六一二）と、「蓋シ人ノ人為ル、本朝ノ中華為ル、此ノ礼ニ由レバ也」（『中朝事実』「礼儀章」、原漢文訓み下し）と述べて道徳の精華たる「礼」を今に具備する日本こそが真に世界の中心（中華）たるに相応しいとした山鹿素行（一六二二・一六八五）の二人を、親鸞と並んで外来思想を「日本化」する事業を頗著に成し遂げた国民的「三偉人」に数えている。三井甲之「親鸞の宗教より開展すべき今日の宗教」（『日本及日本人』大一二・一・一）..『親鸞研究』（東京堂、昭一八・二）三九・四一頁。

(10) 芳賀矢一『国民性十論』（富山房、明四〇・一一）..『明治文学全集 四四／芳賀矢一集』（筑摩書房、昭四三・一二）二八〇頁。

(11) 三井甲之「はしがき」（前掲『親鸞研究』）一、二頁。

(12) 常観の人物と思想について詳細は以下を参照。安富信哉『近代日本と親鸞――信の再生――』（筑摩書房、平二二・一一）、岩田文昭『近代仏教と青年――近角常観とその時代――』（岩波書店、平二六・八）、碧海寿広『近代仏教のなかの真宗――近角常観と求道者たち――』（法藏館、平二六・八）等。

(13) 親鸞『歎異抄』「後序」..前掲『真宗聖教全書 宗祖部』七九二頁。

(14) 閻（煩惱から生じる罪業）の深さを知ることは、閻を照射する光（阿弥陀仮の智慧と慈悲）の深さを知ることに等しい。これを親鸞は「無碍ノ光明ハ無明ノ闇ヲ破スル恵日ナリ」と説示している。親鸞『顕淨土真実教行証文類 序』..前掲『真宗聖教全書 宗祖部』七九二頁、原漢文訓み下し。

(15) 安倍能成『岩波茂雄伝』(岩波書店、昭三二・一二)六一頁。

(16) 三井甲之「心のまゝを」(『求道』明三八・二)四一頁。

(17) 『求道』への寄稿も、明治四二(一九〇九)年四月号の嘆詠二首(「天に」、「適応」)を最後に途絶えている。とはいえ尊敬の念は生涯変わらず、三井は一貫して「常観師」と呼びならわしている。

(18) 近角常觀『懺悔録』(森江本店等、明三八・六)二頁。

(19) 親鸞前掲『歎異抄』「後序」七九二、七九三頁。

(20) 親鸞『歎異抄』「第八章」..前掲『真宗聖教全書 宗祖部』七七七頁。

(21) 親鸞『正像末和讃』「自然法爾章」..前掲『真宗聖教全書 宗祖部』五三〇頁。同前掲『末燈鈔』「第五通」六六三頁。

(22) 曇鸞『無量寿經優婆提舍願生偈註 卷下』(親鸞『顕淨土真実証文類 四』所引)・前掲『真宗聖教全書 宗祖部』一一五頁。親鸞『愚禿鈔 卷下』..前掲『真宗聖教全書 宗祖部』四六八頁。

(23) 碧海前掲『近代仏教のなかの真宗』五五頁。なお、三井は、清沢についてはほとんど言及していないが、不治の病(肺結核)に侵されながらも「大道を知見せば、自己にあるものに不足を感じることなかるべし」と言い切った同人の「秋霜烈日の人格的要素」には深い敬意を払っていたようである。清沢「絶対他力之大道」(『精神界』明三五・六)・『清沢満之の四つの文章』(東本願寺出版部、昭三八・一)一一頁。三井甲之「我観トルストイ」(『トルストイ研究』大七・六)・前掲『親鸞研究』一六六頁。

(24) 三井甲之「親鸞の信者に」(『日本及日本人』大三・六・一)・前掲『親鸞研究』二七〇・二七二頁。

(25) 三井甲之(某大学生名義)「●雑言録 宗教と文学」(『馬酔木』明三八・二)四四頁。

(26) 三井甲之「流行と信仰」(『日本及日本人』大二・五・一五)一一〇頁。

(27) 三井甲之「文壇思想界漫評」(『人生と表現』大二・二)七七頁。

(28) 三井甲之「現代日本の内的生命」(『新仏教』大二・一)..『三井甲之存稿——大正期諸雑誌よりの集録——』三井甲之遺稿刊行会、昭四四・四)五頁、傍点引用者。

(29) 三井甲之「文芸思想界雑誌總評」(『人生と表現』明四五・七)七七頁。

(30) 三井甲之「世界統一的預言者親鸞」(『人生と表現』明四五・五)..前掲『親鸞研究』三、四頁。

(31) 三井甲之「親鸞聖人の信と生の動乱」(『人生と表現』大三・九)..前掲『親鸞研究』二六五、二六六頁。

(32) 三井甲之「歐洲動乱の意義」(『文章世界』大三・九)四四頁。

(33) 三井甲之「親鸞聖人の阿弥陀觀」(『人生と表現』大三・三)..前掲『親鸞研究』二八〇頁。

(34) 三井甲之「戦争と文士学者」(『日本及日本人』大五・二・一一)七六頁。

(35) 中村孤月「諸家の歐洲戦争觀を評す」(『文章世界』大三・一〇)三一二頁。

(36) 前田晁「現下の評論壇 其の将来は如何」(『読売新聞』大三・一一・一七四面)。

(37) 他にも同時期には、岩野泡鳴「評家数名の批判」(『読売新聞』大三・九・二一四面)、徳田(近松)秋江「共鳴ある評論壇の人々」(『新潮』大三・一一)、稻毛詛風「本年の評論(中)」(『読売新聞』大三・一二・一六四面)などが三井の評論活動に好意的——その文章に「幾分の偏見」(稻毛)を認めつつも——な見方を示している。三井と泡鳴(本名美衛、一八七三—一九二〇)はとりわけ思想的相性もよく、大正五(一九一六)年一月には協力して、「国家民族を離れて空想的に人類若しくは個人を取扱おうとする種類の個人主義・社会主義・並に個人の偉大性を認めぬ単純な国家主義をもつとも排斥する「新日本主義」を掲げた雑誌『新日本主義』を創刊している。塩田良平「伝統主義・日本主義・民族主義の系譜」(片岡良一編)『近代日本文学講座 第四卷／近代日本文学の思潮と流派 下』河出書房、昭二七・三)二六九、二七〇頁。

(38) 綾川武治「純正日本主義運動と國家社会主義運動」（『經濟往来』昭九・

三）四二頁、ルビ引用者。

(39) 三井甲之「原理祖国日本」（『公論』大九・三）・前掲『親鸞研究』三〇五頁。

(40) 三井前掲「親鸞の信者に」二七二頁。

(41) じつさい、中巨摩郡内では、大正八（一九一九）年以来、小作争議が連年多発・激化しており、三井に至つては、昭和四（一九二九）年四月に組合側の出した条件を事実上丸呑みし、郷里敷島村（旧松島村）を自主退去せざるを得ないところまで追い込まれている。米田利昭「抒情的ナショナリズムの自壊と復活——三井甲之（二）——」（『文学』昭三六・二）七〇頁。塩出環『原理日本社の研究——歌人・三井甲之と蓑田胸喜——』（神戸大学博士論文、平一六・三）八八〇頁。

(42) 三井前掲「親鸞の宗教より開展すべき今日の宗教」四五、四六頁。

(43) 他にも興国同志会には、外部から紀平正美（一八七四—一九四九）、鹿子木員信（一八八四—一九四九）、大川周明（一八八六—一九五七）、伊藤正徳（一八八九—一九六二）など当時氣鋭の右派知識人が指導的立場として関わっていた。

(44) 三井甲之「対内対外政策の原理としての宗教」（『親鸞と祖国』大八・一）一〇頁。

(45) 藤野豊『水平運動の社会思想史的研究』（雄山閣出版、平元・一一）、千葉幸一郎「空前の親鸞ブーム粗描」（同他編『大正宗教小説の流行——その背景といま』——論創社、平二三・七）、大澤絢子「大正期親鸞文学における『人間親鸞』像の変容——倉田百三から石丸悟平へ——」（『現代と親鸞』平二六・一二）等を参照。

(46) 三井甲之「念佛と祖国礼拝」（『親鸞と祖国』大八・五）一二頁。

(47) 伊藤隆『昭和初期政治史研究——ロンドン海軍軍縮問題をめぐる諸政治集団の対抗と提携——』（東京大学出版会、昭四四・五）、松尾尊允『大正デモクラシー』（岩波書店、昭四九・五）、有馬学『日本の近代 四／「国際化」の中の帝国日本』（中央公論新社、平一一・五）等を参照。

- (48) 小川平吉「新聞『日本』を創刊せる顛末」(大一五・六) .. 国立国会図書館憲政資料室所蔵『小川平吉関係文書』資料番号八七八、ルビ引用者。こののち関東大震災(大一二・九・一)や虎ノ門・摂政宮裕仁太子狙撃事件(大一二・一二・二七)等によつて更に危機感を強めた小川は、該事件一周年を機に「青天会」なる会合を立ち上げ、「俗悪ジヤーナリズムに対抗」し「腐敗せる社会、堕落せる人心を矯正」すべく日刊新聞『日本』を創刊(大一四・六・二五)する。三井もまた、同会の会員として『日本』の発刊準備懇談会(大一四・五・二九)に出席している。
- 小松光男編『日本精神発揚史(日本新聞十周年記念)』(日本新聞社、昭一〇・四三四、四〇、四四頁。伊藤前掲『昭和初期政治史研究』三九六、四〇二頁)。
- (49) 三井前掲「親鸞の宗教より開展すべき今日の宗教」四〇、五一頁。
- (50) 三井甲之「祖国礼拝の行法」(『日本及日本人』大一二・二・一一) .. 前掲『親鸞研究』三四〇、三四一頁。
- (51) 三井前掲「親鸞の宗教より開展すべき今日の宗教」五一頁。
- (52) 三井前掲「親鸞の宗教より開展すべき今日の宗教」五一、五六、五七頁。
- (53) 親鸞『唯信鈔文意』.. 前掲『真宗聖教全書 宗祖部』六四八頁。
- (54) 親鸞『顕淨土真実信文類三』.. 前掲『真宗聖教全書 宗祖部』六五頁、原漢文訓み下し。
- (55) 大峯顕『宗教への招待』(本願寺出版社、平九・四)、安田理深『呼びかけと目覚め名号』(彌生書房、平一〇・一〇)等を参照。
- (56) 野々村直太郎『淨土教批判』(中外出版株式会社、大一二・五)七〇、七五頁。
- (57) 武田慶之「近現代における淨土受容の一断面——野々村直太郎の『淨土教批判』をめぐって——」(『龍谷教学』平二三・三)を参照。
- (58) 昭和一八(一九四三)年二月には单著『親鸞研究』(東京堂)を刊行しているが、これは明治後期から大正中期にかけての親鸞に関する文章をまとめた旧論集である。

### 第三節 三井流国学の思想

#### 一 「しきしまのみち（ことのはのみち）」・言語論

大正一二（一九二三）年九月一日午前一一時五八分、関東大震災が発生する。郷里山梨に居たため直接罹災は免れた三井甲之であつたが、帝都一円の惨状の報——「大震災につぐに大火災をもつてして、その破壊の威力世界を驚かし、その惨状世界大戦々場のそれに比較せられ、「……」<sup>(1)</sup>——に間断なく接するに及んで国家滅亡への危機感はより一層リアリティを帯びて胸に迫つて来たことであろう。

震災から二ヶ月ほど経つて、三井は、みずからの主宰する「人生と表現社」（明四五・五称）の名において次のような宣言文を起草する。

われらは祖国礼拝国民宗教の經典として明治天皇御集を拝誦す。「原文改行」われらは日本には政治革命あるべからずと信じ、またあるべからざらしむるために、思想学術維新を実現せむとす。「……」われら明治の御代にはぐくまれ大正の御代に国民の責務を分担するもの、如何なる精神原理及び思想信仰によつて各個人及び全国民生活をみちびくべきか。われらは信ず、われらはわれらの祖国日本を礼拝すべしと。われらは信ず、祖国日本の精神はかしこくも、明治天皇の大御心にすべをさめしめられたりと。われらは信ず、明治天皇の大御心は『明治天皇御集』に表現せさせられたりと。かしこくもわれら日本国民は『明治天皇御集』を拝誦しつゝ、明治天皇の大御言をさながらにいたゞきまつるのである。「……」われらは祖国日本を礼拝し『明治天皇御集』を拝誦しまつりて

すゝまむとするのである。唯一生命のゆくべき一すぢのみちをゆき、全国民にとつての同じき祖国日本をまもりて進まむとするのである。世界のいたりとゞまるところにはたらかむとするわれらはらからの生命の血脉祖国日本を、われらはともにまもりて進まむとするのである。「……」われら日本国民にとつては『日本』は『世界』であり『人生』である。『日本』はわれらの内心にいくるところの『宇宙』であり『永久生命』であり『信順意志』である。そは祖国日本を防護せむとする実行意志であり、『日本は滅びず』と信ずる一向専念の信仰である。<sup>(2)</sup>

明治後期から大正中期にかけて、夏目漱石への反発、ヴァントの個人心理学（実験心理学）・民族心理学の受容、親鸞の教説の特異的受容と、さまざま内心の「実験」を経てみずからの学問と思想の内実を固めた三井が最終的にたどり着いた結論がここに示されている。

三井はいう。賢しらな偏知に基づく概念的思惟を排し、眼前にひとつなりとなつた日本—世界—宇宙をあるがまま（写生／直接経験）の動態においてとらえ、そのあるがまま（自然法爾）の展開に随つて生きる。かかる生命の根本原理（大般無上涅槃）に適つた在り方の範を端的に示すものこそ、『古事記』『万葉集』など上代の歌謡・和歌を原点とし、明治天皇によつて余すことなく完成された言の葉のしらべ、すなわち日本の“うた”である。

白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしま「敷島、日本の古国号の一つ」の道（明三七）

すなほなるをさな心をいつとなく忘れはつるが惜しくもあるかな（明三八）

すなほにてをゝしきものは敷島のやまと詞のすがたなりけり（明三九）

人の世のたゞしき道をひらかなむ虎のすむてふのべのはてまで（明四五）<sup>(3)</sup>

これら一首一首の御詠が収められた『御集』を正典<sup>カノン</sup>として日夜片時も忘れず拝誦し、心にとどめうしなわず、個人生活・社会生活のあらゆる方面に当てはめていく。そこにこそ「たゞしき道」、全ての日本人にとつて西洋文明の模倣と摄取に倦み疲れた近代精神を「眞の近代精神」<sup>(4)</sup>へとおのずから超克せしめる唯一の可能性がある。極論すれば、この世には文学も宗教も思想もいらない。ただ「やまと詞」＝「国語／日本語」の「うた」さえあればよい。それで全ての事柄ははからわざしてしかるべき方向に運ばれていくのだ、と。

こうした三井の発想の仕方は、まぎれもなく「言靈の幸<sup>さき</sup>はふ國」を金科玉条とした国学者のそれ<sup>(5)</sup>であり、近くは「今後の日本は、我が国の古典を基礎として治教の根本を立てねばならぬ」<sup>(6)</sup>として新たな国学創造の必要性を唱えた恩師の芳賀矢一を意識したものと推察される。加えていえば三井が傾倒した親鸞もまた、「南無ノ言ハ帰命ナリ。」「……」帰命ハ本願招喚ノ勅命ナリ<sup>(7)</sup>として「南無阿弥陀仏」と称える「念佛（名号）」に自己が発する音声以上のはたらきが備わっていることを確信し、しかもみずからの思想・信仰を示すにおいて漢語漢文（当時の知識階級では一般的）よりも和語和文による飾り気のない「音樂的形式」<sup>(8)</sup>を好み、生涯に五百首以上の今様調和讃を詠んだ、ある意味での言靈（言事相即）主義者であつた<sup>(9)</sup>。

『明治天皇御集』は御製集でありまして三十一音の和歌の御集であります。此の和歌をシキシマノミチと申すのであります。「⋮⋮」シキシマハミチは国語によつて個人生活を公共生活に連絡するものであるといふことがうなづかれます。「⋮⋮」言語は個人の発明し製造したものでは無く、国語とは国民生活から合成創造されたものであり、国語でない言語といふものはありません。それ故に人間が自己の生命を防護しこれを開展せしめようとするには此の生命を同胞の生命に連絡せしめねばならぬのであります。此の生命連絡の主要の手段はコトバであります。(10)

かくて、「しきしまのみち（ことのはのみち）」と称する独自の「歌学／国学」(11)を確立させた三井は、『明治天皇御集』の布教——しきしまのみち会（昭三・九組織）はそのための実践団体である(12)——に熱心に取り組んでいく。その活動は、昭和一〇年代半ば、準戦時体制下の国語教育現場に期せずして勃興した「極端な音声中心主義」、読誦の反復により国民精神の徹底的涵養をはからんとする「皇民化運動」(13)のまさしく源流となるべきものであつた。

明治天皇御製を拝誦して居りますと、自然に、日本人として現実の此の人生社会、国家生活に立つて、我等が正しく考へ、正しく行ふべき道が、まづ心持として会得されるのであります。——それが『敷島の道』であります。敷島の道は惟神道かむながらのみちであります。神ながらの道と申すのは理屈を言はぬ、といふではありませんが、理屈が先に立たぬ道

と申すのであります。(14)

一方で三井は、慶應義塾予科教授の蓑田胸喜、英語学者の松田福松（一八九六—一九九八）、歌人で著述家の田代順一（一八八六—一九三〇）ら「同信の友」とはかつて「人生と表現社」を「原理日本社」と改称（大一四・一一）し、「われらの学術的研究の知的作業をしてこの祖国防護の任務につかしめよ！」（15）との決意も新たに非日本の・反国家（国体）的な要素を有する（とみなした）あらゆる「理屈」に対するそれまで以上に攻撃的な言論活動、すなわち「思想学術維新」を開始する。

「すなほなるをさな心」を忘れ、あるがままの「ま」との道」に反して「現実を人為的に変改せむ」（16）とを企図する「左」のマルクス・共産主義者や諸派の社会主義者たち。またそれらを「学問の自由」という名分のもとに公然と容認する英米かぶれの自由主義者たち。更にはムッソリーニ（Benito Mussolini, 1883-1945）のファシス党やヒトラー（Adolf Hitler, 1889-1945）のナチス党など西欧の国家社会主義運動を猿真似して「右」からの大衆革命、国家改造（一国一党・独裁制の実現等）を志向する者たち（17）。そうした人々を、三井らは「南無祖国日本」の旗のもと、何らの利得も求めずひたすら一方的（一向専念）に論難し、結果として学界・言論界全体を大いに辟易・萎縮させたのである。昭和八（一九三三）年に惹起した瀧川事件や翌々年の美濃部事件（天皇機関説事件）など彼らのふるつた数々の精神的猛威と成果については、既に多くの研究者によって検証が為されており（18）こゝであえて論及するまでもないだろう。

「しきしまのみち（こゝのはのみち）」——それは佐藤卓己の表現を借りれ

ば「日本語による祖国救済」<sup>(1-9)</sup>を説く、まざうかたなき「国学」であった。

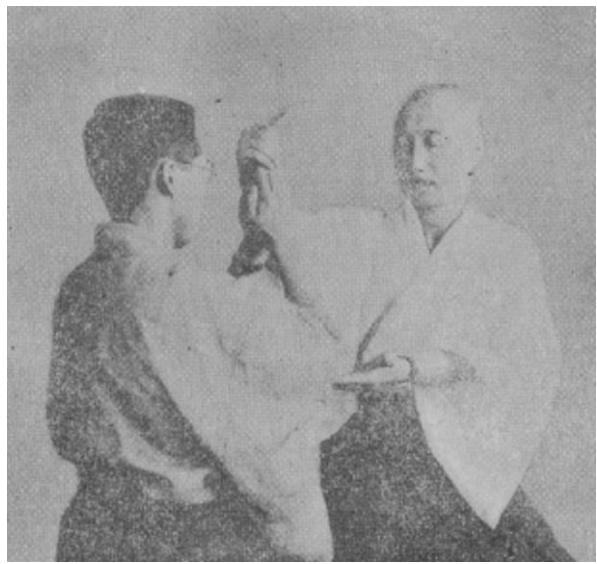
個人を社会国家また民族団体に結びつくるところのものは、まづ第一に同一の国語である。国語の生命の躍動のまゝに永久生命をいくものは『詩』である。それは『うた』であり、『しきしまのみち』である。<sup>(2-0)</sup>

ゲーテ、フィヒテ（Johann Gottlieb Fichte, 1762-1814）、ワーグナー（Wilhelm Richard Wagner, 1813-1883）等々、三井の著作には、ドイツ・ロマン主義の系譜に属する芸術家・思想家たちの名がたびたび登場するが、そうしたことも、彼らが自国の「生きた言語」<sup>(2-1)</sup>に乗せて近代理性の産物である個人主義に毒される以前の民族的精神性を力強く表現してみせたところに、非常なシンパシーを感じたからに他ならない。

昭和初期、三井ら原理日本社の唱道する「しきしまのみち（こ）とのはのみち」は、『原理日本』や『日本及日本人』などの諸雑誌や「しきしまのみち会」の布教活動等を通じてそれなりの数の理解者（信者）を得ていた。だが一方で、三井はある現実的な課題にも直面せざるを得なかつた。それは、こゝ十数年来北は南樺太・朝鮮から満洲、南は旧独領南洋群島へと急速かつ遠心的に拡大を続けている多民族帝国・日本の版図・勢力圏において、「やまと詞」＝「日本語」を母語としない「外地」——「虎のすむてふのべのはて」にいかにして言の葉<sup>ヨトノハ</sup>のしらべを扶植させ得るか、強制性を伴つた言語政策によつて表面的に読み書き理解させることは出来ても靈妙な“うた”の精神性を正しく味得させることなどそもそも不可能ではないか<sup>(2-2)</sup>、という限界である。これに対して三井は、驚くべきことに、音声・文字を超えた直接

身体から発する靈的エネルギーを介在させることで克服しようとした。

南米の宗教礼拝祭式についてチニカ・ウルマン「Tinica Ullmann 生没年未詳」氏（ブラジル出身の人でドイツ語で書いてをります）、は黒奴の子孫であるバツキール族の祭礼のことを報告して居ります。「……」神がゝりになつた数人はよろめきながら、踊の輪の中央に出て来て、我を忘れて狂舞するとゝもに、全体の人々が悉く此の狂喜の波浪に捲込まれるのであります。此『神がゝりびと』の前に身を投げ出してそれに接觸すれば、そこで身そぎせられ、解脱せしめらるゝのであります。【……】これは原始野蛮人の習俗といつてしまへばそれだけでありますが、そこに生物の、また人類の本能と宇宙の自然とがうかゞはるゝのであります。（<sup>2</sup><sub>3</sub>）



「たなすゑのみち」の鍊成に励む三井甲之（右）  
『手のひら療治入門』（アルス、昭和5年8月）より

おりしも昭和3（一九二八）年、三井は甲府中学校校長の江口俊博（一八七三—一九四六）から「手のひら療治」なる民間医術を伝授され、同人が定期的に開催する「手のひら療治の会」への参加を通じて熱心にその体得につとめていた（<sup>2</sup><sub>4</sub>）。しかして、その効験あらたかな秘儀——「此の『手のひら』をまづ徐かに患部へあてるのである。それで病気がなほる、これが要領である。この合掌は多人数が一堂に集

つて長時間これを行へば、その合成的伝達力は一同の手のひらと指頭との感覺にその強度化を感じしむる」<sup>(25)</sup>——を「掌／手末／たなすゑのみち」と称して「しきしまのみち（ことのはのみち）」の布教実践に援用する<sup>(26)</sup>ことに思い至つたのである。

祖国日本の生命は国際的に、祖国と外国との間に開展し、また開展せしむべきでせう。太平洋上、亜細亞大陸に、また南方に。「……」それは『言葉』によつて『ことのはのみち』となり『しきしまのみち』となり、『手』によつて『たなすゑのみち』となり、「……」世界に於ける日本と日本人とは、世界人類のためにマコト、マゴコロの日本精神としてのシキシマノミチと、それに基く生活行為規律タナスエノミチとを世界に向つて宣説するために、先づこれを同胞国民に向つて呼びかけようとするのであります。「原文改行」タナスエノミチは『光』であります。それは物理・生理・心理的に実証せらるゝ光照であり、伝達せられて反応を示し、『病氣をも治す』のであつて、病氣を治すことのみをするではありません。「……」此の心の連絡を取るのが言葉であり、即ち『言の葉の道』であります。この『言の葉の道』は日本人にとって『敷島の道』であります。それ故に此の『手のひら療治』を行してまゐりますと、自ら人と人との心が十分に通ふやうになり、敷島のみちがわかり、詩歌がわかるやうになるのであります。<sup>(27)</sup>

だが、かかる超言語（手つなぎ）帝国の構想はあまりつきつめると本来の支配階級である日本語ネイティヴの優位をも相対化してしまう危険性をはら

んでおり、北一輝（本名輝次郎、一八八三—一九三七）のように「現実の国家を超越した価値を追求」<sup>(28)</sup>し得ない根っからの国学者・三井にとつては思想的に諸刃の剣であつた。だからこそ彼は、この「たなすゑのみち」は「しきしまのみちのたなすゑのみち」であると繰り返し言明<sup>(29)</sup>し、あくまでみずから歌学／国学の「補助学科」としての役割を期待したのである。

下つて昭和一九（一九四四）年一月、『原理日本』の最終号が発刊される。そこには、

此のコトバこそは現戦争でその最高能率を發揮せむとしつゝある『見えざる』武器である。宣戦の詔書は申すも畏し、バドリオ〔Pietro Badoglio, 1871-1956〕の裏切に対しヒツュラ－總統の、米英の非人道盲爆に対しゲツベルス〔Joseph Goebbels, 1897-1945〕宣伝相の『言語』による奮戦はコトノハニミチの戦争に於ける任務を示教するものである。而して和歌は實に此の言語の練成方法である。<sup>(30)</sup>

として、最後まで「国語／日本語」の不可思議な威力に依つて大正期以来の「世界的人類的動乱」<sup>(31)</sup>をたたかい抜かんと意氣込む三井の、十年一日、ゆるぎない確信が披瀝されていた。

## 一 「中今／永遠の今」・時間論

昭和初期、三井甲之は、親鸞の教説から最後にもう一つ重要な示唆を得て、「新国学」者の面目躍如というべき独自の時間論を展開している。そ

れが、かの丸山眞男（一九一四—一九九六）も日本人の「歴史的オブティミズム」<sup>(32)</sup>を端的に象徴する思想の一つとして注目した「中今／永遠の今」論である<sup>(33)</sup>。

そもそも「中今」は、『続日本紀』中の文武天皇（六八三—七〇七、在位 六九七—七〇七）の即位の詔（宣命）中に「高天原に事始めて遠天皇祖の御世とほすめらぎ」中今に至るまでに「……」<sup>(34)</sup>とあり、そこの文脈的には「単に今と云ふ義」<sup>(35)</sup>以上の中ではなかったが、近世に本居宣長（一七三〇—一八〇一）が「中」といへるは当時を盛りなる真中の世とほめたる心ばへ有て、おもしろき詞なり<sup>(36)</sup>として、明治期には国語学者の山田孝雄（一八七五—一九五八）が「『中』とは何か。過去より将来に永遠の時の中間なりとの義なり。即過去を離れての現在なく、現在を離れての将来なく、過去及び将来を考へざるの現在なきの精神を一言にして明にしたる至大の金言なり」<sup>(37)</sup>として、各々その思想的含意に注目していた。しかして三井は、この「中今」にこそ日本の国体そのものの原理的核心が示されていると考え、次のように論じた。

国民生活成立統一の建国以前には日本は無いのでありますから、日本生命には過去は無いのであります。われらは日本は亡びずと信じ、また亡びるといふことは日本といふ名義も事実も空無になるといふことで、『日本』といふことは『不滅』といふことであります。滅亡せねば未來も無いのであります。あるものはたゞ現しき生成のみであります。シキシマノミチを行けば『死』から脱します。「……」此の『中今』といふのは高天原に天降りましゝ天皇御世すめらがみよから現在までといふ意味で、始はじめ、中なか、といふ考へ方で、将来の開展を考へて今を『中今』といった

のであります。これが国家生活としての日本生命の過去なく未来なくたゞ現在の生成のみであるといふことの予感的言ひ現しであると思ひます。【…】『今』は『生間』で活動の現在で、イは活動の意味があり、行く出づ入る住ぬ至る息生く命勢言ふ急ぐ稜威の如き同じ語根から分れたものであると説かれてをります。【…】『神』は『日本全体』であります。『全国民の礼拝しつつある神』であり、『全国民が神を礼拝しつゝあること』であります。それが『日本』の『初發』<sup>(はじめ)</sup>であり、同時に『中今』<sup>(ちゆうごん)</sup>であり、またその『無窮生成』<sup>(むきゆうせいせい)</sup>であります。それは『始』<sup>(はじ)</sup>があつて『終』<sup>(しゆう)</sup>がないのであります。始まつて終り、そこで完成すれば、それは『部分』<sup>(ぶぶん)</sup>であり『有限』<sup>(げんゆう)</sup>であります。終らぬ生成の始めといふことは日本民族の国家的生活の無窮開展が、『國土』<sup>(くにつけ)</sup>によつて規定せられたといふこと、即ち此の大和島根に國土<sup>(くにつけ)</sup>を見出したといふことであります。<sup>(38)</sup>

日本の國土<sup>(くにつけ)</sup>は、易姓革命（正史の改竄・リセット）を幾度も繰り返して現在に至つた中国や、進化・進歩——不完全な過去から完全な未来へ——といふ單線的な時間の觀念のなかで形成され來たつた西欧近代諸國家とは根本的に異なり、「うごくことなくかはることなく、神代も今も一日のごと」<sup>(39)</sup>く、常に最上の完成態として円環的に産巢<sup>(むす)</sup>ばれ続ける「全体國家生命」<sup>(40)</sup>である。

日本に於いては古代は常に現代と結合せしめられ、全歴史は現実生活のうちにをさめらるゝのである。過去に理想世界を回顧して現代

を澆李末法と悲嘆し、また将来に平和安定の極楽淨土を建設しようとする儒仏の歴史哲学又は所謂唯物史觀の如き知識的遊戯は日本精神の堪ふるところではなかつたのである。(41)

このきわめて簡明直截な「事実」に目覚め、日本人として「すなほ」に歓喜・信順することが出来れば、後はただ全体生命國家の「部分的要素」(42)たるの本分に徹してひたぶるに祖國<sup>かみ</sup>およびその生成作用の中核にまします。『天皇』を礼拝し与えられた素質と境遇に応じた生業に励むだけの時、すなわち「永遠の今」があるのみとなる。

以上が三井甲之の「中今／永遠の今」論の概要であるが、こうした考え方には、三井がかねて傾倒していた親鸞の、時間論（信一念論）と国土論（淨土論）が土台になつていて、これらが土台になつていてると推察される。

親鸞は、「南無阿弥陀仏」の「念佛（名号）」を称える自身の宗教的実存の時間を「信樂ニ一念有リ。一念ハ斯レ信樂開発ノ時剋ノ極促」(43)すなわち究極の「今（一念）」として感得した。そして、その「今（一念）」に開示される宗教的実存の場所こそが真智<sup>さとり</sup>の境界である「諸智土」(44)いわゆる「淨土」であると説いた。親鸞にとつて「淨土」とは、いわゆる「西方極樂」として固定的・静止的にとらえられる実体的他界ではなかつた。『仏說無量寿經』には確かに、阿弥陀仏の前身である法藏菩薩があまねく衆生を救済せんがために四十八の願をたて、「不可思議兆載永劫」(45)という無限に等しい長い時間をかけてその本願を成就し「淨土」を完成させ、みずからも阿弥陀仏として成仏したという物語が描かれている。だが、親鸞はその神話的記述をそのまま過去の出来事として受けとめず、曇鸞（真宗七祖の第三

祖、四七六一五四二）の「本法藏菩薩ノ四十八願ト、今日ノ阿弥陀如來ノ自在神力トニ依テナリ。願以テ力ヲ成ズ、力以テ願ニ就ク、願徒然ナラズ、力虛設ナラズ、力願相府<sup>カナ</sup>フテ、畢竟ジテ差<sup>タガ</sup>ハズ。故ニ成就ト曰フ」（<sup>モト</sup><sup>4 6</sup>）との教説に依つて、みずから「南無阿弥陀仏」を称える一念一念の「今」に「淨土」の因（生みの意志）である「法藏菩薩ノ四十八願」と果（成る力）である「阿弥陀如來ノ自在神力」を同時に見出したのである（<sup>4 7</sup>）。かかる親鸞の力動的な領解について、大谷派（東本願寺）僧侶で近代真宗学・仏教学の大成者と謳われる曾我量深（一八七五—一九八一）は次のように平易に説明してみせている。

阿弥陀の淨土は、今日なお建設が続いている。これから前途永遠に建設は続いている。「……」阿弥陀如來も生々發展してやまないものであり、淨土もまた生々發展してやまないものである。だから、阿弥陀の本願は、本願が成就したから淨土の仕事は終つたということはない。突込んでいえば、阿弥陀の本願は、成就しているけれども、その成就よりもさらにいつそう深い成就が、永遠に尽未來際まで続いているに違いない。「……」もつと現実の意味をもつて、本願の光の歴史の中にわれわれはおさめとられて、仏と共に修行し、仏と共に淨土の建設に協力させていただく、そういうところに、このお助け、如來の救済の意義がある。（<sup>4 8</sup>）

戦後の言説であるが、文中の「阿弥陀（如來）」および「仏」を「祖国日本」に、「淨土」を「國土」<sup>くにづち</sup>に、「本願」を「国生みの意志」に、それぞれ置き

換えてみればどうか、そのまま三井の「中今／永遠の今」論の一部として通用しそうではないか。

山田孝雄を嚆矢とする明治期以来の一般的な「中今」解釈が、つまるところ人生をいかに意義あらしめるかという道徳的修養論の範疇——「中今」の思想は、現在に立脚して、過去を回顧し将来を達観する。「……」中今的思想を以て、我が身を観れば、我が身体の自己一身のものにあらずして、父母祖先の遺体なることを思念するは必然の事なり」<sup>(49)</sup>、「我々は現に生きてゐるところの我々の現在を愛しなくて、何処に他愛があり得よう。私は私の『今』を真に完成させるべく努力しないで、何処に努力に値するものを見出しえよう」<sup>(50)</sup>——で語られていたのに對し、

高天の原に事始め給ひし昔より無窮の未来に至り給ふその『中なる今』の意にて、特に『中今に至るまで』と宣らせ給ひ『無窮相続』の意を明かにせさせ給ひしと仰がしめらるゝ。<sup>(51)</sup>

あるいは、

中今に現しき神の御稜威を仰ぎつゝあるのが日本精神の神ながらの道である。「……」皇國は變化しつゝある現實の波瀾の中に人生の律動に隨順して天壤無窮神州不滅の確信を実現しつゝあるのである。<sup>(52)</sup>

といった、三井ら原理日本社のそれは、時代社会全体の在りように関するむしろ先驗的なひらめきを感じさせるものであつた。

はたせるかな、こうした言説はやがて、満洲事変の勃発（昭六・九・一八）以来一挙に表面化した国際社会との齟齬のなかで徐々に後退不可能な地点にみずからを追い込んでいく（追い込まれていく）帝国日本の精神的要請に応えるかのように、ひとり歩きを始めていく。昭和一〇年代には哲学者の紀平正美（一八七四—一九四九）をはじめさまざまな分野の専門家によつて変奏を重ねられ<sup>(53)</sup>学界・言論界に「中今ブーム」とでもいうべき現象——「近頃『中今』といふ如き語を耳にするが」<sup>(54)</sup>——を呈せしめ、結果的に、日中戦争（支那事変）の勃発（昭一二・七・七）およびその拡大長期化を経て対米英宣戦布告（昭一六・一二・八）へと至る過程における国民一般の閉塞感と不安——「どこまで続く泥濘ぬかるみぞ」<sup>(55)</sup>——を瞞着し現実に対する盲目的な安心感とそこから先無制限の従属・協力に導く格好の準戦時・戦時体制補完思想として機能した<sup>(56)</sup>のである。

なお、三井の「中今／永遠の今」論に先んじて、大正後期にはやはり右派の安岡正篤（一八九八—一九八三）が、

真の永遠は今に在る。永遠は今の内展 *involution* でなければならぬ。

「……」死の覚悟は永遠の今を愛する心である。「……」かくして現前の生死は永遠の光に照らされる時、忽然として妄執を散じ、たゞ真善美的欣求と為つて輝き、過古現在未來の断見も消えて、一念の今に無量寿無量光を添へる。この自覚を得て、始めて我々の肉体も神聖な存在となるのである。<sup>(57)</sup>

という「永遠の今」論を確立させ、一部の宮中関係者や少壯官僚それに海軍大학교在籍中のエリート将校たちに多大な精神的影響を与えていた（<sup>5 8</sup>）。

同じ「永遠の今（eternal now）」でも、安岡のそれは、禅の思想や西田幾多郎（一八七〇—一九四五）の哲学と同様有限な計数的時間を超えて自在な「今」に生きる、そのような個人の覚悟と主体性の涵養を説いたもので、個を脱却して「中今」に没入することを説いた三井のそれとは全く異質なものであった。そうしたところから、後に三井は、安岡思想の本質を「エゴイズムの窮極するところ臣民としての本分を忘却」した「自己中心　自己神化　自己礼拝の个体主義誤謬思想」と断じて（<sup>5 9</sup>）、激しい筆誅を加えている。

### 三 小結

以上ここまで、政治的文学者・三井甲之の明治後期から昭和戦前期にかけての学問と思想を鳥瞰的に論じた。では、戦後はどうであつたか、最後に簡単にみておきたい。

全てがあるがままに尊くありがたい神聖不可侵の本尊である祖国日本が昭和二〇（一九四五）年八月一五日の無条件降伏から<sup>とつぐに</sup>外国による占領軍政という建国以来未曾有の異常事態を迎へ、政治・社会・文化とあらゆる分野において有無をいわさず強制的に「変改」されていく現実を目の当たりにしても、「日本は滅びず」という三井の学問・思想における根本的確信にはいささかの迷いも疑いも生じなかつた。その文章に、『聖書』の章句からの引用や、デモクラシーへの親近感（<sup>6 0</sup>）など、あからさまに戦後のよそいがみられるとしても、である。

昭和二六（一九五二）年五月頃から翌年一月頃にかけて、病躯をおして執筆された「天皇御歌解説」の諸草稿には次のように述べられている。

吉田松陰「通名寅次郎、一八三〇—一八五九」が「神州不滅」といつた「神州」とは実際には「天朝の御学風」であり、具体的には「和歌」である。「⋮⋮」外形は衰微するかに見えても中核威力は減退せざる光はコトバの光である。ヒロクナリセマクナリツツカミヨヨリタエセヌモノハシキシマノミチである。「⋮⋮」コトノハノミチの和歌に転ずれば、ここに無窮の世界が開かれ無量寿の生命が実感せらるゝ、それは「美し」と感じ、慈しむ心が起る、その時刻の極促即ち一瞬に全身心活動を「断滅」しつゝ「相続」する、そのため三十一字の和歌、また六字の名号「南無祖国日本」を唱へるのである。<sup>(6 1)</sup>

たとえ戦争に敗れ物質的な力を喪い、国土は外形的に「セマク」なろうとも、日本にはまだ「コトバの光」の「威力」すなわち「三十一字の和歌、また六字の名号」が厳として残つてゐる。それで十分ではないか、と。

親鸞聖人の善導大師和讃に

信は願より生ずれば

念佛成仏自然なり

自然はすなはち報土「淨土」なり

和歌の音調と調和するひゞきが味はある。「願」とは仁愛意志である。

「自然」はありのまゝに明鏡裡に投ぜられたる情景である。いつく

しみの意志につながる時ここに報土・極楽が実感せらるゝ。天国は近づけり（馬太伝四ノ一七）といふ情意の振興である。「……」「人間天皇」が御自身で「戦にやぶれし後の、今」「昭二一、御詠中の一節」といはるゝ、これは日本歴史上未曾有の重大事実であることを実感する。それをアツサリさういはるゝ。そして、「敗れし後の今」といふ一語が和歌の奥儀を示す。イマは生間の瞬間で、それが生命の中核である。それが万物生成実存の源泉であり根元である。<sup>(62)</sup>

既にこの頃には耳順を超え老境を迎えていた三井は、苦悩と絶望の果てに縊死（昭二一・一・三〇）を選択した盟友・蓑田胸喜とは異なり、「敗戦」を「敗亡」ではなく、生き残った全ての日本人が「いつくしみの意志」を以て平和の到来を「ありのまゝ」によろこび、生成絶えざる「中今」の世を改めて実感するそのための機縁として、どこか「アツサリ」と穏やかな心境で受け容れていた。その意識の内奥には、最後まで、親鸞と天皇の発する“うた”が作用していたのである。

昭和二八（一九五三）年四月三日、三井甲之は満六十九歳で没した。

#### 注

- (1) 三井甲之「人生と表現社宣言」（大一二・一二 脱稿）・『しきしまのみち原論』（原理日本社、昭九・一〇）一三五頁。
- (2) 三井前掲「人生と表現社宣言」一三五・一三九頁。
- (3) 三井甲之『明治天皇御集研究』（東京堂、昭三・五）二、一五頁。同前掲『しきしまのみち原論』一九、二三頁。

(4) 三井甲之「親鸞聖人の阿弥陀觀」(『人生と表現』大三・三)・『親鸞研究』(東京堂、昭一八・二)二八〇頁。

(5) 例えば、「抑意いのたいと事と言とは、みな相称あいせうへる物」とする言事相称(相即)觀がそれである。本居宣長『古事記伝 古記典等總論』・『日本の思想 一五／本居宣長集』(筑摩書房、昭四四・三)二〇六頁、ルビ引用者。

(6) 芳賀矢一「万葉集を經典とせよ」(『心の花』大六・一一)二頁。

(7) 親鸞『顯淨土真實行文類 二』・『真宗聖教全書 宗祖部』(大八木興文堂、昭一六・一一)二二頁、原漢文訓み下し。

(8) 三井甲之「日蓮と親鸞」(『日本及日本人』大三・九・一)・前掲『親鸞研究』一八四頁。親鸞は、當時歌道の主流であつた新古今調の技巧を凝らした和歌を「綺語」(飾り立てた言葉)とみなし、退けていた。こうしたところも、万葉調を好み、文学全般における「真」を重んじた三井と通じてゐる。寺川俊昭『親鸞聖人の信念——野に立つ仏者——』(法藏館、平一七・六)四二頁。

(9) 亀井勝一郎『親鸞』(新潮社、昭一九・二)一八一頁。豊田国夫『日本人の言靈思想』(講談社、昭五五・五)一七〇・一七三頁。因みに三井は、親鸞の「ゐなかの人々の、文字のこゝろもしらず、あさましき愚痴きはまりなきゆへに、やすくこゝろえさせんとて、おなじことをたびくとりかへしくかきつけたり」という言説を挙げて、その「教化上の自由平等化精神」に近代に先立つ「國語の統一」への志向を認めてゐる。親鸞『唯信鈔文意』・前掲『真宗聖教全書 宗祖部』六三八頁。三井甲之「歌壇の復古的傾向の現在及将来」(『短歌雑誌』大七・一)五頁。

(10) 三井前掲『しきしまのみち原論』二、五三頁。

(11) 三井はこの「しきしまのみち(ことのはのみち)」を「日本精神科学」あるいは「日本論理学」とも称した。「科学」と「論理」はいかにも「国学」と相性が悪いようにみえるが、三井においては、前者はヴァントの心理学(精神科学)に多くを依拠して構築したという意味で、後者は西欧起源の機械的論理ではなく日本固有の民族的論理に沿つて構築したという意味で、いずれも新しい「国学」としての異称なのである。

(12) 同会について詳細は、塩出環「三井甲之と原理日本社の大衆組織——『しきしまのみち会』の場合——」(『古家實三日記研究』平一七・五)、横川翔「松田福松の足跡——三井甲之とその同志たちの一側面——」(『國學院雜誌』平二八・九)等を参照。なお三井に関する言及はないが、天皇「御製」が戦前日本社会に果たした精神的役割については、松澤俊二『「よむ」ことの近代——和歌・短歌の政治学』(青弓社、平二六・一二)が詳しい。

(13) 石川巧『「国語」入試の近現代史』(講談社、平二〇・一)一一二、一三頁。永江朗『東大V S京大入試文芸頂上決戦』(原書房、平二九・一)五九、六〇頁。

(14) 三井甲之『手のひら療治』(アルス、昭五・三)二六〇頁。

(15) 原理日本社「宣言」(『原理日本』大一四・一一)一頁。

(16) 三井甲之「親鸞の信者に」(『日本及日本人』大三・六・一)・前掲『親鸞研究』二七二頁。

(17) 「ヒツトラー・ムツソリーニ二偉人」の思想と行動については一貫して英雄的憧憬の念を隠さなかつた三井ら原理日本社であつたが、「少くも三千年以前」から皇祖皇宗の発する「神勅詔勅」に「祖国永久生命意志」を仰いで来た日本人には独伊のように近代個人主義——「デモクラシイ民主政」の行きづまりから立ち現れる「独裁者の『演説』」は必要でない、すなわち「天皇親政の原理はナチス的『指導者原理』を許さず」と考えていた。三井甲之「流行ファッショ運動の危険性」(『大日』昭七・六)一三頁。同『天皇親政論』(原理日本社、昭一二・一)一六、二二頁。蓑田胸喜『昭和研究会の言語魔術』新体制に搖躑する思想的妖雲を掃滅す』(原理日本社、昭一五・九)一七頁。三井甲之『臨戦無畏怖の帰属意志』(『皇紀二六〇〇年新体制の要求するところのもの』)(原理日本社、昭一五・九)七頁。同「おくがき」(『和歌維新』和歌技術の書)原理日本社、昭一七・三)五五一頁。同「はしがき」(前掲『親鸞研究』)三頁。

(18) 宮本盛太郎「蓑田胸喜と滝川事件」(『政治經濟史学』平九・四)、塩出環「帝大肅正運動と原理日本社」(『日本文化論年報』平一三・三)、松本常彦「ア

カデミズムと弾圧——その概況と滝川事件——」（『国文学』平一四・七）、塩出環「蓑田胸喜と原理日本社」（『国際文化学』平一五・九）、竹内洋『丸山眞男の時代——大学・知識人・ジャーナリズム——』（中央公論新社、平一七・一）、立花隆『天皇と東大下——大日本帝国の生と死——』（文藝春秋、平一七・一）、竹内洋「帝大肃正運動の誕生・猛攻・蹉跌」（同他編『日本主義的教養の時代——大學批判の古層——』柏書房、平一八・二）、植村和秀『「日本」への問いをめぐる闘争——京都学派と原理日本社——』（柏書房、平一九・一）、井上義和『日本主義と東京大学——昭和期学生思想運動の系譜——』（柏書房、平一〇・七）、植村和秀『昭和の思想』（講談社、平二二・一）、将棋面貴巳『言論抑圧——矢内原事件の構図——』（中央公論新社、平二六・九）等を参照。

(19) 佐藤卓己『天下無敵のメディア人間——喧嘩ジャーナリスト・野依秀市——』（新潮社、平二四・四）一一〇四頁。

(20) 三井前掲『明治天皇御集研究』五六頁。

(21) フィヒテ「ドイツ国民に告ぐ（*Reden an die deutsche Nation, 1808*）」：三井前掲『明治天皇御集研究』六七頁。

(22) 安田敏朗『帝国日本の言語編成』（世織書房、平九・一一）一一九五～一九八頁を参照。

(23) 三井前掲『手のひら療治』一一一～一四頁。

(24) 以下の文献中の記述を参照。米田利昭「抒情的ナショナリズムの自壊と復活——三井甲之（一）——」（『文学』昭三六・一）、片山杜秀「写生・隨順・抨誦——三井甲之の思想圈——」（前掲『日本主義的教養の時代』）、同『近代日本の右翼思想』（講談社、平一九・九）、塚田穂高「靈術と國家觀——三井甲之の手のひら療治——』（『宗教研究 第八八卷別冊』平二七・三）、前川理子『近代日本の宗教論と国家——宗教学の思想と国民教育の交錯——』（東京大学出版会、平二七・四）等。

(25) 三井前掲『手のひら療治』一六七頁。

(26) 昭和五（一九三〇）年六月には、「しきしまのみち会」の姉妹団体となる「たなすゑのみち会」を立ち上げている。

(27) 三井前掲『手のひら療治』二一九、二四五、二四六、二六三頁、ルビ引用者。

(28) 橋川文三「昭和超国家主義の諸相」（『近代日本思想体系 三一／超国家主義』筑摩書房、昭三九・一一）・『昭和ナショナリズムの諸相』（名古屋大学出版会、平六・六）五四頁。なお北一輝は、三井とは逆に徹底した言語実用（道具）論者であり、合理的で学習に簡便な国際語<sup>エスペラント</sup>を帝国の第二国語に採用し、言語文字として「甚タシク劣悪」で「不便」な日本語は遠からず自然淘汰に導くべしとする、脱、日本語の帝国をプランニングしている。北一輝『国家改造案原理大綱』（大八、謄写版）・『北一輝著作集 第二巻』（みすず書房、昭三四・七）二五一・二五三頁。

(29) 三井前掲『手のひら療治』「序」三、四頁。三井甲之『手のひら療治入門』

（アルス、昭五・八）五七、六〇、一五九頁。

(30) 三井甲之「見えざる武器・言語——神代・祝詞の時代再来せむとす——」（『原理日本』昭一九・一）四、五頁。

(31) 三井甲之「親鸞聖人の信と生の動乱」（『人生と表現』大三・九）・前掲『親鸞研究』二六六頁。

(32) 丸山眞男「歴史意識の『古層』」（『日本の思想第六／歴史思想集』筑摩書房、昭四七・一一）・『丸山眞男集 第十巻』（岩波書店、平八・六）五五頁。

(33) 以下の文献中の記述も参照。片山素（杜）秀「日本ファシズム期の時間意識——『中今』を手がかりに——」（『法学政治学論究』平二・一二）、片山前掲『近代日本の右翼思想』、昆野伸幸『近代日本の国体論——「皇国史觀」再考——』（ペりかん社、平二〇・一）、中島岳志「日本右翼再考——その思想と系譜をめぐつて——」（『思想地図』平二〇・四）、島薦進・中島岳志『愛国と信仰の構造——全体主義はよみがえるのか——』（集英社、平二八・二）等。

(34) 第一高等学校国文学科編『高等国文 卷八』（吉川半七、明二九・五）三二頁、三井前掲『しきしまのみち原論』三四頁、原漢文訓み下し。

(35) 西田幾多郎「学問的方法」（『教学叢書 第二輯』教学局、昭一三・二）一〇、一一頁。

- (36) 本居宣長『続紀歴朝詔詞解』..三井前掲『しきしまのみち原論』三四頁。
- (37) 山田孝雄『大日本国体概論』(宝文館、明四三・一二)六一頁。

- (38) 三井前掲『しきしまのみち原論』三三・三五、三七頁。
- (39) 鹿持雅澄『万葉集古義』..三井前掲『しきしまのみち原論』四四頁。

- (40) 三井前掲『しきしまのみち原論』三九頁。
- (41) 三井前掲『明治天皇御集研究』八九、九〇頁。

- (42) 三井前掲『しきしまのみち原論』三九頁。
- (43) 親鸞『顕淨土真実信文類三』..前掲『真宗聖教全書 宗祖部』七一頁、原漢文訓み下し。

- (44) 『大寶積經／無量壽經』(親鸞『顕淨土真実信文類三』所用)..前掲『真宗聖教全書 宗祖部』一四一頁。

- (45) 『仏說無量壽經 卷上』(親鸞『顕淨土真実信文類三』所用)..前掲『真宗聖教全書 宗祖部』六〇頁。

- (46) 曇鸞『無量壽經優婆提舍願生偈註 卷下』(親鸞『顕淨土真仏土文類五』所引)..前掲『真宗聖教全書 宗祖部』一三五頁、原漢文訓み下し。

- (47) 三明智彰『誓願酬報』(『大谷學報』平五・五)一五・一七頁。安田理深『親鸞における時の問題歴史』(彌生書房、平一〇・六)五〇、五一、八九、九〇、一〇八、一〇九頁。

- (48) 曾我量深『愚禿親鸞』(『大法輪』昭三二・三)..『曾我量深講義集 第十一卷』(彌生書房、昭六一・三)一六九、一七〇頁、傍線引用者。

- (49) 山田前掲『大日本国体概論』六五、六九頁。

- (50) 鹿児島県女子師範学校・同県立第二高等女学校編・発行『國民精神とその涵養に関する研究 前篇 理論的研究』(昭九・三)一六頁。

- (51) 松田福松「『中今』といふについて」(『原理日本』昭一〇・五)四七頁。

- (52) 三井甲之「国文学界の臣道遺忘 佐々木信綱の作歌及び佐々木信綱、島崎藤村氏等選の愛国行進歌詞を評す」(『日本刀及日本趣味』昭一三・二)四七頁、ルビ引用者。

(53) 以下の文献中の論述を参照。紀平正美『国民精神文化研究 第二十五冊／自証過程としての歴史（日本歴史の本質）』（国民精神文化研究所、昭一二・三）、大久保勇市『教科課程の革新 実学陶冶実践体系』（政経書院、昭一二・一）、鴻巣盛廣『日本精神叢書 第三十七／万葉精神』（教学局、昭一三・六）、山田孝雄『肇國の精神』（内閣印刷局、昭一三・八）、中野八十八『転換期の新教育と戦勝国民の実践哲学』（目黒書店、昭一四・一）、河野省三「中今の紀元二千六百年」（『日本及日本人』昭一五・二）、高階順治『日本精神の根本問題』（第一書房、昭一五・一〇）、山田孝雄『国史に現れた日本精神』（朝日新聞社、昭一六・三）、藤戸正二『日本神髓』（平凡社、昭一六・六）等。

(54) 西田前掲「学問的方法」一〇頁。

(55) 八木沼丈夫作詞・藤原義江作曲「討匪行」（昭七）、ルビ引用者。

(56) 例えば、原理日本社の中核メンバーの一人であつた蓑田胸喜は、開戦直後の日本軍の快進撃を、

あゝ

十二月八日、

二月十五日、「シンガポール要塞陥落の日」

あゝ

悠遠の神話と  
歴史の蓄積、

その爆発する威力よ！

その日は一日にあらず、

中今の中日の一日ぞ！ 「……」

という祝詞にあらわしている。蓑田「祝詞 中今」（『原理日本』昭一七・三）五頁。

(57) 安岡正篤『日本精神の研究』（玄黄社、大一三・三）三五三、三五四、三五

(58) 木下宏一「日本海軍の短期決戦主義に関する一考察——安岡正篤と『永遠の今』——」(『時間学研究』平二六・一一)を参照。

(59) 三井甲之『国維会』指導精神の国体反逆性を指摘す||安岡正篤氏の思想素質を分析して岡田内閣政綱の国体觀に論及す||『国策原理の確立を要す——軍縮比率撤廃、国家的自尊心の背後に横はるもの——』原理 日本社、昭九・九)二八頁。

(60) 例えば、昭和二三(一九四八)年一二月三日付の書簡には「こゝに米英のデモクラシーを『与衆相弁』の聖徳太子の以和為貴のセイシンに結合せしめて東西洋の文明を統一し、「……」とある。三井甲之「三井甲之先生書簡鈔」——富山師範、大分大学に在職の田中米喜氏にあてて——(『アカネ』復刊版、昭六三・一二)一八頁。こうした言説を、占領軍の検閲をおもんばかりの一時的な「偽装」とみるか、新たな時代への「適応」とみるか、はたまた「転向」「変節」とみるかは、論者によつて見解の分かれることである。いずれにしても、普遍宗教としての仏教の本来性を色濃く受け継ぐ親鸞—浄土真宗の思想でさえ自身の体質に合わせて内在化(国学化)してしまう三井の思考回路である。デモクラシもまた古代日本のまつりごとにおいて本来の意味で正しく実践されていたのであり元々こちらが元祖である、などと論じる——「デモクラシイもしきしまのみち化しませう」——くらい朝飯前であつたろう。三井甲之「昭二五・一〇・二付／宮崎五郎宛書簡」・宮崎五郎編『三井甲之書翰集無限生成』(しきしまのみち会、昭三二・八)一三三頁。昆野前掲『近代日本の国体論』の「第三部／第三章 三井甲之の戦後」を参照。

(61) 三井甲之『今上天皇御歌解説 附・万葉集論』(斑鳩会、昭四二・四)一七、二二、二三頁。

(62) 三井前掲『今上天皇御歌解説 附・万葉集論』一三、一四、二四頁。

## 付章 久松潛一の学問と思想

### 一 久松潛一と「新国学の四大人」

昭和一六（一九四一）年一二月八日、大日本帝国は、米英両国に宣戦を布告し、ここにおよそ三年八ヶ月の長きにわたる太平洋戦争／大東亜戦争が開始された。おりしも同月、東京帝国大学文学部国文学科教授で当時名実ともに日本の国文学界の第一人者と目されていた久松潛一（一八九四—一九七六）は、「日本学問の伝統と国学」（『文芸世紀』昭一六・一二・一発行）と題した巻頭論文<sup>(1)</sup>のなかで、

国学に対する自覚が近時力強く起つて居る。かういふ国学が今日に於て要望せられる意義は日本精神と学問との一体化であるといふことが言へる。「……」国学といふ名称を用ゐるかどうかは別としても、このやうな自主的な学問の確立こそ、今日の日本の学問の上に極めて必要とされるのである。<sup>(2)</sup>

と述べ、年来の持論である「国文学に於ける国学への志向」<sup>(3)</sup>すなわち「国文学の母胎である国学精神を現代に於て新しく見直しそれを国文学の上に新しく生かさう」<sup>(4)</sup>とする「新国学の創造」<sup>(5)</sup>の必要性を改めて強調した。そしてその上で、

即ち今日の国学に於て先づ求められるのは日本の学問の伝統を顧み、

日本的学問の系譜を跡づけることであるのである。「……」宣長「本居、一七三〇—一八〇一」が古事記の研究に一生涯をかけたこと、また契沖「一六四〇—一七〇一」、春満「荷田、一六六九—一七三六」、眞淵「賀茂、一六九七—一七六九」、雅澄「鹿持、一七九一—一八五八」等が万葉集の研究に力をそゝいだことは国学の源流をよく示して居るのである。「……」芳賀矢一「一八六七—一九二七」博士がかういふ国学の伝統にたつて日本を主体とする学問を確立されたことは言ふまでもない。「……」さうして芳賀博士の学問の伝統は今日に至るまで貫いて居るのであるが、垣内松三「一八七八—一九五二」氏の学問精神や三井甲之「本名甲之助、一八八三—一九五三」氏、沼波瓊音「本名武夫、一八七七—一九二七」氏の学問精神の中にもかういふ伝統はうけつがれて居るであらう。(6)

と明確な系譜をあらわし、最後に、

この伝統の上にこそ真に自主的な日本学問が確立されるであらう。これこそ今日に於て国学の起つて来た大きな意義であると信ずる。(7)

と論断したのである。

かねて東京帝国大学文学部に三個開設されていた国語学国文学講座のうち、第一講座担任（昭五・四〇）の橋本進吉（一八八二—一九四五）は文法研究を専門とする純然たる国語学者であり、第二講座担任は藤村作（一八七五—一九五三）の退官（昭一一・三）以来空席となっていた。したがつ

てこの時期、官学アカデミズムにおける国文学全体のグランドデザインは、事実上、第三講座担任（昭一二・五）である久松一人の意思に委ねられていたといつてよい。その久松によつて今まさに時代が求める「真に自主的な日本学問」の先駆者に数えられたのが、芳賀矢一、垣内松三、沼波瓊音、三井甲之の四名であつた。さながら、久松潛一撰「新国学の四大人」といつたところである。

周知の通り「国学四大人」とは国学先駆者の一人・契沖の弟子筋に連なる荷田春滿、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤（一七七六—一八四三）の四名を指し、近世国学の正統な系譜を端的に印象化する術語として「明治十年代後半」に「平田派学統、伝統派国学者間」の口にのぼり、一般に流布したとされる<sup>(8)</sup>。久松もまた「現代に於ける新国学の主なる提唱者」<sup>(9)</sup>としてその顰に倣つたと考えるのも穿ち過ぎではないだろう。

この「新国学の四大人」のうち、芳賀矢一（当時既に故人）と垣内松三については、久松自身東京帝国大学文科大学文学科在学中（国文学専修、大五・九・大八・七）に直接指導を受けた恩師であり、ともに学界の声望高かつた人物である。これまで何度も確認したように、日本の国文学者として初めて西欧（ドイツ）留学を経験した芳賀が、帰国後「西洋学者はフイロロギーと称して、文献を本にして、其国を研究します。日本で言へば、国語国文を本にして、其の国を研究するのです。国学者が二百年来やつて来た事は、つまり日本のフイロロギーであつた」<sup>(10)</sup>という見識のもと近世の国学を「日本文献学」として近代的にブラッシュアップしたことは、後続の世代で国語学・国文学を専修する者にとっては自明の常識であった。また垣内は、久松による「新国学」の提唱と軌を一にして「国民言語

文化（日本言語文化）学」を提唱し、従来からの「国語学、国文学、国語問題、国語教育の全領域を纏め」<sup>(1-1)</sup>て、言語（国語／日本語）によつて構築された日本の国民文化を統一的に把握・研究すべしという主張を発信していた。久松が親近感を覚えていた——「国民言語文化の体系は、言語的表現である文献によつて国民文化を理解しようとする国民文献学の立場であり、進んで国学の立場でもあるのである」<sup>(1-2)</sup>——のも無理からぬことである。

だが、沼波瓊音（当時既に故人）と三井甲之については、久松にとつて帝大國文の先輩に当たるとはいえ、ともに文学者（学者、評論家）らしからぬ逸脱軌道が目立ち、前者は、専門の俳諧・俳句研究よりもむしろ晩年の狂熱的な國家革新運動への取り組みによつて知られ、後者に至つては、日本主義の歌人・思想家として長年右派論壇の一翼を担い、リアルタイムで帝大肅正運動（欧米的学風批判、大学自治の否定）を推し進めていた、学界「札付き」<sup>(1-3)</sup>の人物であった。かかる両名が、たとえ一論文<sup>(1-4)</sup>中にせよ官学アカデミズムの一領域に厳然たる「権威」性<sup>(1-5)</sup>を有する者の手で自分たちが継承すべき正しい学問研究の系譜に公然と位置付けられた事実は、戦前の国文学と今現にわれわれが関与している戦後の日本文學の連續性あるいは断絶性を文脈化する上で一度はきちんと検討しておかなければならぬ問題である、と考える。

国文学者・久松潛一の戦前期の学問と思想については、安田敏朗の先駆的研究書『国文学の時空——久松潛一と日本文化論——』（三元社、平一四・四）を筆頭にこれまで幾人かの研究者が論じている<sup>(1-6)</sup>が、上記の事柄に着目した論考は未だ存在しない。本章では、冒頭に引用した言説を、対米

開戦が「絶対確実な既定の事実」<sup>(17)</sup>として閉塞した現状を開拓し得る唯一の可能性であるかのごとく受け止められていた昭和一六（一九四一）年当時の日本社会に在つて緊張・高揚した心理状態のなかからおのずと流露した久松自身の偽りなき真情<sup>(18)</sup>と仮定し、そこに示された「新国学の四大人」就中沼波と三井の両名が久松の学問・思想形成に各々どのようなかたちで影響を及ぼしていたのかについて考察する。

## 二 久松潛一と沼波瓊音

まず沼波瓊音であるが、久松潛一との直接的な接点は大正中・後期に遡る。元々沼波と久松は同郷（旧尾張藩領）であり、ともに愛知一中（愛知県尋常中学校／愛知県立第一中学校）の卒業生でもあった。また久松は、沼波の実弟でやはり国文学者の守（一八九三—一九七〇）とは大学同期の朋友で、そうした関係から兄である瓊音とも早くから親交はあつたという<sup>(19)</sup>。

大正八（一九一九）年七月に東京帝国大学文学部国文学科を卒業した久松は、大学院を経て、大正一一（一九二二）年四月に同帝大文学部の講師となり、大正一三（一九二四）年九月には助教授に昇任している<sup>(20)</sup>。文字通りのエリート・コースである。一方、明治三四（一九〇一）年七月に東京帝国大学文科大学国文学科を卒業した沼波は、中学校教師や新聞記者などさまざまな職を経たのち大正一〇（一九二一）年四月に帝大文学部と第一高等学校の講師となり官学アカデミズムの圏域に復帰している<sup>(21)</sup>。久松と沼波は、後者が大正一五（一九二六）年三月に講師を辞任するまでのおよそ四年間、同じ帝大の「放談快笑式、愉快なクラブ式の国文学研究

室」<sup>(22)</sup>に近く席を並べていたのである。

とはいえ、彼らの国文学研究・講義のスタイルは対照的で、久松のそれが、芳賀矢一や上田萬年（一八六七—一九三七）に倣つてどこまでも「生真面目一方」<sup>(23)</sup>に文献学の手続き（資料の蒐集・考証）をふみ「具体的、実証的であつてしまつても全體的の体系や組織を考へ」<sup>(24)</sup>てまとめていくという堅実なものであったのに対し、元から性格的に形式論理や「分析の大嫌い」<sup>(25)</sup>な沼波のそれは、もっぱら自身の感性と直観的洞察に拠つて論を進めていくという型破りなものであった。

そればかりではない、沼波は、大正期に入つていささか「保守停滞」<sup>(26)</sup>の氣味であった帝大國文に外部から極端なナショナリズムの種子も持ち込んで來ていた。大正中期（第一次世界大戦終結前後）に、国内思潮の急激な変動（マルクス・共産主義、<sup>デモクラシ</sup>民主・民本主義、無政府主義等の影響力拡大）の只中で急激に右傾化した沼波は、北一輝（本名輝次郎、一八八三—一九三七）、大川周明（一八八六—一九五七）、満川亀太郎（一八八八—一九三六）らの思想結社「猶存社」<sup>(27)</sup>（大八・八・結成）を皮切りにさまざまなり派団体に関与していた。大正一三（一九二四）年には、関東大震災（一二・九・一）や虎ノ門・摄政宮裕仁皇太子狙撃事件（大一二・一二・二七）によつて荒廃・弛緩した人心を立て直し日本人としてより強い自覺と團結を促すべく「日本精神の闡明、新国学の建設」<sup>(28)</sup>に率先取り組むことを周囲に宣言し、翌年四月からは、国文学研究室の主任教授で大学同期の友人でもあつた藤村作のはからいでそれまでの「俳諧史」に加えて「日本精神ト国文学」と題する無単位の自由講義を毎週二時間、一年間にわかつて開講<sup>(29)</sup>する。満洲事変の勃発した昭和六（一九三一）年前後から

にわかに顯著となる「日本精神」論の流行<sup>(29)</sup>に先んじたその内容は、「國家は、完成した社会なりと云はれてゐる。國家といふ社会には一の社会精神あり。これを国家精神或は国家心と云ふべし。——わが日本精神と云ふもこれなり」<sup>(30)</sup>と定義した上で、その「日本精神」の端的な表象を、上古は『古事記』等に描かれた神々の語りや、近世は松尾芭蕉（一六四四—一六九四）、各務支考（一六六五一七三一）、上島鬼貫（一六六一—一七三八）らの句作・文章など国文学の各種テクストからランダムによみ取つていかんとするものであつた。

こうした「右」の熱量あふれる沼波の学内での数々の言動<sup>(31)</sup>は、元々愛知県知多郡藤江村（現東浦町）の旧家に生まれ伝統を尊び至誠を重んじる家風<sup>(32)</sup>のなかで育ち長じては真性の国文学エリートとして純粹培養された青年久松の意識にもおのずと何らかの化学反応をもたらさずにはおかなかつたであろう。

何より、「まことの外に俳諧なしと、おもひもうけ」<sup>(33)</sup>た鬼貫の態度をかねて「推重」<sup>(34)</sup>していた沼波が、この時期の論著や講義、談話等のなかで「まこと」の意義を改めて反復強調し、一時代固有の俳諧理念として以上に「千古を一貫したもの」<sup>(35)</sup>と普遍的に価値付けてみせたことは、おりしも大正一三（一九二四）年頃から、

流動もしくは展開といふ言葉は、今の私どもにとつて極めて意味深くまた力強く響く言葉である。流動し展開する事が生命それ自身を現して居る様に思はれる。「……」この展開のあとを真につかまうとする時、文学研究も単なる外形的研究では満足されなくなる。文学の展開

はその内面性である人性の展開を跡づけることによつて理解せられるからである。その意味に於いて初めて生命の文学が作られ、眞の意味の文学史が構成せられるであらう。<sup>(36)</sup>

と考え、「外形的研究」にとどまつていた従来の文学史<sup>(37)</sup>の叙述を超えて「内面性である人性の展開を跡づ」けることで文学そのものを生み出す理念（研究）の動的展開をえがきだす「日本文学評論史」の構想に取りかかっていた久松<sup>(38)</sup>に、重要なインスピレーションを与えたと推察される。

芸術と道徳と、その流れ出るものとの泉は、一つで無くてはならぬ。「……」一つの泉から出る芸術と道徳とは正しい。その一つの泉が鬼貫の所謂「まこと」である。道徳は千古一貫のもので、旧道徳とか新道徳とか云ふものは無い。そんな名を附けねばならぬものは道徳では無い。「……」たゞ其の時、其の事に就ての「まこと」を行ふ、それが日常の道徳である。たゞ其時其事にあたつて「まこと」を歌ふ、それが俳諧である。<sup>(39)</sup>

このように沼波が敷衍した鬼貫の「まこと」について、久松は、論文「国文学を流れる三の精神」（『觀想』大一五・一〇）のなかで初めて具体的に論及している。該論文は、久松がそれ以前にものした厳密な時代区分やテクストクリティーカに裏付けられた諸論著<sup>(40)</sup>とは趣が異なり、国文学全体をとらえた彼自身の直観的・総合的洞察がストレートにあらわれているという点でも特徴的である。

万葉集に見える個人的精神は、前の神や国家を中心とした古事記に見える国家的精神とともに上古文学精神の重要な二の内容となつて居るが、何れも素樸な真実なまことの精神が中心となつて居ると思ふ。「……」この精神はまた俳諧に於ける鬼貫の立場にも現れて居る。「……」それはけがれなき、道徳をも超越した精神であるが故に、眞の意味の道徳的精神と一致するとと思ふ。「……」それは文化の展開、文学の発達の窮屈ではないにしても、文学や文化の展開に於ける最初の厳肅なる第一歩である。このまことの精神が常に力強い雄々しいますらをぶりの精神となつて国文学の流れの中に持続的に流れて居ると思ふのである。「……」まこととものゝあはれと幽玄とは一見異なつた理念のやうで而も本質的な相違ではなく、展開のそれゝの過程であると思はれる。「……」而して是等の展開流動する精神を統一したもの、そこに国文学の本質を見出されはしないかと思ふ。「……」而してこの精神が原始時代から絶えず流れて來たやうに思はれる。まことからもののあはれとなり、幽玄となる、而してその窮屈した境地が陳套に陥つてくる時、またまことの精神がよみがへつて新生となり、更に持続的に展開するのである。(41)

久松は、国文学徒として自身が最初の研究対象に選んだ契沖が『万葉代匠記 初稿本卷之三』等で強調した「なさけ」や本居宣長が『紫文要領』『源氏物語玉の小櫛』等で高唱し近代になつて和辻哲郎（一八八九—一九六〇）が再評価<sup>(42)</sup>した「物の哀れ」など受動的な「はかなくやさしき

感情」<sup>(43)</sup>の意義は認識しつつも、「文学の展開」を一つの有機的な生命現象——「生命の文学」としてとらえる上では、現実に「行為の世界へと展開してゆ」<sup>(44)</sup>く能動性をはらんだ「素樸」で「力強」い「まことの精神」の方が国文学否文学を含めた日本人のあらゆる文化的営みの本質とみるに相応しいと判断したのであつた<sup>(45)</sup>。それはまた、朱子学における「誠／至誠」——「誠ハ天ノ道也。之ヲ誠ニスルハ人ノ道也。【：：】之ヲ誠ニスルハ善ヲ择ビテ固ク之ヲ執ル者也」<sup>(46)</sup>——とも異なる日本固有の精神価値、儒教道徳の範疇を「超越」した「眞の意味の道徳的精祌」である<sup>(47)</sup>、とも。往時久松に親しく指導を受けた者は次のように論じている。

事象を見るに一元的綜合的であり、行動において遠慮もはにかみもなく考えたままに純一に進む、表現においても既得の観念にとらわれず直觀的具象的にこれをあらわす、そうした精神の在り方を「まこと」として尊重せられた。日本精神の形式における最も根柢的なものとして「まこと」が第一にあげられたのであり、「もののあはれ」もこの「まこと」の情趣化せられたものとして把握される。こうした「まこと」の規定は、先生「久松」の人生においてもひとつの指標とされたものであつたに違ひない。<sup>(48)</sup>

かよう明快な国学的見識を核心部にすえ、久松は、みずからのライフワークとなる「日本文学評論史」をまとめていく<sup>(49)</sup>のである。

因みに久松の「国文学を流れる三つの精神」からやや遅れて、彼と同年

代の国史学者・平泉澄（一八九五—一九八四）も「国史学の骨髄」（『史学雑誌』昭二・八）なる論文を発表し、いかに「厳かなる科学的歴史の仮面を被」つていようと「復活せざる屍骸を羅列」し「精神的連鎖」を欠如した研究方法は無意義であるとして、特定の時代区分に従つて客観的考証を積み重ねるだけではなく「日本精神の深遠なる相嗣、無窮の開展」を現在から統一的に回顧する必要性を力説し、史料第一主義をむねとして來た明治期以来の官立アカデミズムの国史学に一石を投じてゐる<sup>(50)</sup>。

久松と平泉、同じ帝大文学部の若手教官として以外両者に直接的な関係性は認められないが、近世の「国学」より分科した近代の「国文学」と「国史学」（<sup>51</sup>）のなかから、ほぼ同時期に同質の主張があらわれた事実は興味深い。

### 三 国文学から国学への志向

さて、昭和二（一九二七）年七月一九日、未だ途半ばの「日本精神の闡明、新国学の建設」におもいを残して、沼波瓊音は満四十九歳で病没した。あたかもそれを受けたかのように、久松潛一は「国家的精神の考察」なる論文を執筆（八月中脱稿）し、沼波追悼特集の組まれた『国語と国文学』十月特別号／日本精神研究』に発表した。その結びは彼の学問における事實上の「新国学」継承宣言とよめるものであつた。

日本を知らうとする精神、日本を愛するが故に、日本を知らうとする精神は、確乎として存在すべきである。この精神によつて統一される所、如何に対象は複雑になり、学的研究の方面は分化されても、そこに国学は存在する筈である。近世の国学はこの国家を中心とする精神

を中心にして居つた故に、常に熱と力を有して居つたのである。

その意味に於て今日行はれるべき日本研究、新しき国学も近世の国学の基礎の上に立ち、その精神を十分理解した上でなされるべきであると思ふのである。<sup>(52)</sup>

これ以降、久松の学的嘗為は、従来通りの実証的な国文学研究を継続しつつも、徐々に国文学から新たな国学、「新国学」<sup>(53)</sup>の創造へと軸足を移し始める。昭和七（一九三二）年八月からは「我ガ國現下ノ思想問題ノ情勢ニ鑑ミ「⋮⋮」我ガ國独自ノ國体觀念、國民理想ニ關スル學理的研究ヲナシ又外来思想特ニマルキシズムノ批判的研究ヲ行ヒ併セテ其ノ成果ヲ種々ノ方法ニ依リテ広ク國民ノ間ニ徹底セシムル」<sup>(54)</sup>ことなどを目的に新設された「國民精神文化研究所」の所員を兼任し、國民教化というより政治的な次元から「國文學／新國學」の學知を「國家ノ須用」（「帝國大學令」明一九・三・二公布、第一条）に活かすべく更なる言説研磨をはかつていく<sup>(55)</sup>。昭和一二（一九三七）年には『上代民族文学とその学史』（大明堂書店、昭九・七）と『万葉集に現れたる日本精神』（至文堂、昭一二・一）の二著が「思想問題に關し穩健中正なる思想の涵養上、又は学生生徒の指導訓育上参考となるべき良書」<sup>(56)</sup>として文部省教學局の選奨（推薦・紹介・選定）を受けている。それらの過程で前述の「まこと」もまた、

たゞ写実的にものを見、表現する意味のみでなく、広い意味の道徳性を含んで居るやうに思はれる。眞実といふことはたゞあるがままといふことではなく、正しいといふ意味を含んでくる。正しいといふこと

は結局事実そのまゝといふことであるが、それが自ら善といふことと一致してくるのである。<sup>(57)</sup>

と「正」「善」という倫理的側面が強調され、やがては、かくて真善美一致の「まこと」の精神と、敬神忠君愛国の完全なる一致、忠孝一本の精神とが更に完全に統一されて居る所に日本民族精神が存するのである。「…」さうして日本民族の藝術觀は常に事実の美化、真実化であり、現実の理想化であるのであり、そこに国文学は民族の理想の表現といふことになるのである。<sup>(58)</sup>

とまで論断されていくのである。いわく、国文学とは畢竟「真善美」という本來的な徳目を總摂する「まこと」と「敬神忠君愛国」という日本人独特の規範的な徳目が「完全に統一」された「日本民族精神」（日本精神）において「現実」を「事実そのまゝ」に「美化、真実化」する高次の嘗為、「民族の理想の表現」に他ならないのだ、と<sup>(59)</sup>。

おりしも、伝統的価値觀を斥けマルクス・共産主義およびその國際本部たるコミニテルンの發する綱領を無謬の道德的教條<sup>(60)</sup>と定めていた左傾（赤化）知識人の折伏に頭を悩まし、一方では満洲事変の勃発（昭六・九・一八）を機に次々と勢いなりゆく現実——満洲國建国（昭七・三・一）、國際連盟脱退表明（昭八・三・二七）、日中戦争／支那事変の勃発（昭一二・七・七）とその拡大長期化、対米関係の急速な悪化等々——を「事実そのまま」に「美化、真実化」「理想化」してくれる「阿片」を渴望していた、

昭和初年代後半から一〇年代前半にかけて<sup>(61)</sup>の帝国日本。そのような国家の精神的状況のなかで、

日本文学研究の重要な目的は日本精神・民族的精神を明らかにすることであると思つて居る。「……」文学的形象に即して日本精神を理解することを私は求める。<sup>(62)</sup>

とも、

万葉集の日本精神は決して過去の事実ではなく、不斷に無限に発展して行く国家の大理想を現してゐる。かくして万葉集に於ける日本精神を顧みることは、現在の日本人の何れにも存する日本精神・大和魂即ち日本人の永遠にふんでゆくべき道を反省して見ることである。<sup>(63)</sup>

とも明言する久松の「新国学」が「歴史的現実に処し、歴史的現実を指導すべき学」<sup>(64)</sup>としてどれほどに期待されたか、あえて論じるまでもないだろう。実質それが、丸山眞男（一九一四—一九九六）のいう既成事実への屈服——「既に現実が形成せられた」ということがそれを結局において是認する根拠となる<sup>(65)</sup>——の一形態に過ぎなかつたのだとしても。

#### 四 久松潛一と三井甲之

次に三井甲之であるが、久松潛一は、中学校時代（明四一・四〇大二・三）を回想した文章のなかで、

芳賀矢一先生が国民性十論をまとめられたのは、博士が西欧から帰朝されてからであり、書物となつたのは明治四十年であつて、「……」また『アカネ』や『人生表現』に於て三井氏等が日本臣道の道をとかれ、岩野泡鳴「本名美衛、一八七三—一九二〇」が日本主義を主張したのもこの前後に当るのである。この時代のことについてはなほよく調べて見たく思ふのであるが、日本主義や日本の自覚が力強く起つて来た時である。(66)

と述べておき、帝大國文出身の「変り種」(67)といわれた三井の言動にはかなり早い時期から注目していたと思われる。

明治四〇（一九〇七）年七月に東京帝国大学文科大学文学科（国文学専修）を卒業した三井は、以後もっぱら野に在つて著述に専念し、『アカネ』（明四一・二創刊）、『人生と表現』（明四五・五『アカネ』改刊）、『親鸞と祖国』（大八・一創刊）、『原理日本』（大一四・一一創刊）などみずから主宰する諸雑誌や『日本及日本人』（明四〇・一創刊）、新聞『日本』（大一四・六・二五創刊）などの各種右派メディアを通じて、正岡子規（本名常規、一八六七—一九〇一）の「写生」論やドイツの心理学者・ヴァント（Wilhelm Wundt, 1832-1920）の「直接経験」の心理学それに浄土真宗の宗祖・親鸞（善信、一一七三—一二六三）の「じねんほうに自然法爾」の教説等をミックラスさせた独特の文芸観やナショナリズムを社会一般に向けて精力的に発信した。彼の学問と思想は最終的に「しきしまのみち（こどのはのみち）」として大正後期に体系化されるが、その内容は、「すなほなるをさな心をい

つとなく忘れはつるが惜しくもあるかな」（明三八）とうたに詠んだ明治天皇（睦仁、一八五二—一九一二）の心意を体し、一切の概念思惟・論理判断を排して眼前の事象を「すなほ」に「あるがまま」に受け容れ、現実のおのずからなる「開展」に進んで「隨順」「没入」する、そのような日本人として本来在るべき人生態度への回帰を説く、まさしき「歌学」であり「国学」であった。

現実を人為的に変改せむとせぬのである、理想境、または現世と正反対の世界と生活とを現ぜしめむとするのではない、現実のまゝに隨順し、歡喜と悲哀と、希望と絶望と、恩愛と憎悪とそれらに没入しつゝそれらを内に調和せしめ綜合せしめむとする信心によつて、こゝに不可思議の境に無極の生を創造せむとするのである。（<sup>6</sup> <sup>8</sup>）

「すなほなるをさな心」の「信心」、そこに開かれて来る「不可思議の境」界こそ「われらのはかなき現実生活」をして「悠久生命につながらしめ」（<sup>6</sup> <sup>9</sup>）る国土大地、すなわち「全体國家生命」（<sup>7</sup> <sup>0</sup>）としての日本である。

われら日本国民にとつては『日本』は『世界』であり『人生』である。『日本』はわれらの内心にいくるところの『宇宙』であり『永久生命』であり『信順意志』である。そは祖国日本を防護せむとする実行意志であり、『日本は滅びず』と信ずる一向専念の信仰であ

る。(71)

文學者といふよりむしろ新興宗教の教祖じみた三井のこうした言説を久松がどこまで味得していたかは不明だが、少なくとも、次のような自身の目指す學問——「新國學」の目的と方法論に三井のそれが余すところなく合致することは明瞭に認識していたに違ひない。

國學は國家的精神を中心としてその理解と闡明とを目的とする學問であり、それは古代人によつて知られた日本、即ち古事記によつて表現されたものを、近世に於て再現しようとするものである。「……」かくて小供のやうな自然人のありのまゝの行動の中に、あるべきすがたあるべき日本の姿を見出さうとするのが、國學の理想であつたのである。「……」單なる概念や論理の遊戯をすてゝ言語や文獻そのものを中心としてその中にのみ、あるがまゝのものを見ようとする精神は、また最も尊重せらるべき方法論である。(72)

さて、片や東京帝國大學文學部の専任教員として片や在野の一歌人・評論家として異なる知的環境を生きていた三井と久松、両者の思惑が具体的に交錯するのは昭和一〇年代になつてからである。

祖國日本の現状を「自然」に「あるがまま」に受け容れず民主<sup>デモクラ</sup>・民本<sup>ラシ</sup>主義（個人意志の総和）やマルクス・共産主義（階級闘争、暴力革命）など賢しらな偏知を以て國家を「人為的に変改せむ」と企図する者たちをかねて敵視していた超保守主義者<sup>ウルトラ・コンсерバティスト</sup>・三井は、「現日本東京の官公私立法文科大学」(73)

就中それらの中核に位地する東京帝国大学法科大学（法学部およびその分流である経済学部）こそが「学問研究の自由」を隠れ蓑にそうした諸々の外来危険思想の総卸元兼培養器兼発信地になつていると確信し、大正末年から蓑田胸喜（一八九四—一九四六）ら「原理日本社」（大一四・一一称）の同志たちと相携えて苛烈な官学アカデミズム批判<sup>(74)</sup>を開始していた。

彼らの言論活動は年を追うごとにエスカレートしていく、昭和一〇（一九三五）年には貴族院議員の菊池武夫（一八七五—一九五五）ら政界の一部右派勢力と協調して国体明徴運動を社会的に盛り上げ、当時憲法学の最高権威にして国家を事実上の法人とみなす「天皇機関説」の確立者でもあつた東京帝大名誉教授・貴族院議員の美濃部達吉（一八七三—一九四八）を議員辞職（九・一八）に追い込み<sup>(75)</sup>、昭和一三（一九三八）年には文部大臣（第一次近衛文麿内閣）の荒木貞夫（一八七七—一九六六）の後押しを受けて前出菊池らと「帝大肅正期成同盟」を組織（九・四）し、自治の慣行に基づいた従来の人事原則を改め総長以下全大学官吏を「天皇の任免大権」において国家権力の厳重な監督下に置かしむべく各方面に働きかけ、更に昭和一四（一九三九）年には、かねて実証性を欠いた国体論や国学的言説の横行に対し「説くものみづからが現代に対して要求するところを古典の上に反映せしめたもの」<sup>(76)</sup>と懷疑的な論調で知られた東京帝大法学部講師の津田左右吉（一八七三—一九六一）を「神代上代の史実を根本的全體的に否認」する「大逆思想」<sup>(77)</sup>の持ち主と徹底的に糾弾して司法部を動かし、翌年の著書発禁処分と起訴（出版法違反）に至らしめている。

三井を導師、蓑田を前衛とする原理日本社の攻撃目標は主として東京帝

国大学法学部・経済学部に絞られていたが、時にその舌鋒は他の学部・学科にも容赦なく向けられた。例えば、

藤村「作」博士、久松「潛一」博士等がこんな赤化論文「近藤忠義『国文学月評』（『国文学 解釈と鑑賞』昭一一・六）を指す」を国文学界の權威的態度を表示する、雑誌に掲載して、これを『新しい』とでも思つてをるならば大まちがひである。（<sup>78</sup>）

あるいは、

東京帝大文学部の国文学科は同国史学科とともに、日本精神、日本國体の問題が最近非常時局に際して全国民的関心を喚起しつゝあるにかゝはらず、また反国体非日本思想としてのデモクラシイ『民政』主義、マルクス共産主義が東京帝大法学・経済学部に志願代理者を見出しう外敵に内応し世界革命陰謀赤化の猛火に油を注ぐ侵襲に対しても、国文国史科の教授等はその尽すべき任務を尽したとは認められなかつたのである。（<sup>79</sup>）

といったように、久松潛一はといえば、時折自分の方に飛んで来るそうした火の粉には辟易しつつも、一方では、同じ東京帝大國文・芳賀矢一門下の先輩である三井が、帝国大学創立（明一九・三）以来「法医工文」として日本の官学アカデミズムにおける学問ヒエラルヒーの頂点に君臨し続けて来た法学部（旧法科大学）の教授たちを連日正面切って論難しそ

勢威をおびやかしていたことに、内心大いに同調するところがあつたのではないか。やり方はともかく、結果としてそれが亡き師の意思に適い、明治期以来の国家・社会一般における法科偏重の風をただし<sup>(80)</sup>、わが「国文学／新国学」の重要性をあまねく周知させることにつながれば好都合である、と。現時点で確証はないが、そのように考えたとすれば、当時著名な学者のほとんどが三井らを「狂犬」<sup>(81)</sup>の一派とみなしてすべからく無視したのに対し、ひとり国文学者の久松だけは本章冒頭でみたように三井の存在を積極的に肯定したことも頷けよう。

しかるに帝大肅正運動は、昭和一六（一九四一）年頃から徐々に終息に向かう。マルクス・共産主義のシンパのみならず矢内原忠雄（一八九三—一九六一）、河合栄治郎（一八九一—一九四四）など自由主義<sup>リベラル</sup>を信条とする知識派の学者をも追放した東京帝国大学は総長で海軍造船中将でもあった平賀譲（一八七八—一九四三）のもとで教職員・学生の管理を強化し<sup>(82)</sup>、学外世論もまた転変急を告げる時局を前に「大学問題どころではな」く「大學論議は下り坂」<sup>(83)</sup>になつていた。「左」を一掃し国内の思想・言論統制をほぼ完了した国家権力サイドにとつて原理日本社の利用価値はもはやなく、戦時体制下での「右」の暴走を警戒する政府当局は逆に彼らの動向に目を光らせるようになる<sup>(84)</sup>。想定外の状況に勢いもトーンダウンしていくなか、それでも三井、蓑田らは「民間思想検察官」<sup>(85)</sup>として自分たちに課した責務、官学アカデミズム批判をあくまで継続しようとする。既に沈黙させた東京帝大法学部・経済学部に代えて新たな標的に定めたのは文学部、それも「最近新国学論が喧伝されて以来」というもの「稀に見る活気を呈してゐ」<sup>(86)</sup>る国文学科の、自分たちに好意的な教授その人で

あつた。

昭和一七（一九四二）年に入つて、原理日本社は突如として久松潛一に対する集中砲火を開始する。

久松潛一博士の「大君のへにこそ死なめ」「朝日新聞社編・発行『宣戦大詔謹解』昭一七・三所収」は同氏の文章としては情意のこもつたまた整頓したものである。けれども通俗的誤謬は踏襲せられてをる。即ち、「皇軍の赫々たる戦果はひとへに御稜威<sup>みいわ</sup>による所であるとともに、一億のみ民の一死報国<sup>ひふく</sup>の精神の発露を見るのである」これである。御稜威は臣民の一死報国<sup>ひふく</sup>の精神と行動とを不斷に攝取せさせ給ふのである。御稜威と臣民の奉公と別途に分立して作用する如く思想するの誤である。御稜威と申上ぐる時は、それは常に臣民の忠義奉公の実踐行為を總摄せさせ給ふのであって、君民一体の本義を忘れてはならぬのである。トトモニといふ通俗思想法を矯正するのが帝大國文科主任教授の任務たるべきである。また、「大東亜の永遠の平和を確立する窮極の目的を貫徹することに渾身の力を傾けねばならない。」といふのも澤瀉<sup>おもだか</sup>「久孝、一八九〇—一九六八」博士ともに通俗的誤謬に陥つたのである。反復していふが、大東亜永遠の平和確立といふことは臣民個体の行為目的ではなく、此の神聖目的無窮意志に奉仕するが臣民の心がけであらねばならぬ。（<sup>87</sup>）

三井はこのように述べ、一応は自分たちも「新国学論の一方の指導者」（<sup>88</sup>）と認めている久松の思想的問題点を容赦なく剔抉した。「大君のへにこそ

死なめ」<sup>(89)</sup>といふその姿勢やよし、しかしながら久松の意識の根底には大東亜戦争（太平洋戦争）緒戦の勝利の要因を天皇の威光（御稟威<sup>みい</sup>）と国民一人一人の犠牲的精神（一死報国）の二つに「分立」させていることからも伺えるように、未だ「君民一体の本義」——日本はカミである天皇を生成作用の中核に頂く「全体国家生命」であり、国民はそこから産み出された「部分的要素」<sup>(90)</sup>であること——に徹しきれていない近代個人主義・合理主義的な思考が残留している。「臣民の有限個体生命は承認必謹この大御心に翼賛しまつるのみ」であり、「臣民個体として永遠の平和を云為する」など実に「僭濫慢心」の沙汰<sup>(91)</sup>である、と。更に、三井の意を汲んだ他の同人も、

近世に於ける古へ学び「国学」、史的研究は現実の生活に対する指導原理とならなければならぬ。即ち現在の生活から遊離する觀念論ではなく、直接に私達の情意の拠り所となるものでなければならぬ。「……」世俗一般に対して無氣力に妥協される国学論に威力を感じずする事は出来ぬ。論述に言靈あらしむべきは論述者自らの信念でなければならぬ。而して、その信念は研究室的または文献的推論より生れず、現実の人生を究尽する所より生れるものである。「……」信より発する「新国学」それが今私は「久松」博士に望むのみである。<sup>(92)</sup>

と述べ、久松の学問研究には畢竟自己の人生、宗教体験（回心）に立脚した確固たる「信念」——「生命的充実緊張」が欠けており、それ故に「時空を貫き流れる古典の精神と中今の現実の探究とに関しては、残念ながら無

力である」と論断した<sup>(9-3)</sup>。「中今」とは、先章第三節二項でみたように昭和初期に三井によつて「文武天皇即位の詔（宣命）」から言挙げされた思想で、今現在この一瞬一瞬を、神武創業の始めより途切れることが「盛りなる真中の世」<sup>(9-4)</sup>と絶対的に肯定する、原理日本社の基本的な時間認識である。国家の現状<sup>ま</sup>にとことん没入しのめり込むその本気度と真剣さが足りないために、久松の「新国学」はどこかまだ他人事のようで、幕末期の国学が「維新志士の現実活動に密着するに至つた情意的要素を暗示」<sup>(9-5)</sup>したように、実質人を動かすものたり得ていないというのである。

デモクラ・マルクス主義の侵襲にも米英唯物功利逸樂主義の流行にも、それは『専門』外の現象であるといふ風に無関心無批判で「⋮⋮」何時になつても本居宣長の研究から一歩も出さずにモノノアハレ論などを踏襲して、このごろやうやく御稜威<sup>みい</sup>が国体が云々といつてをりましても、それは歴代 天皇の歎慮を悩ませ給ひし内外の国難、また祖国自立防護、國体明徴の『戦』のために戦ひたふれました人々の上をあはれませ給ひし大御心をしぬびまつらねばならぬのでありますて、今日は結構の天氣で、風も無くあたゝかで、といふやうの態度では困つたものであります。<sup>(9-6)</sup>

雑誌を目にし、てつきり友軍とばかり考えていた人々からの予期せぬ批判の数々を、久松はどうのように受け止めたであろうか。明確にいえることは、彼の「新国学」言説が、こののち戦局の推移につれてますます以て学術的合理性・客觀性を捨象していき、

皇国の今日を真によく生きることが皇国の歴史を生成発展せしめることになり、学問もこゝに生きるのである。近世の国学を今日に思ふのは、近世の国学者が学問を以て皇国の道に参じ、皇国の歴史をして真に生成せしめることに渾身の力を傾けたことにある。それは国学に於てのみならず水戸学に於ても同様であり、いはゞ日本の学問の伝統がそこにあつた。「……」今は明治維新にもまさる偉大なる皇国の歴史の生成発展の時である。皇国世界史建設の時である。この歴史建設に参ずることの出来る光栄を私どもはお互に心から感じて居る。(97)

あるいは、

今に目をそむけ、もしくは現実を回避した間から真に永遠に参ずる学問は生れない。今と真剣にとりくみ、その間から真に生れ出る国文学であつてそこに永遠性を得るであらう。「……」今日はまことに皇国歴史にとつて重大なる時である。真に皇国興廃の岐路に立つて居る。今日に於て真に皇国の精神に生き、「大君のへにこそ死なめ」の心を以て米英を撃滅し、大東亜戦争に勝ちぬくことによつてのみ皇国永遠の歴史を生成せしめることが出来るのである。その事によつて学問としての国文学もその本来の生命を發揚し永遠に参ずることが出来る。國破れて國文学はない。いはんや国学は存しない。國家の永遠と生命を一にする学問こそ国学である。さうして私どもの考へる国文学も国家の歴史の永遠と一体になつて居る。

「……」今を生きぬくことは永遠の歴史を生成せしめる今を真に生きぬくことである。この重大なる皇国の歴史の今を真に生きぬくことに外ならない。国文学徒の皇国の永遠の歴史に参する所以もまたそこにある。(98)

等々、全ての国文学徒に対して「生成発展」する「國家」との「生命」の「一体」化を促し「皇国の今日／国家の永遠」すなわち「中今」に盲目的に「参する」ことを説く、まさに三井らが期待した通りのものに変容していったという事実である。

### 五 戦後の久松潛一

昭和二〇（一九四五）年九月二日、先にポツダム宣言受諾を表明した大日本帝国は正式に降伏文書に調印する。

かねて「日本文学研究の重要な目的は日本精神・民族的精神を明らかにすること」(99)にあり「國破れて國文學はない。いはんや國學は存しない」(100)と言明していた久松潛一であつたが、戦後は、「平和の中に、文化日本を建設することは国文学徒にも課せられた責務である」という新たな名分を掲げ「生々してやまない日本人の『まこと』の精神」とは本來的に「調和を重んずる精神／和の精神」であると論じる(101)など、かつての「新国学」言説の枠組を手際よく解体し穩健な文脈に再構築することで「国文学」という種の自己保存をはかつた。

戦時に於て国学が学問の限界を超えて逸脱していく点もあること

をも認めざるを得ない。「……」それが国学の本道であると考へられたのは余りに行過ぎの傾向であり、私どもの考へる国学とも相反するものであつた。それは今後に於て反省せらるべき点である。（<sup>102</sup>）

しかる後「柳田氏等の学問が民俗学であるとともに新国学である」（<sup>103</sup>）と「新国学」の名跡を柳田國男（一八七五—一九六二）らの民俗学に全面的に譲渡した——押し付けたともいえる（<sup>104</sup>）——久松は、同様に沼波瓊音と三井甲之についても久松は、文学史（短歌史、俳句史、評論史）の片隅（<sup>105</sup>）に整理し直し、個人的には路傍の石に等しい扱いを決め込んでいく。あたかも自分の学問と思想にとつて、最初から何の関連性もなかつたかのように。

そうしたふるまいを、「東に行けといへば東に行き、西に行けといへば西に行」（<sup>106</sup>）く御用学者の「哀れさ」（<sup>107</sup>）とみるか、あるいはみずからの毀譽褒貶は顧みず学界の将来に禍根を残すまいとする「责任感」（<sup>108</sup>）のあらわれとみるかは見解の分かれどころであろうが、戦略として適切であつたことは確かなようである。

戦後に訪れた国文学内部における虚脱や無力感、他方外部からの国文学に対するいわれなき侮蔑や軽視に対して、先生「久松」が国文学再建のために学界を主導され、今日の国文学の隆盛をもたらす上に果された功績に至つては到底筆舌に尽し難いものがある。国文学が戦後の混乱や分裂を克服して、一科の学としての統一を実現し、立派に立直ることができたのは、ひとえに先生の力によるところが大きいのであ

る。（109）

じじつ、「國家ノ須用ニ応スル學術技芸」としての意匠を徹底的にそぎ落とした国文学は、新制東京大学（昭二四・九創設）の教授として依然世界最高権威の座にとどまつた久松（昭三〇・三退官）を先頭に順調な再出発を遂げ、以降長らく、戦後社会における高等教育進学率の上昇（特に女性）に伴う大学・短期大学の増設と文学部の定員拡充、国文学（日本文学）専攻者人口の増加というまさしき天恵のなかで内に閉じた繁栄――

「文学部は文学部の内部だけで言葉のやりとりができる、いわば自給自足できるだけの規模を獲得したのである。研究者は学会と文学部に向けて言葉を発していればよ」<sup>(110)</sup>く、「いつたい何の社会的な目的性や意味性があつてそうした研究がおこなわれなければならぬのか、よくわからぬ」ままに「毎年のようにミクロ化された専門的な論文が大量生産され」<sup>(111)</sup>続ける――を享受することになる。少なくとも、国家・社会の須用、たらざる学問としてその存在意義が改めて外在的に問われ始めた二十一世紀の今日的状況<sup>(112)</sup>に至るまでは。

#### 注

(1) 『文芸世紀』は「日本浪漫派」の同人であった中河與一（一八九七—一九九四）の主宰した月刊誌（昭一四・八創刊）である。誌面は必ずしも文芸一辺倒でなく、文学や歴史、内外情勢に関する論説や時評など毎号多岐にわたっており、準戦時・戦時体制下の「思想界に特異の存在を示した」といわれる。久松の寄稿は、もとより雑誌の「格付け」という点からも大いに歓迎されたことであろう。平野謙『昭和

文学史』（筑摩書房、昭三八・一二）七八頁。笛淵友一編著『中河興一研究』（右文書院、昭四五・五）一五三・一六二、四六〇・四七九頁。

(2) 久松潛一「日本學問の伝統と国学」（『文芸世紀』昭一六・一二）三頁。

(3) 久松潛一「国文学に於ける国学への志向——国文学の動向——」（『国民精神文化』昭一三・三）二三頁。

(4) 久松潛一「国学・文芸学・日本学」（『理想』昭一三・九）・『国学——その成立と国文学との関係——』（至文堂、昭一六・三）二六六頁。

(5) 久松潛一「国学の精神」（藤村作編『日本文学連講 近世上』中興館、昭三・四）二七頁。

(6) 久松前掲「日本学問の伝統と国学」四、六頁。

(7) 久松前掲「日本学問の伝統と国学」七頁。

(8) 牟禮仁「皇學四大人から国学四大人へ」（『皇學館大学神道研究所紀要』平一五・三）一二六、一二七頁。

(9) 山本正秀「明治の新国学運動——落合直文を中心として——」（『国語文化』昭一七・三）一五一頁。

(10) 芳賀矢一『国学史概論』（国語伝習所、明三三・一一）・『明治文学全集 四四／芳賀矢一集』（筑摩書房、昭四三・一二）二二五、二二六頁。

(11) 垣内松三「国民言語文化の統一性」（文部省教学局編・発行『日本諸学研究報告 第三篇（国語国文学）』昭一三・三）七三頁。

(12) 久松前掲「国文学に於ける国学への志向」二五頁。

(13) 矢部貞治「昭一三・二・七付／日記」・『矢部貞治日記 銀杏の巻』（読売新聞社、昭四九・五）七九頁。

(14) 久松がその内容にこだわりを持っていたであろうことは、同じ論文を翌年別の学術誌（『二松論纂』昭一七・一一）に転載しているところにも伺える。

(15) 高木市之助『国文学五十年』（岩波書店、昭四二・一）六七頁。もとよりいかに戦前とて、久松潛一ひとりの言説を以てただちに上意下達、国文学界全体のベクトルが決定付けられるとは筆者も考えない。昭和初期の官学アカデミズムにお

いっては、東京帝国大学以外にも京都帝大の文学部、東北、九州、京城各帝大の法文学部、台北帝大の文政学部に国文学の専門研究室・講座が存在し、それぞれ一定の自立性のもとに研究・教育が実施されており、また藤村作の女婿近藤忠義（一九〇一—一九七六）に代表される左派系の国文学研究（歴史社会学派）も学界にそれなりの勢威を有していた。とはいえ、やはりあらゆる価値の度合いが「万世一系ノ天皇」（「大日本帝国憲法」明二二・二・一一公布、第一条）という「中心的実体からの距離」によつて計測されることが自明であつた帝国日本にあつては、天皇＝国家権力の中枢機関に物理的かつ精神的に最も近接していた東京帝大とその周縁から発信される学知が、その分野における支配的影響力・拘束力をおのずからまとい付かせていたであろうことは疑い得ないのである。丸山眞男「超國家主義の論理と心理」（『世界』昭二一・五）・『増補版 現代政治の思想と行動』（未来社、昭三九・五）二七頁。

（16） 笹沼俊曉「久松潛一と国文学研究——昭和戦前・戦中期における国学論と『鑑賞』論をめぐつて——」（『史境』平一四・九）、同『「国文学」の思想——その繁栄と終焉——』（学术出版会、平一八・二）、衣笠正晃「国文学者・久松潜一の出発点をめぐつて」（『言語と文化』平二〇・一）、同「国文学研究史と比較文學——久松潜一の場合を中心に——」（『日本比較文学会東京支部研究報告』平二二・九）、高城円「『国体の本義』の思想と久松潜一——近代における『万葉集』享受の問題として——」（『青山語文』平二七・三）等。

（17） 廣松涉『〈近代の超克〉論——昭和思想史への一観角——』（講談社、平元・一一）一五八頁。

（18） なお「感激の情せまつて言葉もないのであり、たゞ 天皇陛下万歳と心のかぎり唱へ奉るのみである」とは、開戦直後の久松の所感である。久松潜一「大君のへにこそ死なめ」（朝日新聞社編・発行『宣戦大詔謹解』昭一七・三）七六、七七頁。多くの関係者の証言をみる限り、久松が一個人としてきわめて「謹厳」かつ「誠実」な人間性の持ち主であったことは否めない事実である。問題は、一時期ナチズ

ムに親近したハイデガー（Martin Heidegger, 1889-1976）よろしく、彼のその「謹厳」さと「誠実」さが何と結び付いたかという点にある。

(19) 久松潛一「石村貞吉先生と私」（『年々去来　一国文学徒の思出』広済堂出版、昭四二・一〇）一五五、一五六頁。

(20) 大正一一（一九二二）年三月から大正一四（一九二五）年三月までは第一高等学校の教授を兼任している。久松の経歴と業績について基本的な事項は、池田利夫編「久松潛一博士著述目録」（『国語と国文学　久松潛一博士追悼特集』昭五一・七）、福田秀一編「久松潛一博士年譜」（前同）等を参照した。

(21) 翌年三月には一高の教授に昇任している。

(22) 東大元級「東大国文科評判記」（『日本文学』昭六・一一）一二三頁。

(23) 新聞記事「大学教授室（一一）／東京帝国大学文学部（五）／国文学科」（『時事新報』昭六・一二・二三六面）。

(24) 久松潛一「上田先生を悼みまつりて」（『恩賴抄　国文学襍記』湯川弘文社、昭一八・九）四三頁。

(25) 伊藤正雄「大学講師としての先生」（瑞穂会編・発行『噫　瓊音沼波武夫先生』昭三・二）一一八頁。

(26) 風巻景次郎「芳賀矢一と藤岡作太郎——黎明期の民族の発見——」（『文学』昭三〇・一一）四四頁。

(27) 沼波武夫「大一三・六・一付／石郵貞吉宛書簡」・前掲『噫　瓊音沼波武夫先生』「序」二頁。

(28) 東京帝国大学『文学部学生便覧　自大正十四年四月至大正十五年三月』（大一四・三）四〇、五六頁。

(29) 大塚健洋『大川周明』（中央公論社、平七・一一）一一六、一一七頁。田中康二『本居宣長の大東亜戦争』（ペリカン社、平二一・八）七二、七六頁。

(30) 沼波瓊音「遺稿／講義ノート　国に就て」（『国語と国文学　十月特別号／日本精神研究』昭二・一〇）一六頁。

(31) 朋友にして上司でもある藤村作に対しても、ともに「職を擲つ」て「國家精神の覚醒運動、新国学の樹立」に「専心活動」しようと一時盛んに勧奨したといふ。藤村作「あゝ沼波君」(前掲『噫 瓊音沼波武夫先生』)八八頁。

(32) 久松潛一『日本文学と文芸復興』(民生書院、昭二二・一〇)・『久松潛一著作集 別巻／国文学徒の思ひ出』(至文堂、昭四四・一二)一九二、一九三頁。

(33) 上島鬼貫『独言 上』・大野洒竹編『鬼貫全集』(春陽堂、明三一・五)一九六頁。

(34) 伊藤前掲「大学講師としての先生」一一五頁。

(35) 各務虎雄「沼波先生を憶ふ」(前掲『噫 瓊音沼波武夫先生』)二〇一頁。

(36) 久松潛一「元禄時代と文芸復興」(『国語と国文学』大一三・一〇)五五一、五五二頁。

(37) 三上参次・高津鍬三郎『日本文学史 上下』(金港堂、明二三・一一)、芳賀矢一『国文学史十講』(富山房、明三二・一二)、藤岡作太郎「日本評論史」(東圃遺稿 卷一)大倉書店、明四四・六)等。

(38) 石津純道「日本文学評論史」(前掲『国語と国文学 久松潛一博士追悼特集』)一〇、一一頁。

(39) 沼波瓊音「鬼貫の風韻」(『帝国文学』大六・一〇)五八、五九頁。

(40) 例え巴「契沖の文学批評」(『国語と国文学』大一三・六)、前掲「元禄時代と文芸復興」、『万葉集の新研究』(至文堂、大一四・九)等。

(41) 久松潛一「国文学を流れる三の精神」(『觀想』大一五・一〇)・『上代日本文学の研究』(至文堂、昭三・一二)一三、二〇・二二、三八、三九頁。

(42) 和辻哲郎「『もののあはれ』について」(『思想』大一一・九)・『日本精神史研究』(岩波書店、大一五・一〇)二一七頁。和辻の該論文について久松は「すぐれた研究」と評価し、その上でみずからも「もののあはれ」に関して「一言」述べている。すなわち「もののあはれ」とは「ものの中に見出したあはれであり、事象にふれておこる感動であ」つて、「文学的美的な趣」「優美性」を重んじる平安期の「修辞学的標準」において「なまのまゝの感情」「力強い感情」すなわち「ま

こと」を「抑制して調和を得た感情」として「よりよく表現」したものである、と。

久松潛一「古代文学批評の完成——写実ともののはれと余情とに就いて——」（『思想』昭四・五）三二、三三頁。なお、後に久松は和辻の『風土——人間学的考察——』（岩波書店、昭一〇・九）にも影響を受け、自論に「風土性や歴史性は日本文学を形成せしめるものであるばかりでなく、『日本的なもの』の一般的表現としての国民性や文化を生出す母体でもある」と空間的な観点からの議論を導入している。

久松潛一『日本文化 第十二冊／我が風土・国民性と文学』（日本文化協会出版部、昭一三・五）三、六〇頁。長谷章久「文学風土研究」（前掲『国語と国文学 久松潛一博士追悼特集』）六一頁。安田敏朗『国文学の時空——久松潛一と日本文化論——』（三元社、平一四・四）一七六、一八一頁。

(43) 久松前掲「契沖の文学批評」一八八頁。

(44) 久松前掲「元禄時代と文芸復興」五五二頁。

(45) 久松をしてそこに至らしめたのは、もとより鬼貫一沼波の論だけではあるまい。同じように『まこと』を主とする文学観をいだき、雄健な文学精神を尊重してゐた荷田春満の言説（『春葉集』「序」等）も念頭に置いた上でのことであろう。

久松前掲『国学』七四頁。

(46) 子思『中庸』「第十一章」・金谷治訳注『大学・中庸』（岩波書店、平一五・七）二〇二頁、原漢文訓み下し。

(47) この点については、篤胤の「御國ノ人ハソノ神國ナルヲ以テノ故ニ、自然ニシテ正シキ真<sup>マヨト</sup>ノ心ヲ具ヘテ居ル、其ヲ古ヘヨリ大和心トモ大和魂トモ申シテアル」との言説もふまえていると思われる。平田篤胤『古道大意 上巻』・久松前掲『国学』一七六頁。

(48) 稲岡耕二「久松先生と上代文学」（前掲『国語と国文学 久松潛一博士追悼特集』）三五、三六頁。

(49) 後に、『岩波講座日本文学 第三／日本文学評論史——形態論の相互関係を中心として——』（岩波書店、昭七・七）および全五巻の大著『日本文学評論史』（古代中世篇／近世最近世篇／総論歌論篇／形態論篇／詩歌論篇』（至文堂、昭一

一・一〇／昭一一・一〇／昭一三・四／昭二一・四／昭二五・一〇）として順次公刊。

(50) 平泉澄「国史学の骨髄」(『史学雑誌』昭二・八)七四六、七四九頁。日本図書館協会編・発行『良書百選 第二輯』(昭八・三)一七頁。若井敏明『平泉澄——み国のために我つくさなむ——』(ミネルヴァ書房、平一八・四)八七、八八頁。昆野伸幸『近代日本の国体論——〈皇国史觀〉再考——』(ペリカン社、平二〇・一)六九、九七、一五九頁。

(51) 鈴木貞美『日本の「文学」概念』(作品社、平一〇・九)一八五、一八六頁。ハルオ・シラネ「『国文学』の形成」(小森陽一他編『岩波講座 文学一三／ネイションを超えて』岩波書店、平一五・三)七五、七六頁。

(52) 久松潛一「国家的精神の考察」(前掲『国語と国文学 十月特別号／日本精神研究』)一九八頁。

(53) なお、「新国学」と併せて昭和戦前期の久松の論著に頻繁に登場するのが「日本学」という語である。「日本学」とは、久松の説明によれば、「西欧の大学に於ける日本に関する講座の如き日本学（ヤパノロギイ）」と「日本的立場に立脚し、日本精神を基調として構成される学的体系」に大別され、後者は更に「国文学、国語学、国史学、国文学等々を綜合した上」で構成される「諸学統一」の「日本学」と国文学など「一科の学」を中心として建設される「日本学」とに分類される。もとより「日本学といふのも国文学の母胎である国学精神を現代に於て新しく見直しそれを国文学の上に新しく生かさうとしたのに外ならないのである」というように、久松が自身に引き当てて「日本学」を語る場合は、最後の意味すなわち「新国学」と同義である。久松前掲「国学・文芸学・日本学」二六六、二七二、二七三頁。

(54) 文部省「内閣総理大臣斎藤実宛提出／国民精神文化研究所官制別紙理由書」(昭七・六)・『公文類聚 第五十六編 昭和七年 卷五／国民精神文化研究所官制ヲ定メ〇高等官官等俸給令中ヲ改正ス』(国立公文書館アジア歴史資料センター)  
[http://www.jacar.go.jp/] A14100307300 第七～一〇画像)。

- (55) 昭和一一（一九三六）年には、明治期以来のいわゆる「国体論」に「日本國家の名におい」で「はじめて一種の結論を与えた」というべき有名な『国体の本義』（文部省、昭一二・三）の執筆・編纂に携わったとされる。橋川文三「昭和思想」（『近代日本思想体系三六／昭和思想集II』筑摩書房、昭五三・一）・『昭和ナショナリズムの諸相』（名古屋大学出版会、平六・六）二四一、二四二頁。宮地正人「天皇制ファシズムとそのイデオローグたち——『国民精神文化研究所』を例にとって——」（『季刊 科学と思想』平二・四）六二頁。安田前掲『国文学の時空』二〇四、二一一頁。高城前掲「『国体の本義』の思想と久松潛一」九七、一〇〇頁。
- (56) 教學局編・發行『思想善導に関する良書選奨』（昭一三・三）序一頁。
- (57) 久松潛一「『まこと』に就いて」（『帝國大學新聞』昭四・七・八 五面）。
- (58) 久松潛一『思想問題小輯 五／国文学と民族精神』（文部省、昭九・三）六二頁。
- (59) 因みに、「尽忠の精神」こそ日本人の『まこと』である。さうして尽忠の精神こそ日本人にとって最高の美であり、善である。他の如何なる美も、如何なる善も、尽忠の精神ほど美なるはなく、善なるはない。和氣清麿の精神、楠公の精神に最高の美と善とを見る。これ以上の文学も道徳もない」とは、戦前における久松の「まこと」論の最終形態である。久松潛一「皇國文学を貫くもの」（『国文学 解釈と鑑賞』昭一九・三）一九頁。この頃には既に「まこと／誠」は、儒学的な文脈と国学的な文脈、更にはカーライル（Thomas Carlyle, 1795-1881）の思想受容に淵源する明治期以来の英雄崇拜論——"Sincerity"の美德——などが混融され、学校、軍隊、社会（青年団等）などさまざまな公教育・鍊成の現場で復唱されていた。例えば変わったところで、後方勤務要員養成所（陸軍中野学校）の卒業生は「教育の主体は精神面におかれていたと思う。それは『誠の姿勢』ということで、自分の身を捨ててひとのため、国のためにはたらくことが大切、とされていた」と回想している。雑誌記事「『特別調査』中野学校卒業生はいまどきにいる」（『臨時増刊 週刊サンケイ』昭四八・四）四一頁。前川理子『近代日本の宗教論と国家——宗教学の思想と国民教育の交錯——』（東京大学出版会、平二七・四）一四〇、一四一頁。

斎藤充功『日本のスパイ王——陸軍中野学校の創設者・秋草俊少将の眞実——』（学

研プラス、平二八・一二）八〇頁。

（60）鷲田小彌太『昭和の思想家67人』（PHP研究所、平一九・八）一四九頁。

（61）橋川文三（一九二二—一九八三）は、この期間を、概して「その底流におびただしい不安の予想をひそめ、それらの相殺的な効果の上に擬制的に形成された「異様」な「安定と均衡」の時代であるとし、「満洲国に象徴された帝国主義的膨張の市民的心理への投射と、それによつて補償された「解放感」が「やがてあらゆる不安の感情を吸収し再編成してゆくことになる」「日本ファシズムの完成過程」と分析している。橋川『日本浪漫派批判序説』（未来社、昭三五・二）・再版（講談社、平一〇・六）二一四、二一五頁。

（62）久松潛一「神皇正統記より契沖」（『国語と国文学』昭七・八）・『上代民族文学とその学史』（大明堂書店、昭九・七）二五八頁。

（63）前掲『思想善導に関する良書選奨』二五四頁。

（64）志田延義「国学の本格的展望——久松潛一博士著『国学』——」（『帝国大学新聞』昭一六・六・九五面）。

（65）丸山眞男「軍國支配者の精神形態」（『潮流』昭二四・五）・前掲『増補版 現代政治の思想と行動』一〇六頁。

（66）久松潛一「日本臣道と日比野先生」（前掲『恩賜抄 国文学襍記』）七五頁。

（67）前掲『東大国文科評判記』一二九頁。

（68）三井甲之「親鸞の信者に」（『日本及日本人』大三・六・一）・『親鸞研究』（東京堂、昭一八・二）二七二頁。

（69）三井甲之「親鸞の宗教より開展すべき今日の宗教」（『日本及日本人』大一・一・一）・前掲『親鸞研究』五七頁。

（70）三井甲之『しきしまのみち原論』（原理日本社、昭九・一〇）三九頁。

（71）三井甲之「人生と表現社宣言」（大一二・一二 脱稿）・前掲『しきしまのみち原論』一三八、一三九頁。

(72) 久松前掲「國家的 精神の考察」一九六、一九七頁、傍線引用者。

(73) 三井甲之「亞細亞民族の眞の敵」(『日本及日本人』大一三・六・一) 七四頁。

(74) 前章第三節一項の注(18)に挙げたものと同文献を参照。

(75) これに先立ち、昭和八(一九三三)年には衆議院議員の宮澤裕(一八八四—一九六三)らと協調して京都帝国大学法学部教授の瀧川幸辰(一八九一—一九六二)を休職・免官(七・一一)に追い込んでいる。

(76) 津田左右吉「日本精神について」(『思想』昭九・五)九頁。

(77) 萩田胸喜「早稲田大学教授文学博士 東京帝国大学法学部講師 津田左右吉氏の大逆思想」自費印刷、昭一四・一二)一〇頁。

(78) 三井甲之「東京帝大國文学科の現状一瞥」(『原理日本』昭一一・七)六七頁。

(79) 三井甲之「東京帝大國文学科の現状に就いて」(『原理日本』昭一二・五)九七頁。

(80) 芳賀矢一が「法科万能主義を排す」(『帝国文学』大六・一〇)、「法科万能主義を排す」に就いて(『東亜之光』大六・一一)、「文科大学論」(『東亜之光』大七・六)等の諸論文において国文学をはじめとする人文系学問の国家的有用性を力説し学界・文壇・論壇に大きな反響を巻き起こしたのは、おりしも久松の帝大在学中のことであった。与謝野晶子「芳賀博士の議論を読みて」(大六・一〇)・『若き友へ』(白水社、大七・五)一五二頁。中野実『東京大学物語――まだ君が若かつたころ――』(吉川弘文館、平一一・七)一八四、一八五頁。同時期三井甲之もまた、芳賀の問題提起には大いに刺激を受け、「芳賀博士の法科万能排斥論に対して有力なる答弁をなさざる、又はなし得ぬ法科の教授の如きは、現今のが法科的研究の浅薄のものであることを証明する一例である。」(『...』)国家が国民教化の源泉たるべき文科大学の重大任務を軽視して、その施設に改良と拡張とを加へて、そこに自由討究、自由競争の氣運を発生せしめようともせず、又一般に「文科の」学者、教授に対する物的待遇を菲薄にしたからして、自然競争もなくなり、「...」

：」云々と論じてゐる。三井「國際及國內思想戰」（『雄弁』大七・一一）・『三井甲之存稿——大正期諸雑誌よりの集録——』（三井甲之遺稿刊行会、昭四四・四）一八五頁。

(81) 西田幾多郎「昭一三・七・四付／務台理作宛書簡」・『西田幾多郎全集 第二十二卷』（岩波書店、平一九・六）一五〇頁。

(82) 宮崎ふみ子「東京帝国大学『新体制』に関する一考察——全学会を中心として——」（『東京大学史紀要』東京大学百年史編集室、昭五三・二）を参照。

(83) 丸山眞男「南原先生を師として」（『國家学会雑誌』昭五〇・七）・『丸山眞男集 第十卷』（岩波書店、平八・六）一八一頁。

(84) 竹内洋はその皮肉な状況を「狡兔死して走狗烹らる」（『史記』越王勾践世家）の故事を以て譬えている。竹内「帝大肅正運動の誕生・猛攻・蹉跌」（同他編『日本主義的教養の時代——大学批判の古層——』柏書房、平一八・二）四〇、四一頁。

(85) 三十尾茂『國家主義者・蓑田胸喜——民間思想検察官——』（泰文館、平一四・六）より。

(86) 都築康二「久松潛一氏への質疑——新国学論を中心として——」（『原理日本』昭一七・七）一四頁。

(87) 三井甲之「大東亜戦争下の国文学界の現状——当局者の緊急考慮を求む（その二）——」（『原理日本』昭一七・五）三頁、ルビ引用者。

(88) 都築前掲「久松潛一氏への質疑」一四頁。

(89) 原出典は、大伴家持「賀陸奥国出金詔書歌」（『万葉集 卷十八』）より。

(90) 三井前掲『しきしまのみち原論』三九頁。

(91) 三井前掲「大東亜戦争下の国文学界の現状」二、三頁。

(92) 都築前掲「久松潛一氏への質疑」一六、二〇、二一頁。

(93) 都築前掲「久松潛一氏への質疑」一六、二〇頁。

(94) 本居宣長『続紀歴朝詔詞解』・三井前掲『しきしまのみち原論』三四頁。

(95) 斎藤隆而「国学者の現実感覚」（『原理日本』昭一七・七）二一頁。

(96) 三井甲之「消息」(『原理日本』昭一七・五)六二頁、ルビ引用者。文中の「本居宣長の研究から一步も出ずにモノノアハレ論などを踏襲して」云々は、久松の論文「本居宣長（一）（二）」(『文芸世紀』昭一五・六、平一五・七)等を念頭に置いたものと思われる。

(97) 久松潛一「出陣学徒を送る」(『国語と国文学』昭一八・一二)九九一、九九二頁。

(98) 久松潛一「学問に於ける永遠と今」(『文学』昭一九・九)三二、三三頁。

(99) 久松前掲「神皇正統記より契沖へ」二五八頁。

(100) 久松前掲「学問に於ける永遠と今」三三頁。

(101) 久松潛一「国文学に対する反省と自覚」(『国語と国文学』昭二一・三)七〇、七一頁。

(102) 久松前掲「国文学に対する反省と自覚」七二頁、傍線引用者。

(103) 久松潛一『日本文学研究史』(山田書院、昭三二・八)三一二頁。折口信夫（一八八七—一九五三）は、「国学は今正に、新国学を名のつて、鮮やかに出直す時が来た。新国学と言ふ名にも歴史があり動機を別にし三次の運動があつた。今のは三度目で、柳田國男先生の為事に対して久松潛一さんが与へた名称かと思ふ」と述べている。折口「新国学としての民俗学」(『國學院大学新聞』昭二二・九)『折口信夫全集 第十六卷』(中央公論社、昭三一・七)五〇七頁。

(104) その意味で、中村生雄による「柳田がみずからの戦後の学問的スタートを『新国学』の名称のもとに行なうにあたっては、何か及び腰でふつきれない雰囲気がつきまとっている」との指摘も当然であろう。中村「『新国学』の戦前と戦後——柳田民俗学と國家との関係——」(『日本思想史学』平六・九)三頁。

(105) 久松潛一編『日本文学史 近代』(至文堂、昭三二・六)三二四、三三五、五一六頁、等。一方で、芳賀矢一と垣内松三については、久松は、「明治の国文学は小中村清矩「一八二一一一八九五」氏等を先駆とし出发点として、芳賀博士によつて第一の成立を見たのである。「……方法論的自覚を明確にして芳賀博士の学問を継承し、これを展開せしめたのは垣内先生であつたと言はなければならぬ」と

述べるなど、戦後も変わらず学師として顕彰する姿勢をみせている。久松潛一「垣内先生のことなど」（『国語と国文学』昭二七・一一）五二頁。

(106) 西郷信綱『国学の批判——封建イデオロギーの世界——』（青山書院、昭二三・三）一九二、一九三頁。

(107) 三谷邦明「汚穢されている私——安田敏朗著『国文学の時空——久松潜一と日本文化論』を読む——」（『日本文学』平一五・四）八八頁。

(108) 塩田良平「戦時の久松博士」（『久松潛一著作集』月報6』至文堂、昭四三・一二）二頁。

(109) 大久保正「国学研究」（前掲『国語と国文学』久松潛一博士追悼特集）四四頁。

(110) 石原千秋『漱石はどう読まってきたか』（新潮社、平二二・五）三六一頁。

(111) 笹沼前掲『「国文学」の思想』二九六頁。

(112) 日比嘉高『いま、大学で何が起っているのか』（ひつじ書房、平二七・五）、『現代思想／特集 大学の終焉——人文学の消滅——』（平二七・一一）、室井尚『文系学部解体』（角川書店、平二七・一二）、吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』（集英社、平二八・二）、古田尚行「オピニオン 文学雑誌の休刊——国語科教員が研究を考えること——」（『リポート笠間』平二八・五）等を参考照。

## 一 まとめ

以上、本論文では、沼波瓊音（本名武夫、一八七七—一九二七）、三井甲之（本名甲之助、一八八三—一九五三）、久松潛一（一八九四—一九七六）、国文学をベースとする三人の政治的文学者（学者または評論家）の学問と思想を考察した。総じて、彼らは近代の知識人として卓越した見識を有し、文学界・文壇に少なからぬ影響力を發揮した。また、彼らはいざれも東京帝国大学在学中に芳賀矢一（一八六七—一九二七）の指導を受けており、同人の学問と思想、人格を通して、おのずから「國家ノ須用ニ応スル學術技芸」（「帝國大學令」明一九・三・二公布、第一条）たるべき「官学」としての「国文学」固有のミッショングを服膺したとみられる。

従来の研究では、彼らは一人一人その個性の強さから、もっぱら別々に研究対象として取り上げられ、学問と思想の特質が論じられて来た。本論文は、あえて彼らを同時に論じることで、個別研究ではみえなかつた史的なパースペクティヴ、近代学問としての国文学と近代思想としてのナショナリズムが接近・融合するその構造、近世国学の正統——国家の公式学問という意味での——を以て任じる東京帝国大学の国文学が官学アカデミズムの外側（在野）においてナショナリズムの尖鋭的潮流と結び付きそこからおのずと維新・王政復古の潜在的原動力となつたかつての栄光を取り戻さんとするかのように原点回帰を志向していく様態を明らかに

した。

すなわち沼波瓊音と三井甲之<sup>(1)</sup>は、東京帝国大学卒業後、明治中・後期から大正・昭和初期にかけて、その時々の文学・宗教・政治・社会思潮を敏感に感受しながらそれぞれの特性に則った文筆活動をたゆまず展開した。過剰なまでの自意識に源を発する煩悶と内向的思索を重ねて、彼らは半ば必然的に我／個人よりも国家我／全体の絶対的上位を確信するに至るのだが、その過程に共通して「自己本位」の個人主義を説いた夏目漱石（本名金之助、一八六七—一九一六）の存在がみえ隠れするのは興味深い事実である。はからずも漱石の死（大五・一二・九）から第一次世界大戦の終結（大七・一一）に至る期間を潮目として彼らの言動はにわかに政治性を増し、内外の諸情勢を望見しつつ「帝国の危機」をさまざまに観念していくなかで日本国家を精神的に防護するという明確な目的意識に達し、マルクス・共産主義をはじめとする諸種の外来思想（非日本の思考）に対して過剰なまでの攻撃姿勢を示すようになる。そして二人は、意識せず互いに先を争つて、自分たちの学知の基幹となる「国文学」を国家／全体が必要とする行動理念、ものの見方・考え方を先驗的に提示する新たな「国学」——これを沼波は「新国学」、三井は「しきしまのみち（ことのはのみち）」と称した——へと変容させていった。沼波の「まこと」論や「日本精神」に関する講究、三井の「中今／永遠の今」論（究極の現状肯定）などは、その時々の當みから生まれた端的な成果といえる。

沼波と三井の学問・思想は、やがて彼らの搖籃の地である東京帝国大学の国文学研究室に還流し、芳賀門下の後輩であり文字通りの選良として國

<sup>(エリート)</sup>

文学界の将来を担う位地に在った久松潛一に直接・間接に影響を及ぼしたと考えられる（とりわけ前者）。学生時代から芳賀矢一や上田萬年（一八六七—一九三七）の方法論に忠実にしたがい資料蒐集と文献考証を積み重ね、実証的な研究を進めて来た久松の学問は、大正一四、五年頃、すなわち沼波によつて持ち込まれた国文学的ナショナリズムの種子が帝大國文のなかで芽吹き始めたまさにその時期に、明確な変化をみせ始める。国文学に関して厳密な時代区分とテクストクリティーカにこだわつたそれまでの知見とは趣の異なる、総合的・直感的な洞察を全面に押し出していくようになる。はたせるかな、彼の意識は、昭和期に入つてますます「国文学に於ける国学への志向」（<sup>2</sup>）を強めていつた。東京帝大教授としておのずから上意下達の構造的権威性（<sup>3</sup>）をまとつた彼の「新国学」言説は、とりわけ一〇年代、準戦時・戦時体制下の国民教化シーンにおいて有効に機能し得るものであつた。「新国学」、つまりそこは「日本民族の芸術観は常に事実の美化、真実化であり、現実の理想化である」（<sup>4</sup>）との認識において国家（大日本帝国）の現実・現状を『万葉集』等の古典にあらわされた文学的形象に即して「美化」「真実化」「理想化」する高次の政治的當為であり、「國家ノ須用ニ応スル學術技芸」としての近代官製国文学の戦前におけるある意味必然的な帰結に他ならなかつた。

## 二 今後の課題

本論文において、筆者は、近代日本の政治的文学者と国文学的ナショナリズムの諸相を鳥瞰的に論じたが、掘り下げが不十分と思われる点も少くない。以下に整理して今後の課題としたい。

第一に、東京帝国大学の国文学の土壤から生まれ、最終的に久松潛一の手で確立されるに至った「新国学」、これが同時代の他の「国学」論にどこまで支配的たり得たのかという横軸の問題である。例えば、東京帝国大学文学部美学美術史学科を卒業（昭九・三）しその独特的の美意識から「日本浪漫派」の驍将として存在感を發揮した保田與重郎（一九一〇—一九八一）は、久松一官学中央が主導する「新国学」の潮流をあえて無視するかのように、

明治の日本学は「国学とは何ぞや」の芳賀「矢一」博士の講演「明三六・一二、於國學院同窓会」によつて示されてゐる。それは平行線のまゝに決して日本学は完成されなかつた。「……」「国学とは何ぞや」の中では、宣長の後の国文学者の墮落を叫んでゐる博士の言はけふにして心すべきものであらう。日本の国学者は芳賀博士の日本学の建設を繼承する代りに、日本文化から落伍したのである。（<sup>5</sup>）

と述べ、その上で「明治維新の中途で挫折した精神を復活させ」る嘗みすなわち「日本の世界觀としての国学「日本学」の再建」（<sup>6</sup>）を訴えてゐる。本居宣長（一七三〇—一八〇一）に倣つてどこまでも純粹に「漢意を排斥」し西洋的なものを日本化する発想を「文明開化文化」として徹底的に否定した保田（<sup>7</sup>）と、「日本の立場に立つた上で、改めて西欧的なるものを吟味し、よきものを摂取し、これを同化すべきである。さうして日本の立場を中心とし根幹として世界性を得べきである」（<sup>8</sup>）と考えていた久松。一部の研究者も示唆（<sup>9</sup>）している両者の国学の象徴的な異質性（求

心的／遠心的）は、昭和一〇年代のいわゆる「文芸復興／古典復興」期の文學界・文壇<sup>(10)</sup>における「日本的なもの」に関する多様な言説<sup>(11)</sup>と併せて検討に値しよう。

第二に、國文學（日本文學）研究の現在的状況に接続する議論の不足である。「國家ノ須用ニ応スル學術技芸」という戦前の桎梏から解き放たれた戦後の國文学は、内に閉じたひと時の至福を経て、今再びその存在意義を外側に向けて闡明化する必要性に迫られている。國文學を含め多くの人文學研究者がリアルに感じている「社會ノ須用ニ応スル學術技芸」という新たな桎梏に対する“あせり”とその裏返しになる“使命感”<sup>(12)</sup>は、かつて芳賀矢一とその弟子筋に連なる沼波、三井、久松らが抱いていたそれと本質的に通じていると考える。

第三に、比較思想的な議論の不足である。例えば、三井甲之は自國の古典文學研究を基幹としそこから當時歐米最先端の「精神科學」と謳われたヴァント心理学などさまざまな分野の学知を取捨選択して独自の學問・思想体系を構築したわけだが、そうした在りようは、歐米でも、古典学と生理學・脳神經學を併せて学修し十九世紀末フランスにおける屈指の医科学者として反セム・反ユダヤ主義を前面に掲げたきわめて偏狭なナショナリズムを主唱したスーリー（Jules Soury, 1842-1915）などに特徴的な類似性を認めることが出来る<sup>(13)</sup>。本論文の意義を、單なる日本近代文學・思想史上のキワモノ研究として矮小化させないためにも、近代學問全体の病理といふ共時的な視座に立つた比較検討はすべからく必要であろう。

第四に、本論文で得られた知見が、二十一世紀の今日にあつてなお日本・アジア・歐米各国に潜在ないし顕在化している急進的ナショナリズム

の諸潮流（人種主義、排外主義、一国中心主義、地域霸権主義等）を検討していく上でいかに参考され得るか、その点に即した現代政治学的な議論の不足である。仮にナショナリズムが人類という巨大な有機生命体の体内各部に近代以降発症するようになつた腫瘍であつたとして、その悪性化（癌細胞化）を妨げる治療法の検討に積極的に活かさずしては過去の症例と組織サンプルの精密な検査・分析データも宝の持ち腐れ同然となる。

#### 注

(1) ところで両者の接点であるが、沼波の論著のなかに三井に関する格別の言及は見当たらない。一方で、三井は「近頃沼波瓊音氏の徒然草の講義が出て、それに序が沢山あるが「……」などと述べており、同じ東京帝大國文出身でしかも漱石とも親しい沼波の言説にはそれなりに注意を払っていたと考えられる。三井甲之「流行と信仰」(『日本及日本人』大二・五・一五)一一〇頁。

(2) 久松潛一「国文学に於ける国学への志向——国文学の動向——」(『国民精神文化』昭一三・三)二三頁。

(3) ここでいう「構造的權威性」の概念について政治社会学的に詳しく分析するいとはないが、例えば「今、売られている魚は安全です 東京都」とか「東大は賞を出すほうで、もらう方じやねえ！」といった言説には、そういうものの具体的な作用の一端を垣間みることが出来よう。なだいなだ『權威と權力——』いうことをきかせる原理・きく原理——』(岩波書店、昭和四九・三)一〇九頁。養老孟司「バカと天才の壁」(『バカ田大学講義録なのだ』文藝春秋、平二八・七)二〇一頁。

(4) 久松潛一『思想問題小輯 五／国文学と民族精神』(文部省、昭九・三)六二頁。

(5) 保田與重郎「明治の精神——勝利の悲哀——」(『文芸』昭一二・四) : 『保田與重郎文庫』三／戴冠詩人の御一人者』(新学社、平一一・四) 一一六三頁。

(6) 保田與重郎「日本の世界観としての国学の再建」(『近代の終焉』小学館、昭一六・一一) : 『保田與重郎文庫』九／近代の終焉』(新学社、平一四・一) 一一〇八頁。

(7) 保田與重郎「古典復興の真義(別題 嘴咽の哀歌)」(『公論』昭一六・九) : 『保田與重郎文庫』一二／万葉集の精神——その成立と大伴家持——』(新学社、平一四・一) 八三頁。同「国学と古典論の展開」(『古典論』講談社、昭一七・四) 六六、六七、八六、九五、一一九頁。橋川文三『日本浪漫派批判序説』(未来社、昭三五・二) .. 再版(講談社、平一〇・六) 四九頁。

(8) 久松潛一「国学・文芸学・日本学」(『理想』昭一三・九) : 『国学——その成立と国文学との関係——』(至文堂、昭一六・三) 一一七一、一一七三頁。

(9) 河田和子『戦時下の文学と〈日本的なもの〉——横光利一と保田與重郎——』(九州大学博士論文、平二〇・二) 一一三三、一三四頁。

(10) 周知の通り、日本の文学界・文壇において「文芸復興」なる概念が膾炙したのは昭和一〇(一九三五)年前後の数年間であるが、既に久松は、大正後期に、イギリスの文学者・ペイター(Walter Pater, 1839-1894) の *The Renaissance: Studies in Art and Poetry*, 1877. に刺激を受けて中・近世の世界文学における「文芸復興」の運動に着目し、その意義を「一の因襲に陥り頽廃的になつた世界から、よみかへつてくる素朴な純一な精神のひらめき」「分裂の中に統一を求める心の現れ」「古代精神の復興とともに現実に深く喰ひこまうとする近世的精神」とおさえた上で、日本の「元禄時代に於ける契沖〔一六四〇-一七〇一〕等の復古運動」すなわち「国学」の勃興に当てはめ学説化していた。久松潛一「元禄時代と文芸復興」(『国語と国文学』大一三・一〇) 五五一、五五三、五五六頁。河田前掲『戦時下の文学と〈日本的なもの〉』一一七頁。なお「文芸復興」イコール「古典復興」とは異なる視角から昭和初期の文壇で「文芸復興」が叫ばれた意味を考察した論考に、

平浩一『「文芸復興」の系譜学——志賀直哉から太宰治へ——』（笠間書院、平二七・三）がある。

(1-1) 久松も「一般的の傾向は日本文化に対する反省を高め、「……」昨年「昭一」頃から日本的なものといふ詞自身文壇の方でも用ゐられるやうになつた」と述べているよう、「日本精神」や「日本的なもの」に関する言論の動向には絶えず注意を払っていたと思われ、時には議論の中身が本質を欠いた観念の遊戯に終わらぬよう「我々が古典を研究するのは純粹日本的なものの内容を明らかにすることが一つの目的であるが、同時に日本的なものの創造されてゆく民族的方法態度、言はゞ古典精神を明らかにすることがより重要であるのではないか」と釘を刺すなどしている。久松潛一「国文学と日本的なもの——主として表現態度の上から——」(『中央公論』昭一二・六)一七八頁。同「源氏物語に見える日本的なもの」(『文學』昭一二・一〇)四〇三頁。

(1-2) 室井尚「国立大学改革と人文系の(明るくない)未来」(『現代思想／特集 大学の終焉——人文学の消滅——』平二七・一一)、西山雄二「人文学の後退戦——文科省通知のショック効果に抗つて——」(前同)等を参照。

(1-3) 菅野賢治『ドレフュス事件のなかの科学』(青土社、平一四・一一)一九〇—二四五頁。

# 初出一覧

## 序論

「近代日本における国文エリートの系譜学序説——沼波瓊音、三井甲之、そして久松潛——」（『政治経済史学』第五九〇号、政治経済史学会、平二八・三）

## 第一章第一節

「交錯する惑星——前期沼波瓊音と漱石——」（『九大日文』第二八号、九州大学日本語文学会、平二八・一〇）

## 第一章第二節

「国文学者は国家革新の夢を見たか——晚期沼波瓊音の思想と行動——」（『比較文化研究』第一一八号、日本比較文化学会、平二七・一〇）

## 第二章第一節

「三井甲之の初期思想形成に関する考察（Ⅰ）——反漱石とヴァント心理学の受容——」（『近代文学論集』第四〇号、日本近代文学学会九州支部、平二七・二）

## 第二章第二節および第三節の一部

「近代日本と親鸞思想——三井甲之の場合——」（『政治経済史学』第五四五号、政治経済史学会、平二四・三）

「三井甲之の初期思想形成に関する考察（Ⅱ）——親鸞思想の日本主義的受容——」（『近代文学論集』第四一号、日本近代文学学会九州支部、平二八・二）

## 付章

「近代官製国文学『幻の系譜』考——久松潛一と新国学の四大人——」（日本近代文学会二〇一六年度秋季大会発表原稿、平二八・一〇・一六）

「久松潛一論——その『新国学』形成における沼波瓊音、三井甲之の影響を中心にして——」（『近代文学論集』第四二号、日本近代文学学会九州支部、平二九・二）